令和２年度

文部科学省事業

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）

# 研究開発実施報告書（第２年度）

研究開発構想名

# 未病・防災～高齢者比率約４割の町で高校生が挑む少子高齢化

神奈川県立山北高等学校

# ～今を知り、未来を創造する～

神奈川県立山北高等学校
校 長　岩 本　明 子

文部科学省から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」に本校が採択され２年となりました。本冊子はこの２年目の実践をまとめたものです。ようやくお届けできるようになりました。どうぞ、御覧いただき、御助言・御感想をお寄せいただけたら幸甚にございます。

２年目となった令和２年度は、想定できなかったほどのCOVID-19の感染拡大があり、当初の計画を変更せざるを得なかった１年間となってしましました。そうした中で「アフターコロナ」「ウィズコロナ」を意識した計画に修正し、生徒の成長を促せるよう研究を一歩一歩進めることができたのは、県教育委員会、山北町をはじめとする様々な機関・企業・団体等に御指導、御協力をいただいたことが大きいと思います。あらためて、感謝申し上げます。

山北高校は、昭和17年に町立の女学校として地元の熱い思いから生まれた学校です。しかしながら、この研究が始まるまで、自分たちの学校が立地している地元、「山北町」に関心を寄せる生徒は多くはありませんでした。今回、この研究を進めていく中で「山北町の生活や仕事に興味がわいた」という言葉が生徒たちから出てきました。これは、生徒一人ひとりがテーマであった「山北町」を調べたばかりではなく、フィールドワークで山北町の方々と接したことから得られた心情だと思います。このように「ひととひととのふれあい」が自分自身を育てる、ということを生徒たちが体験的に学んだことは大きな収穫です。

今回の研究ではＳＤＧｓをベースに、超少子高齢化が全国より早く進んでいる山北町、多くの生徒の生活場面である神奈川県西部の自治体に対して政策提言ができることを目指してきましたが、２年が経過した今「この研究の過程にこそ大きな学びのチャンスが存在している」という実感があります。生徒が未来の姿を想像し、自らの未来を創造していく中で、どのように気づき、成長していくかを検証することは大切なことと思われます。

令和３年度、最終年度をいよいよ迎えます。令和３年１月26日には、中央教育審議会答申において「地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために、現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに重点的に取り組む学科」についての言及があり、年度末には学校教育法施行規則等の一部を改正する省令等が公布されました。山北高校ではこの研究が、目の前にいる生徒・将来の生徒に何を残せるかということを視点にさらなる取組の推進を図ってまいります。今後も御指導、御支援をお願いいたします。

# 山北高等学校 グランドデザイン

**学校教育方針**

着実に努力

## 山北高校は５つの力を育てます

Consider

**自他を思いやる力**

Challenge

**挑戦する力**

**学校教育目標**

① 自他の幸福を求める心と健やかな身体を育てる。
② 基礎的な知識・技能を身に付け、それらを活用して探究する力を育てる。
③ 地域と共にスポーツと文化活動に取組み、その意義と悦び、成果を地域に還元、
　　普及、発信する力を育てる。
④ 社会において果さなければならない使命を自覚し、個性に応じて将来の進路を
　　決定する力を育てる。
⑤ 他者理解を前提としたコミュニケーション力を育てる。

**協働する力**

Cooperate

**未来を切り拓く力**

Create

**伝わる力**

Convey

### 「5つの力」を育てる山高のリソース

| 教育課程・学習指導 | 生徒指導・支援 | 特別活動・部活動 | 進路指導・支援 | 地域等との連携 |
|---|---|---|---|---|
| ・教科横断型授業の推進<br>・文系、理系、スポーツ系のクラス展開<br>・ICTの積極的活用 | ・規範意識や自律心の醸成<br>・個に応じたサポート体制を担う教育相談環境 | ・高校生としての誇りと責任を生む「一人が一校を代表する」意識<br>・主体性を育む「部活動」 | ・全生徒一人ひとりの多様な進路実現に向けたガイダンスの実績、丁寧な個別指導 | ・地域との協働による、SDGｓ等今日的な課題解決能力の育成と地域人材の育成 |

# 目　次

○　巻頭言
○　山北高等学校グランドデザイン
○　目次
Ⅰ　研究開発の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　研究開発実施計画書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　研究開発概念図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　ロジックモデル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
Ⅱ　令和２年度の研究開発の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
Ⅲ　取組概要 ～未来へ向かう探究のキセキ～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　１　総合的な探究の時間「未来探究」（１学年）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　（１）　山北　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　（２）　未病　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
　（３）　防災　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　（４）　フィールドワーク ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
　２　総合的な探究の時間「未来探究」（２学年）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
　（１）　My プロジェクト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
　（２）　フィールドワーク ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
　３　学校設定教科「あしがら」（２学年）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
　（１）　学校設定科目「未病」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
　（２）　学校設定科目「地域防災」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
　４　校内発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
　（１）　学校設定教科「あしがら」コース別校内発表会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
　（２）　未来探究校内発表会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
　５　ＲＥＳＡＳの活用　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
Ⅳ　研究開発実施の効果と評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
　１　研究開発目標の効果と評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
　２　地元への興味・関心及び探究的学びに関するアンケート調査・・・・・・・・・・・・・・・81
　３　未来探究の学習指導における一般教科への影響　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
　４　カリキュラム開発等専門家の視点からの評価と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
Ⅴ　関係資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　１　運営指導委員会
　２　山北未来コンソーシアムについて
　３　目標設定シート
　４　国立教育政策研究所インタビュー記録
　５　学校だより「山高」（山北町内全自治会に向け回覧用として配付）
　６　広報「やまきた」令和２年 12 月号掲載（地域に向けての取組紹介）

# Ⅰ　研究開発の概要

## Ⅰ　研究開発の概要

令和２年度　研究開発実施計画書

１　指定校名・類型

学校名　　神奈川県立山北高等学校

学校長名　　藤田　正樹

類型　　地域魅力化型

２　研究開発名　　未病・防災～高齢者比率４割の町で高校生が挑む少子高齢化

３　研究開発の概要　　教育課程の中心に総合的な探究の時間を据え、地域課題に係る問題解決学習に取り組む。探究の手法を学び、コンソーシアムの協力を得ながら地域課題を探究し、検討した課題解決方法を自治体に提案、実現を目指すことにより、地域人材の育成を図る。
また、学校設定教科・科目を設置し、外部機関との連携を図る教育を展開する。

４　学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用

ア　学校設定教科・科目を開設している

イ　教育課程の特例の活用している

５　事業の実施期間

契約日～　令和３年３月 31 日

６　令和２年度の研究開発実施計画

①　探究活動を通して、課題を発見、設定し、解決する力を育成する。

○　各自が自らできることを考え PBL の核となる「自分事としての課題設定」ができるようにファシリテートしていく。

・　職員研修会の実施。（２回の研究授業）

・　外部研修会や本事業指定校が実施する研究発表会への職員及び生徒の派遣。

○　１学年最後・２学年当初に生徒が挙げた「マイプロジェクト」について、主体的、協働的に探究プロセスを積み重ねていく中で、実現可能な解決策を具現化していく。

・　課題設定の適正審査、生徒発表の機会の拡大。

・　町や町議会関係者等をはじめとして県内外から関係者を招き、高校生が挑んだ少子高齢化対策の政策提案発表会を開催。

②　コンソーシアムとの協働により、地域の活性化や町の課題解決につながる取組を生徒に意識させ、活動できるよう指導する。

○　コンソーシアムの拡大と内容の充実を図る。（２回のコンソーシアム連絡会議）

・　協力団体と連携したコンソーシアムの取組の組織化。
・　インターンシップの場面などで活用する。

○　学習指導計画立案の段階から協働を進め、地域課題解決に向けた地域との一体的な取組をより一層進める。

・　小中学校等との連携。
・　カリキュラム開発等専門家との協働によるカリキュラム開発。「教科横断的な授業展開計画表」の作成と実践。
・　地域協働学習実施支援員の一層の活用。

○　生徒が学習体験を自分事とし、地域社会へどのように還元していくかなど実際的な活用を前提に思考・実践できるようにする。

・　地域人材の講演会の開催、フィールドワークの実施。
・　アウトプットの力を伸ばすために発表機会の増加。
・　各自のマイプロジェクトの見直し。

③　学校設定科目「未病」「地域防災」「山北」の系統的な結び付きにより育成できる生徒の力を検証する。

○　「未病」「地域防災」「山北」の学習に際して、各教科・科目における学習との関連を踏まえたものとするとともに、これらの学習成果を「未来探究」における探究的活動に結び付け、教科横断的な学習活動を展開する。

○　前年度に身に付けた探究的な活動を各教科・科目においても展開し、深い学びにつながる学習活動を推進する。

・　学習支援Ｇ主導で、全校的に教科横断的な指導計画を立案。

○　学習活動や連携の取組を体系的に整理する。

・　連携推進Ｇと地域協働学習実施支援員で協働し、方向性を整理。

7　事業実施体制

| 課題項目 | 実施場所 | 事業担当責任者 |
|---|---|---|
| 「総合的な探究の時間」の活用 | 山北高等学校 | 山北高等学校<br>校長　藤田正樹 |
| コンソーシアムにおける研究開発 | 山北高等学校 | 山北高等学校<br>校長　藤田正樹 |
| 研究成果報告・事業成果の検証 | 山北高等学校 | 山北高等学校<br>校長　藤田正樹 |
| 「成果指標等の作成及び検証」 | 山北高等学校 | 山北高等学校<br>校長　藤田正樹 |
| 専門家等アドバイザーとの協働によるカリキュラム開発 | 山北高等学校 | 山北高等学校<br>校長　藤田正樹 |
| 運営指導委員会の開催による課題の整理と事業計画の作成 | 神奈川県教育委員会 | 高校教育企画室<br>川端　麻穂 |

運営指導委員会の体制

| 氏名 | 所属・職 | 備考 |
|---|---|---|
| 石田　浩二 | 山北町教育委員会<br>教育長 | |
| 羽入田　眞一 | 早稲田大学<br>教育・総合科学学術院教職大学院客員教授 | |
| 小村　俊平 | 日本イノベーション教育ネットワーク（協力 OECD）事務局長 | |

高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

| 機関名 | 機関の代表者名 |
|---|---|
| 山北町 | 町長　　湯川　裕司 |
| 国立教育政策研究所教育政策・評価研究部 | 部長　　渡辺　恵子 |
| 有限会社小田原ドライビングスクール | 社長　　秋山　実 |
| 株式会社ベネッセコーポレーション | 営業本部長　　吉野　隆弘 |
| 山北町観光協会 | 会長　　佐藤　精一郎 |
| 山北町商工会 | 会長　　松澤　大輔 |
| ＪＡかながわ西湘山北支店 | 支店長　　臼井　範雄 |
| 山北町都市農村交流活性化推進協議会 | 会長　　山田　肇 |
| 松田ゆいスポーツクラブ | 理事長　　松下　朗大 |
| 南足柄みらい創りカレッジ | 代表理事　　樋口　邦史 |

カリキュラム開発専門家、地域協働学習実施支援員

| 分類 | 氏名 | 所属・職 | 雇用形態 |
|---|---|---|---|
| カリキュラム開発専門家 | 後藤　健夫 | ﾌﾘｰｼﾞｬｰﾅﾘｽﾄ | 都度雇用 |
| 地域協働学習実施支援員 | 加藤　陽一郎 | 開成町教育委員会<br>社会教育指導員 | 都度雇用 |
| 地域協働学習実施支援員 | 高杉　光男 | 山北町<br>農業委員 | 都度雇用 |
| 地域協働学習実施支援員 | 藤原　浩 | 山北町都市農村活性化協議会事務局長 | 都度雇用 |
| 地域協働学習実施支援員 | 唐牛　彩花 | 山北町商工会経営支援担当職員 | 都度雇用 |

８　課題項目別実施期間

| 業務項目 | 実施期間（契約日　～令和３年３月 31 日） | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 「総合的な探究の時間」の活用 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 | 1 月 | 2 月 | 3 月 |
| | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| コンソーシアムにおける研究開発 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 | 1 月 | 2 月 | 3 月 |
| | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 研究成果報告・事業成果の検証 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 | 1 月 | 2 月 | 3 月 |
| | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 「成果指標等の作成及び検証」 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 | 1 月 | 2 月 | 3 月 |
| | ○ | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ |
| 専門家等アドバイザーとの協働によるカリキュラム開発 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 | 1 月 | 2 月 | 3 月 |
| | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 運営指導委員会の開催による課題の整理と事業計画の作成 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 | 1 月 | 2 月 | 3 月 |
| | | | | | ○ | | | | ○ | | |

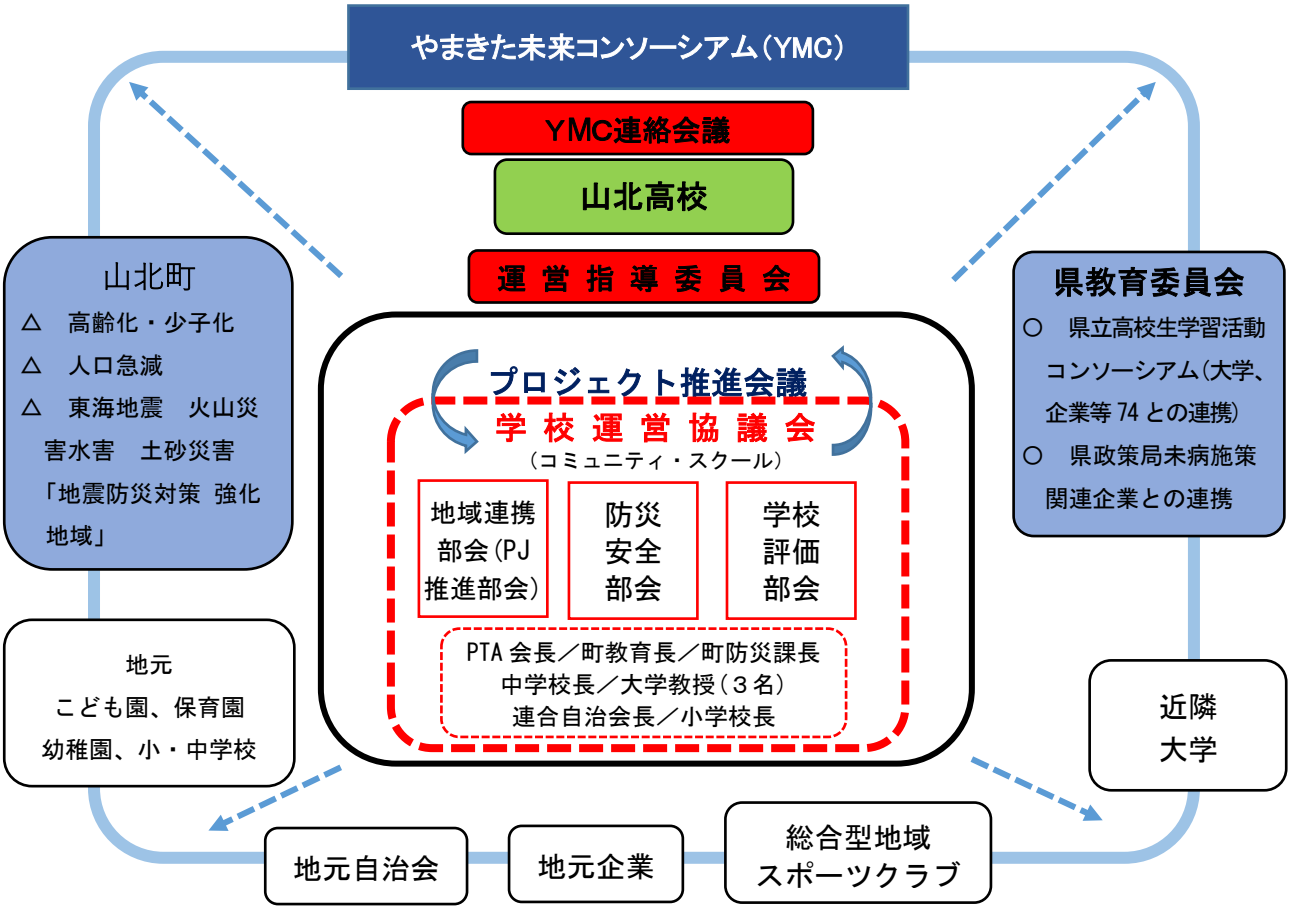
【研究開発概念図】

# 未病･防災～高齢者比率4割の町で高校生が挑む少子高齢化

【研究目標】

○　高齢者とともに住民皆が健康で安全・安心な町づくり

○　コンソーシアムとコミュニティ・スクールを活用した地域人材育成のための教育課程（山北スタンダード）の開発　⇒　地域から社会を支え、問題解決に取り組む生徒の育成




## 探究活動

### アプローチ

**未病**（SDGs3 健康）　**防災**（SDGs11 まちづくり）

1学年　探究手法の習得（フィールドワーク）

○　総合的な探究の時間「**未来探究**」（SDGs を意識して）
○　情報スキルの習得
○　教科横断による地域学習

2学年　町の課題発見、解決策の提案（フィールドワーク）

○　総合的な探究の時間「**未来探究**」
○　学校設定科目「**未病**」「**地域防災**」「**山北**」

3学年　提案実践、改善策の検討→町への政策提案

○　総合的な探究の時間「**未来探究**」

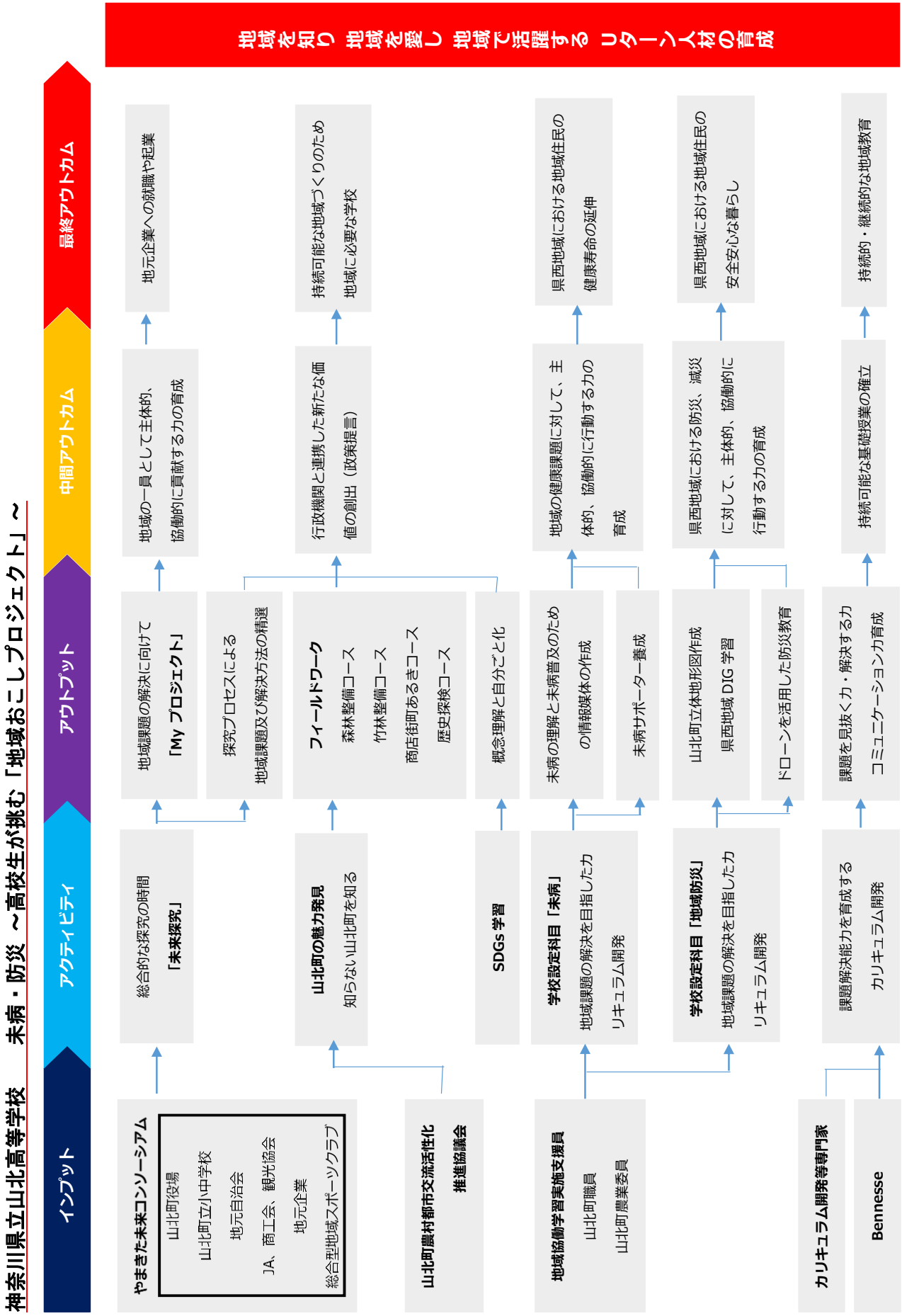
すべての教科・科目との関連付け（教科横断学習）

生徒主体の特別活動（生徒会活動・学校行事）と地域行事（防災訓練、自治会主催行事等）とのコラボ

ＩＣＴを活用したデータ分析・応用

部活動等による生徒主体の幼保小中との交流

【ロジックモデル】


神奈川県立山北高等学校　未病・防災 ～高校生が挑む「地域おこしプロジェクト」～
地域を知り 地域を愛し 地域で活躍する リターン人材の育成
インプット
アクティビティ
アウトプット
中間アウトカム
最終アウトカム
やまきた未来コンソーシアム
山北町役場
山北町立小中学校
地元自治会
JA、商工会、観光協会
地元企業
総合型地域スポーツクラブ
総合的な探究の時間
「未来探究」
地域課題の解決に向けて
「My プロジェクト」
地域の一員として主体的、
協働的に貢献する力の育成
地元企業への就職や起業
山北町農村都市交流活性化
推進協議会
探究プロセスによる
地域課題及び解決方法の精選
山北町の魅力発見
知らない山北町を知る
フィールドワーク
森林整備コース
竹林整備コース
商店街町あるきコース
歴史探検コース
行政機関と連携した新たな価
値の創出（政策提言）
持続可能な地域づくりのため
地域に必要な学校
SDGs 学習
概念理解と自分ごと化
地域協働学習実施支援員
山北町職員
山北町農業委員
学校設定科目「未病」
地域課題の解決を目指した力
リキュラム開発
未病の理解と未病普及のため
の情報媒体の作成
未病サポーター養成
地域の健康課題に対して、主
体的、協働的に行動する力の
育成
県西地域における地域住民の
健康寿命の延伸
学校設定科目「地域防災」
地域課題の解決を目指した力
リキュラム開発
山北町立体地形図作成
県西地域 DIG 学習
ドローンを活用した防災教育
県西地域における防災、減災
に対して、主体的、協働的に
行動する力の育成
県西地域における地域住民の
安全安心な暮らし
カリキュラム開発等専門家
Bennesse
課題解決能力を育成する
カリキュラム開発
課題を見抜く力・解決する力
コミュニケーション力育成
持続可能な基礎授業の確立
持続的・継続的な地域教育

# Ⅱ　令和２年度の研究開発の内容

## Ⅱ　令和２年度の研究開発の内容

≪研究開発の内容や地域課題研究の内容について≫

○　総合的な探究の時間「未来探究」の取組＜１学年＞

- 「山北」「未病」「地域防災」の３単元に分けてグループ学習を実施、最終週ではクラス内で各グループによる成果発表会を実施した。
- 「山北」については、夏季休業中に「自分の住む地域の課題とその解決策」についての調べ学習をグループごとに実施、夏季休業明けに各クラスで発表した。２学期には、「地域経済分析システム(RESAS)」を用いて山北町の産業等について調べ、町の魅力や課題について分析するとともに、活性化のための手立てをグループワークで考察し、成果発表会を実施した。
- 「未病」については、「未病という概念をどのようにして他者に伝えるか」ということについて発表媒体をグループワークで考察し、成果発表会を実施した。
- 「地域防災」については、「やさしい日本語」、「DIG 研修」、「応急手当」の３つの単元に分けてグループワークを行い、グループでの発表会を実施した。
- 山北町都市農村交流活性化推進協議会の協力の下、体験プログラム（「森林セラピー」「農業体験」「生涯学習センターにおける体験学習」）すべてを巡るフィールドワークを実施し、「気づいたこと・興味を持ったこと」「山北町の魅力」「山北町の課題」「課題の解決策」の４項目についての学習成果をポートフォリオ課題として配信・回収した。
- 生徒一人ひとりが「My プロジェクト」を持ち、課題解決に向けた学習を推進した。
- それぞれの My プロジェクトを６カテゴリー（①住みやすい町、②人口減、③高齢化・医療福祉、④特産品、⑤地域活性・魅力化、⑥観光・集客）に分け、ゼミ形式で学習を展開した。
- My プロジェクトに関するフィールドワーク（11 月 14 日）を、県西地域全体を学びの場として実施した。なお、事前指導は外部講師を招いて実施した。
- My プロジェクト発表会（３月）を実施した。

○　学校設定教科「あしがら」、科目「未病」「地域防災」の選択で実施＜２学年＞

- 「未病」では、「東洋医学コース」「未病普及コース」の２コースから、「地域防災」では、「DIG コース」「HUG コース」「酒匂川未来コース」の３コースから選択させ、実施した。
- 未病の学習で、総合型地域スポーツクラブ松田ゆいスポーツクラブと協力し、地域の幼児、児童とその保護者（約 30 名）を対象に、未病に関わる地域イベントを開催した。
- 「未病」、「地域防災」のコース別発表会を実施した。（12 月 17 日）

○　地域協働学習に関わる校内発表会・講演（２月４日）

- 地域課題の解決に向けて、より実践的なプロジェクトである 12 チームによる代表発表とした。（各クラスで事前に収録した動画を視聴、教員は各発表を観点ごとに評価）
- 露木志奈氏（環境活動家）によるオンライン講演会（テーマ「今、世界中で何が起きているのか　～私たちだからできること～」）を実施した。

≪地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け≫

○　１学年では、１単位であった「未来探究」の充実を図り、２単位に増単して設置した。

- 前年比１単位増加により、先行的に「山北」を学習、２学年で学習する「未病」「地域防災」についての導入的な学習の充実を図り、適切な科目選択に資した。

○　２学年では、学校設定教科「あしがら」に学校設定科目「未病」、「地域防災」（２単位）を、解決実践に向けてのプランを作成するため「未来探究」（１単位）を設置した。

・　「未来探究」のゼミナールで専門的な学びを深め、探究活動を進めた。

○　令和３年度３学年では探究活動のまとめとして成果発表及び政策提言を実施する予定である。

**≪地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について≫**

○　教科横断的な授業計画を学校全体の取組として体系化し、各教科が情報を共有した。

○　様々な教科で課題解決したことを活用できる教科横断的な探究活動を実施していくために、科目の異なる複数の授業において思考力を高める授業展開を目標として定めた。

○　探究活動で得た知見を各教科の学習に生かすことができるよう「未来の山北高校を探究しよう」をテーマに、カタパルト株式会社の協力により職員研修を実施した。（１月５日）。

**≪地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメント推進体制≫**

○　授業改善のテーマを「生徒の思考力を高める授業展開」として校内研修を実施したところ、生徒自らがその意図を理解し、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。

**≪学校全体の研究開発体制について（教員の役割、それを支援する体制について）≫**

○　組織再編を実施し、資源を生かしながら協働を通して、目的達成のために自らの意志を持って継続的に事業運営を行う学校組織を構築した。

○　定期的な事業研究会議を実施することで、コンセプトを共有し、各セクションの進捗状況の確認を行うとともに、学校運営協議会を有効に活用し、意見を取組に反映させた。

○　生徒を地域が育てる「チーム学校」という発想を地域の方々や山北町町議会と共有した。

**≪カリキュラム開発専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて≫**

＜カリキュラム開発専門家＞

○　授業参観を通して、単元の中で示された学習活動の展開への指導・助言。

○　学年会議、コンソーシアム連絡会議への出席や授業参観後の進捗状況等に関する協議に参加し、本事業全体の監修と教育課程全般について指導・助言。

＜地域協働学習実施支援員＞

○　校内の企画及び学年会議、コンソーシアム連絡会議等への参加。外部人材、団体（学校関係、地域住民関係、企業関係）の活用に向けた連絡・調整。

○　授業に参加し、学習に関わる「学びの場」を提供するための連絡・調整を行った。

**≪学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて≫**

○　連携推進グループが研究開発を立案、学習支援グループが計画・実施に向けて調整・管理、キャリア教育グループが探究活動を生かした進路指導に連結させる指導体制とした。

○　学校を核とした地域協働活動に山北町とともに着手し、その充実を図るために、外部の人材を活用した取組を推進し、改善につなげた。

**≪カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について≫**

○　有限会社小田原ドライビングスクールの協力の下、学校設定科目「地域防災」などで活用する

ドローンについて操縦方法や法律的なルールを学ぶ授業展開を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、今年度の実施については見送りとした。

○　総合型地域スポーツクラブ松田ゆいスポーツクラブには、未病に関わる講演会の実施や、生徒の課題解決の設定から整理・分析に加わっていただき、探究活動へ協力していただいた。その他、山北町役場や山北町議会にも本校の取組を伝達し、生徒の考えた町の課題に対する施策を提言として町議会議員へ発表した。

**≪運営指導委員会等、取組に対する指導・助言等に関する専門家からの支援について≫**

○　早稲田大学教職大学院客員教授羽入田眞一氏、山北町教育長石田浩二氏、OECD 日本イノベーションネットワーク事務局長小村俊平氏を運営指導委員に委嘱した。

○　第１回「令和元年度の活動報告及び令和３年度の活動計画について」（７月 21 日）

・　新型コロナウイルス感染症感染拡大防止策として、神奈川県のガイドラインを遵守しながら、地域とともに、生徒の主体的な関わりを推進することについて協議し、広報活動と外部団体の設立に注力することを決定した。

○　第２回「令和２年度の活動報告及び令和３年度の活動計画」について（３月 12 日）

・　令和２年度研究開発完了報告書についての指導・助言をいただき、令和３年度の活動方針について確認した。

**≪類型毎の趣旨に応じた取組について≫**

○　コンソーシアム団体の協力により、森林セラピー、史跡巡検、農業体験及び生涯学習センターで地元食材、教材を使った体験学習など、山北町フィールドワークを実施した。

○　My プロジェクトに関わるフィールドワークでは、県西各市町の市役所及び町役場や近隣道の駅、飲食店等県西地域全体を学びの場としたフィールドワークを実施した。

○　地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組として、地域における地域ならではの新しい価値の創造に向け、地域をよく知りコミュニティを支える人材育成を行った。

○　本校の特色ともいえる「スポーツの山北」の良さを継承した形で「未病」や「地域防災」の学びを通じ、高齢者比率４割の山北町の課題解決に取り組んだ。

○　１年生では山北町の現状理解と課題発見につなげる学習を行い、２年生では課題の解決方法をより実践的な「地域おこしプロジェクト」として深化させる学習を行った。

**≪成果の普及方法・実績について≫**

○　令和２年 12 月 17 日に２学年において探究学習コース別発表会を実施した。山北町町議会議員、学校運営協議会委員、コンソーシアムに関わる方々など外部より 17 名が参加した。

○　令和３年３月 23 日、県教育委員会主催の県西地区探究学習に係る成果発表会において、地区内の高校を対象に、本研究の成果を代表生徒がポスターセッション形式で発表した。

○　令和３年２月４日に１・２学年合同で、地域協働学習に関わる校内発表会を実施した。地域課題の解決に向けて、より実践的なプロジェクトである 12 チーム（各学年６チーム）による代表発表及び露木志奈氏（環境活動家）によるオンライン講演会（テーマ「今、世界中で何が起きているのか　～私たちだからできること～」）を実施した。

○　２学年の未病に関わる継続的な探究活動の取組については、令和２年 12 月にテレビ神奈川で報道された。

# Ⅲ　取組概要

## ～未来へ向かう探究のキセキ～

## Ⅲ　取組概要　～未来へ向かう探究のキセキ～

### １　総合的な探究の時間「未来探究」（１学年）

ア　目　的

各教科、科目等で身に付けた見方・考え方を働かせ、地域社会における生活と SDGs との関わりの中で、主体的・協働的に課題を発見し、解決する過程を通して、自己肯定感や、着実に努力する姿勢・力を育み、地域貢献できる人材を育成する。

イ　日　程

令和２年４月１日～令和３年３月 31 日

ウ　対象生徒

１学年　196 名

エ　活動の概要

a　山　北

RESAS を用いて、山北町について調べ、山北町の魅力や抱えている課題を発見し、町の魅力をより効果的に伝えるために、そして課題を解決するための手段を考えて、グループ毎に発表するという流れで授業を実施した。

１、２時間目では、魅力のある都市とは何かを考え、実際に地方創生に取り組んでいる他県の例を取り上げ、山北町をどのような存在にしたいのかを考えさえた。次の時間からは、RESAS を用いて、「人口」「地理」「産業」「観光地」「特産品」「雇用」「医療・福祉」「公共事業の状況・公共施設の利活用」の８つのテーマについて調べ、必要があればインターネット等で情報を収集した。８つのテーマから興味・関心を持った分野を選び、魅力や問題点を発見し、問題を解決している地方自治体・企業の先行事例を探しながら、問題点を解決するアイデアを考え、最後の時間では、グループ毎にスライドで発表した。

b　未　病

未病についての概要を学習した上で、個人でテーマを決めて、その内容について調べた。次に、同じテーマ同士でグループを作り、設定したテーマに沿って、「未病」という概念を分かりやすく他人に伝えるための効果的な方法について考え、その成果を発表するという流れで授業を実施した。

１、２時間目では、未病の定義及び県西地区で実際に行われている未病の取組について学習をした。その後、生徒が日々の生活で気になることを書き出し、その中で未病に結びつくテーマを個人で設定し、設定したテーマに基づいて図書室やインターネット等を用いて調べ学習を行った。

３、４時間目では同じ系統のテーマを掲げた者同士でグループを作り、未病という概念を効果的に伝えるための媒体や、何を伝えたいのか等を考え、実際に伝えるための媒体を制作した。最後の時間では、グループ毎に調べた成果や実際に制作した内容について発表し、未病についての知識を共有し、理解を深めた。

c　防　災

「やさしい日本語」「DIG 研修」「応急手当」の単元のオムニバス形式で行った。「やさしい日本語」では、「やさしい日本語」が生まれた背景やルールについて学習し、その後、実際にグループに分かれ「やさしい日本語」のポスターを作成した。「DIG 研修」では、山北高校周辺の避難所を探し、災害時に危険な場所を想定し、高校にいる際に災害に遭遇したらどのように行動するのかを個人で考えた。その上で、山北町の防災上の「メリット」「デメリット」について考察し、グループ毎に発表した。「応急手当」では、災害時における要救助者への対応を想定し、応急手当の基礎的な知識を身に付けた。さらに、心肺蘇生ＡＥＤ人形を用いて、心肺蘇生を実際に行い、緊急時に迅速に行動できるよう意識付けをする授業を行なった。

d　フィールドワーク

「森林セラピーコース」「生涯学習センターコース」「農業体験コース」をクラス毎にローテーションで回り、山北町について学習を深めた。「森林セラピーコース」は未病と関連を持たせたコースで、山北駅付近から河村城址まで歩き、適度な運動と未病の関係性について学んだ。「生涯学習センターコース」では「竹ぽっくり制作」「竹切体験」「竹弓作り」「ゆずジュースづくり」から２種類選択して体験し、山北町の名産品や産業について学習した。「農業体験コース」では、農場まで歩きながら、防災対策について学習し、また、実際にゆずを収穫して山北町の農業や特産品について理解を深めた。

オ　成果及び評価

「山北」では、RESAS を導入したことにより、生徒は信憑性の高い資料を扱うことの重要性を理解し、客観性の高い調べ学習を行うことができた。

「未病」では、初めに個人の興味・関心に沿って、「未病」の概念を学習したことにより、誰に対して、どのような発信方法がより効果的な普及・啓発につながるのかを考えて表現媒体を作成することができた。生徒は説明対象や説明内容に合った様々な表現方法があることを知るとともに、自身の興味・関心をより深めることができた。

「防災」では、様々な視点から、広く防災に関して学ぶことができた。このため、今までは生徒の考えが及ばなかった日常生活の中にある防災意識を向上させるとともに共有化を進めることができた。

１学年では、「情報収集」「資料分析」の力を身に付けることができた。また、教員の授業運営に関しても、１学年は「山北」「未病」「防災」で各担当者を決め、オムニバス形式で授業を実施したことにより、各担当の負担を軽減し、内容を充実させることができた。これは、初めて「総合的な探究の時間」に関わる教員でも、各々の教科の専門性や知識を生かしながら授業を行う工夫が奏功したと考えている。

カ　今後の課題

今年度、１学年の指導において主に二つのことを意識した。

一つは、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」といった一連の「探究のサイクル」を回してみること、もう一つは、「まとめ・表現」で様々な表現方法とその効果的な活用方法を学ぶことを目標に取り組むことである。

この中で、「課題の設定」「まとめ・分析」、特に、「課題の設定」の指導が不十分であった。調

べれば分かる内容をテーマとして設定している生徒が多く、また、今年度は緊急事態宣言が発令されている中で、生徒は自宅学習において「課題の設定」についての学習を行わざるを得ない状況だった。そのため、「調べ学習」と「探究的な学習」の違いが分からないまま、一年間が終わってしまった生徒もいた。

したがって、今後の課題としてはまず、「調べ学習」から脱却し、「探究活動」になるように「課題の設定」に時間をかける必要がある。また、「まとめ・分析」においても、発表をすることに慣れていない生徒が多いため、「人に伝わる発表とは何か」を考え、十分に準備をした上で発表に臨めるような活動を取り入れることが必要である。次年度は、今年度不十分であった「課題の設定」「まとめ・分析」を重点的に授業で行っていきたい。

「課題の設定」における教員の課題は、「地域が抱えている課題や問題点（Need)」と「生徒の興味・関心（Will)」のバランスが取れた探究活動となるような指導方法を確立することである。このためには、生徒が伸び伸びとアクションを起こせるように、生徒の興味・関心に沿ったフィールドワークを実施することや、生徒の発案を実現に導く環境を作っていくことが必要である。また、フィールドワークに参加する際に身に付けた一般的なマナー等を、進路指導に結び付けていくことも今後、積極的に取り組んでいきたい。

## （１）　山北

ア　目　的

・　課題発見、考察、分析、検証を通して論理的思考を身に付けたり、グループでの活動を通してチームワークやコミュニケーション力を身に付ける。

・　教科の枠を超えて、生徒が社会に出てから必要とされる力や経験を養う。

・　地方創生を「自分事」として考えて課題解決していく姿勢を養う。

・　３年間の探究活動を通して地域創生の課題に取組、最終学年では、山北町に政策提言を予定しているので、その第一歩としての取組とする。

・　１学年では約８時間の授業時間で山北町の課題（高齢化による未病、防災、地域創生）及び魅力を発見し、２学年及び３学年の探究活動につなげる。

イ　対象生徒

実施学年：令和２年度入学生（１学年）196 名

教科：総合的な探究の時間「未来探究　山北」

単元　：地方創生をテーマとした総合的な探究の時間

ウ　活動内容

「RESAS　de　地域探究」に応募し『RESAS for Teachers』の副教材、地方のチェンジ・メイカー育成プログラムを参考に学習指導案を作成し以下のように実施した。授業は毎回２時間連続で行い４日間で行った。

また、この取組の成果を２つの発表会で披露した。

（参加生徒　１年１組　井上せな　酒井真奈美　中老綾）

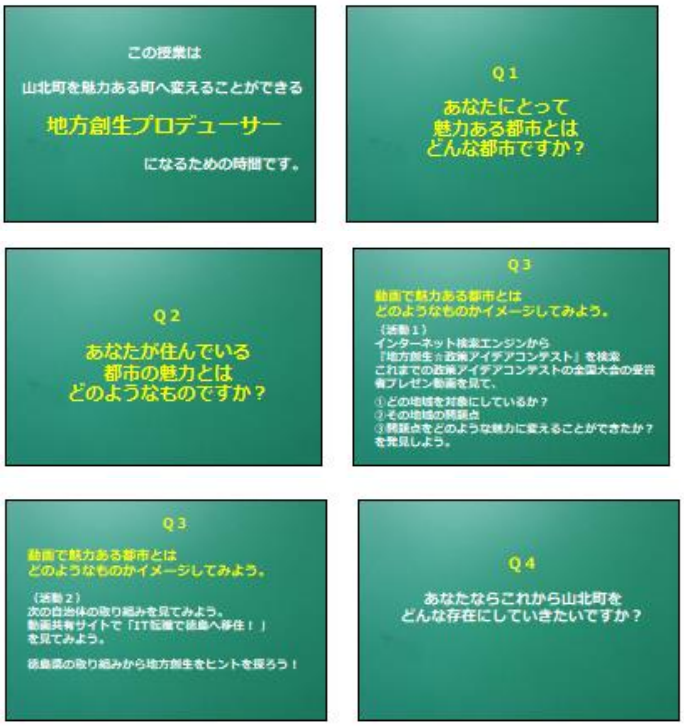
参加した発表会

●第１回 Grass Roots Innovator Contest in Kanagawa　　2020 年 11 月 22 日（日）

●探Ｑ！RESAS「RESAS de 地域探究」実践校による成果発表会　2020 年 12 月 13 日（日）

**～はじめに（導入）～**

授業の目的、目標を理解させながらＱ１～Ｑ４をグループワークもしくは個人ワークで行い、ターゲットとする山北町について考えさせた。




～探究テーマとする山北を町設定しよう～

山北町について改めて考えさせることで、興味・関心や疑問点を持たせる。自分の住んでいるところや将来自分が住む町などと神奈川県山北町を関連付けることを意識させた。

自分が住みたい町や、住んでみたい町をイメージし、その魅力を考えさせた。山北町は現在、人口が一万人を下回っており、他地区との比較をさせ、その原因などについて考えさせた。また、RESAS を活用して人口が減少しているのか、または維持しているかなどをデータから読み取り視覚で考えさせた。

～山北町について調べよう～

山北町について８つのテーマ（人口、地理、産業、観光地、特産品、雇用、医療福祉、公共事業の状況・公共施設の利活用）について調べ、興味を持ったテーマを選択し、探究テーマを設定させる。

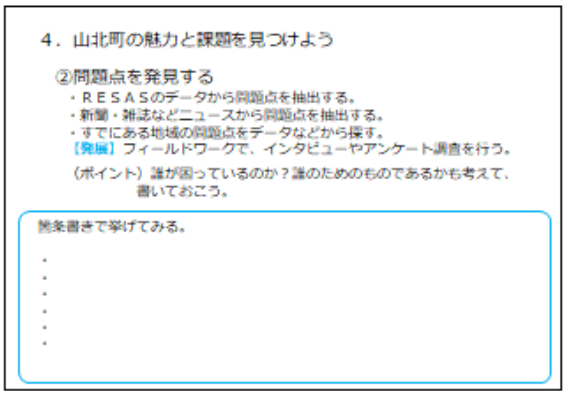
## ～山北町の魅力と課題を見つけよう～

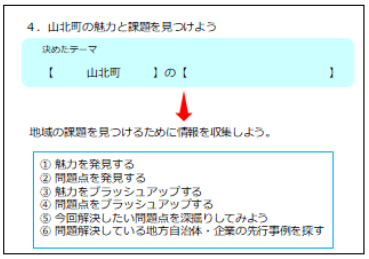
「魅力を発見する。問題点を発見する。」決定したテーマについて、より深い情報を収集させる。

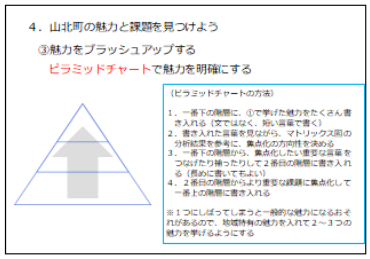
①各グループでブレインストーミングを行い、魅力や問題点を書き出し一枚にまとめ、全体で情報共有し、深堀りさせた。

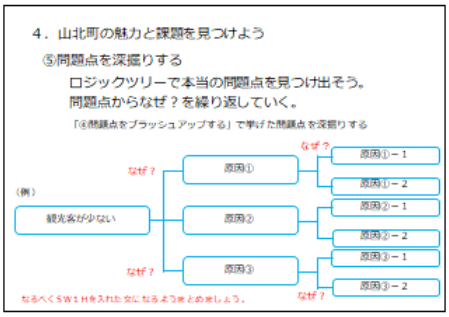
②ワークシートに沿って、５Ｗ１Ｈを意識しながら調べさせ、山北町の魅力及び問題点についてブラッシュアップし、ピラミッドチャートを活用して情報を深め、焦点化を進め、また、ロジックツリーを使って本当の問題点を追究させた。

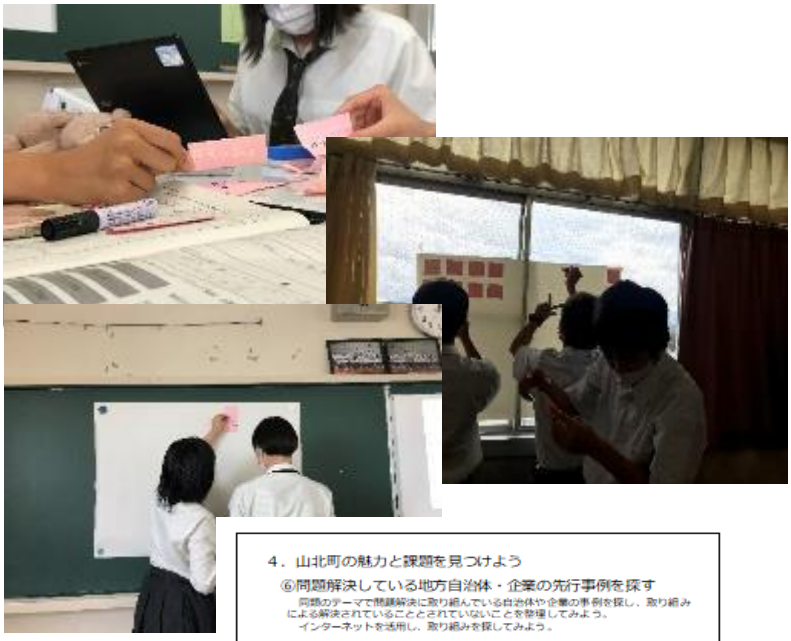
③問題を解決している地方自治体・企業の先行事例について調べさせた。



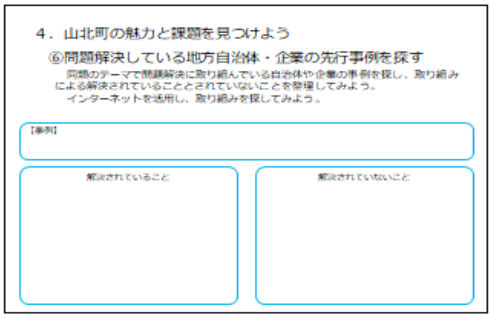



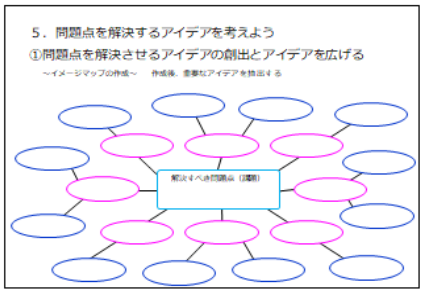



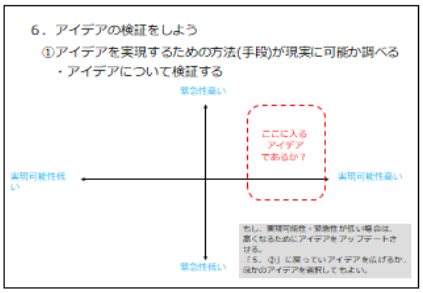
## ～問題点を解決するアイデアを考えよう～

問題点を解決させるアイデアの創出とアイデアを広げるイメージマップを作成させる。

ブレインストーミングを行う際に、多くのアイデアをグループで出し合い、他者の意見を受け入れることに留意させた。イメージマップをもとにこれまで考えたアイデアを整理し、魅力や問題点をグループでまとめ、解決策を考えさせた。





～アイデアを検証しよう～

アイデアを実現させるための方法（手段）が現実に可能か調べさせる。

次の三点について検証させる。

①具体的な方法（手段）

②実現するための資金・場所・運営方法

③実現するための壁（障害）問題点

また、アイデアの証拠（根拠）を見つけ、アイデアを整理させた。

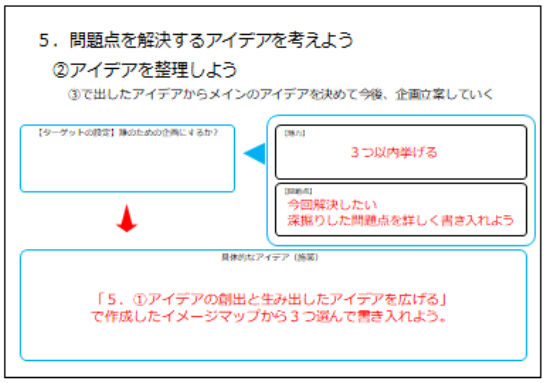
①座標軸を活用し、アイデアを確認する。

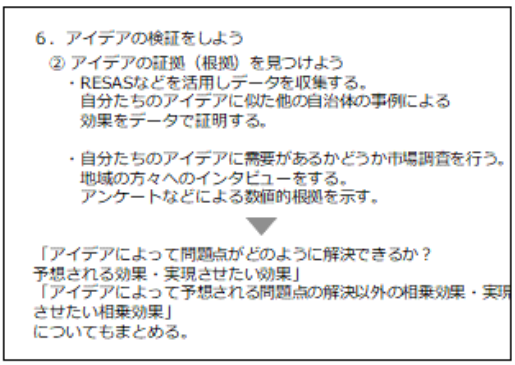
②ピラミッドチャートを活用し実現方法を深める。

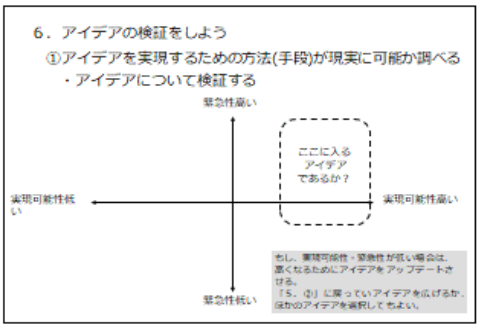
③ワークシートに箇条書きで挙げる。

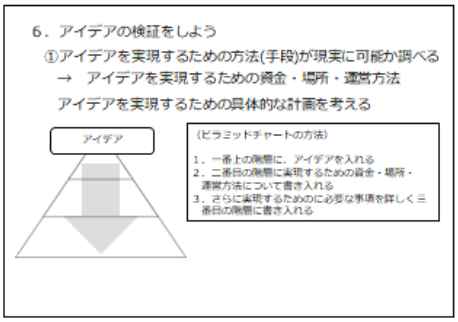
④RESAS などのデータを活用し証明する。

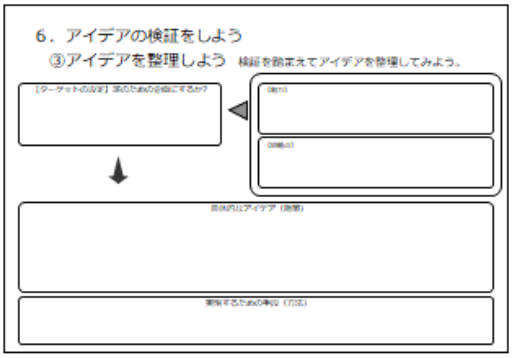
また、ターゲットに対して需要があるかどうかを検証する。データ（グラフ・表）を基に根拠を示し、ワークシートにまとめ、アイデアによる直接的・間接的・相乗的効果についても仮説を立て、ピラミッドチャート、マトリックスを用いて検証させた。

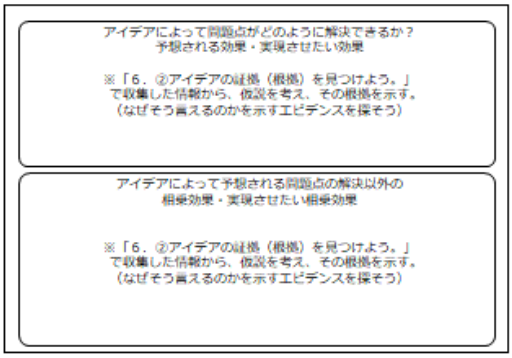




～企画書を作成してプレゼンテーションを行おう～

## 7．企画のまとめ

### ②企画書（プレゼンテーション・スライド資料）の展開

| | |
|---|---|
| タイトル | 興味を引き付けるようなネーミングを考えよう。 |
| ↓ | |
| 地域の魅力 | RESASなどの複数のデータ・フィールドワークでの写真などを根拠を示す |
| ↓ | |
| 地域の課題 | RESASなどの複数のデータ・フィールドワークでの写真などを根拠を示す |
| ↓ | |
| 問題提起（課題） | この地域の問題点は○○です。<br>これを解決する必要があります。 |
| ↓ | |
| 自分たちのアイデア | これを解決し、地域を元気にする<br>私たちが考えたアイデアは○○だ！ |
| ↓ | |
| アイデアの説明・実現方法 | 説明は理解しやすいよう具体的に説明しよう。<br>写真やアイデア図などを用いてイメージしやすいように |
| ↓ | |
| アイデアによる地域の効果 | RESASなどの複数のデータなどを根拠を示す |
| ↓ | |
| 結論 | 採用してもらえるような説得力のある言葉で！ |

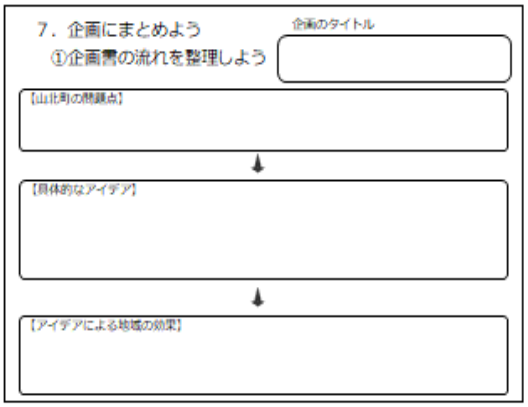
アイデアを用いて政策提言を行うために企画書にまとめさせた。

企画書にまとめる際の注意点として

①企画の流れを整理、企画書にまとめる。

②企画を整理し、企画書の展開を理解し、作成していく。

この２点を意識させた。




また発表を行うときに、何を意識するか（調べ学習と探究の違い）を確認し、事前にプレゼンテーションに向けた準備を行わせた。

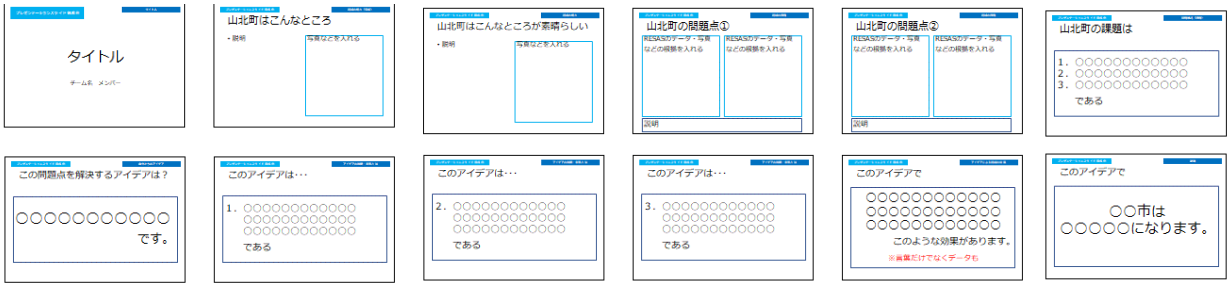
①プレゼンテーションとはどういうものか？

②プレゼンテーションの目的

③プレゼンテーションを学ぶことの目的

④良いプレゼンテーションができるポイントは？

プレゼンテーション発表会に向けて、その目的と効果を学び、スライド資料の作成とプレゼンテーションの練習を行い、プレゼンテーションに必要な要素を見つけ、発表に反映させた。



～校内にてプレゼンテーション発表会を行う～

プレゼンテーション発表会にあたり、プレゼンテーションとは何か、なぜプレゼンテーションが必要なのか。

①相手に伝える。

②相手に理解してもらう（伝わる）。

③相手に行動してもらう。

以上の３点を意識して行うように指導した。

そしてプレゼンテーションを学ぶことの目的として、

①自分の考えを理解してもらうことができる。

② 自分の思った通りに行動してもらうことができる。

③ 周りから「分かりやすい」と信頼してもらえるようになる。

④ コミュニケーションが格段に取りやすくなる。

以上の４点を教え、コミュニケーションの大切さを学ばせた。

さらに、『地方創生☆政策アイデアコンテスト』受賞者のプレゼンテーションを参考に、プレゼンテーションの効果的となるポイント（重要な要素）を考えさせた。そして、グループ毎に話し合い、特に必要と考えるポイントを箇条書きで７つ挙げ、重要度の高い順に並べ、プレゼンテーションを行う際にその７つのポイントを重視するように指導した。

グループ毎に作成させた「プレゼン評価表」を使って、他のグループのプレゼンテーションの評価をすると同時に、良かったところ、自分たちも取り入れたいポイント（箇条書き）を挙げさせた。発表会は、発表５分以上、質疑応答２分、講評１分で行い、次のグループが準備している間に発表したグループの評価を行い、すべての発表が終わった後に自分のグループの評価をさせた。そして、全体の講評及び各自の振り返りを行わせた。

エ　成果及び評価

11 月 22 日（土）第 1 回「Grass Roots Innovator Contest in Kanagawa」に参加。発表会は ZOOM を使用したリモート発表であった。

各講評者からいただいた講評の中には厳しいものもあり、少し気落ちした所もあったが次の発表に目を向け様々なアイデアが湧きだしていた。今回の発表では他の発表者との交流もでき生徒も喜んでいた。今回の発表で奨励賞をいただいた。

RESAS を導入したことにより、生徒は信憑性が高く、客観性の担保された資料を扱うことの重要性を理解した。

データから神奈川県内の各地域の人口や産業などと比較することで、山北町の人口減少推移が見られ、本校に通っていることから山北町を活性化させるという課題に取り組む意欲を高めることができた。また、観光や特産品に興味を持ち、神奈川県内に限らず、観光地で有名な県外地域に比較対象を広げ、山北町と共通点がありながら地域創生が成功している地域との比較をする生徒もいた。

このように、生徒の意欲を高め、視野を広げられたことは大きな成果である

また、発表を繰り返し行った結果、プレゼンテーションで壇上に立つことへ抵抗感を小さくすることができ、今後、さらに生徒の成長が期待できる。

「Grass Roots Innovator Contest in Kanagawa」募集要項

1 対象者
神奈川県、地元市町村等の地域が抱える課題解決をテーマとしたプロジェクトなど、様々な探究活動に挑む神奈川県内に所在する高等学校等に在籍している高校生個人及びチーム（中高混在可）で 11 月 22 日に開催するリフレクション大会に必ず参加できる者とする

2 募集期間
令和２年 10 月１日　～　令和２年 11 月 15 日

3 リフレクション大会
令和２年 11 月 22 日　13 時～15 時
なお、リフレクション大会はオンライン（Zoom）で実施するが、詳細は別途連絡する

4 発表内容
取組んでいるプロジェクトや探究活動に関するピッチ（プレゼン）を 10 分以内の動画にまとめる。

5 応募方法
① Google アカウントを作成する（既に学校等から与えられている場合はそれを使っても良い）
② 申込先フォームで申し込む
③ 登録したメールアドレス（Google アカウント）に動画をアップする URL を送付するので 11 月 15 日までに動画をアップする

申し込み先 URL　https://forms.gle/X266DPJ2mUpkip5T7

6 主催
NPO 教育かながわフォーラム

7 後援
神奈川県教育委員会

8 表彰
最優秀賞（NPO 教育かながわフォーラム理事長賞）
※最優秀賞受賞者は「マイプロジェクト関東 Summit 大会」への出場権を与える

9 評価者
高校教育課指導主事、県立高等学校長、有識者、NPO 教育かながわフォーラム

１０　その他
① アップされた動画は返却せずに主催者が責任を持って削除する
② 動画の２次利用は行わない
③ 動画発表は 10 分以内、mp4 ファイルとし、発表方法等については特に制約は設けない

問い合わせ先
NPO 教育かながわフォーラム
担当　時乗　洋昭
Mail k2hiro0816@gmail.com

| 各講評者からの講評 |
| --- |
| ・　住地域の活性化に向け高校生らしい視点で訴えている。PR 映像など、大変わかりやすい活動となっている。是非、山北町の活性化に向け、次の一手を講じてもらいたい。<br>・　フードロスの問題を含めた山北町の可能性への提案は素晴らしいと思いました。<br>・　地域の強みと課題を分析し、魅力を最大限生かすための手立てを具体的に提案している点が印象的です。皆さんの瑞々しい感性を生かして、魅力ある山北町の発信に取り組んでいってほしいと思います。<br>・　山北町の課題をしっかり捉え、課題を設定している。しかし、動画を作成した成果や課題の振り返りなど、検証が不十分に思われる。今後の展開に期待する。 |
| **発表から得た新たな気づきや学び** |
| 自分が住む地域の活性化を達成するにあたって、自分たちが有名になる、という案は面白いと思いました。神奈川県で都心に近い街があんなに自然豊かな魅力的な所だとは知りませんでした。しかし、彼女たちが言っていたように、観光客を増やすことを達成すると、山北町のように自然豊かな場所がごみなどで汚れてしまう可能性があるという意見に共感する。以前、学校の授業内でオーバーツアリズムについて、ディスカッションし、これは解決すべき課題だと感じました。彼女達の動画から観光業が与える利点と懸念点をより考えることができました。 |
| **参加者からの応援メッセージ** |
| 山北町にとても魅力を感じました！！自然が大好きなので、とても訪れたいです！動画を作って拡散するなど、SNS の活用は最も有効的だと私も思います。提案として、山北町のキャッチコピーなどを考えて、ハッシュタグとして使い、知名度を上げるというのも良いかと思います。 |

賞　状

奨励賞

県立山北高等学校

「山北町」

あなた方に第1回 Grass Roots Innovator Contest in Kanagawa において日頃の探究活動の成果を発揮され優秀な成績を収められました

よってここにその栄誉をたたえこれを賞します

令和3年12月22日

NPO 教育かながわフォーラム

理事長　須山英治

● 2020 年 12 月 13 日（日）探Q！RESAS 成果発表会に参加。

**神奈川県** 神奈川県立山北高等学校、相模原市立青和学園

**2020年12月13日（日）【A】**

埼玉県立皆野高等学校 / 我孫子市立新木小学校 / 葛飾区立水元中学校 / 東京都立八王子東高等学校 / 神奈川県立山北高等学校

２度目の発表ということで前回の反省をいかして発表に臨むことができた。

発表後２月４日校内発表会に向けて様々なアドバイスをもらい、発表の修正やブラッシュアップを行った。実際に山北町の風景を写真に収め、また山北町民にインタビューを行った。

発表と振り返り、ブラッシュアップを経験することにより、生徒は事前準備の大切さと現地に足を運びことの大切さを知ることができた。

オ　今後の課題

授業を通して山北町に興味・関心を抱き、山北町の地域創生に向けてアクションを起こしたいと感じ、山北町をたくさんの方に知ってもらいたいと思い、行動に移した生徒も見られたが、全生徒の取組としては、浸透していない。一人ひとりの興味・関心を喚起する仕掛けを工夫し、より多くの生徒の意識を高めることが課題である。

この授業では、グループワークを中心に進めたが、自分自身の取組を進めるのではなく、誰かに頼る者も散見されたため、一人ひとりの責任感を醸成するような授業展開の工夫が必要である。

## （２） 未病

ア　目　的

課題の発見、考察、分析、検証を通して論理的思考力を身に付けたり、グループでの活動を通してチームワークやコミュニケーション力を身に付ける。

教科の枠を超えて、生徒が社会に出てから必要とされる力や経験を養う。

未病とは何かを理解するとともに、未病普及のために必要な要素を検討し、有効な情報発信媒体を作成する。

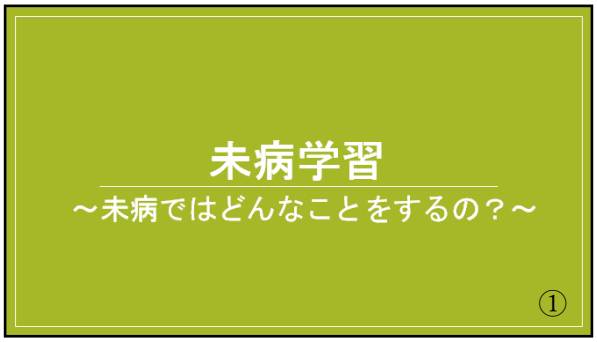
イ　対象生徒

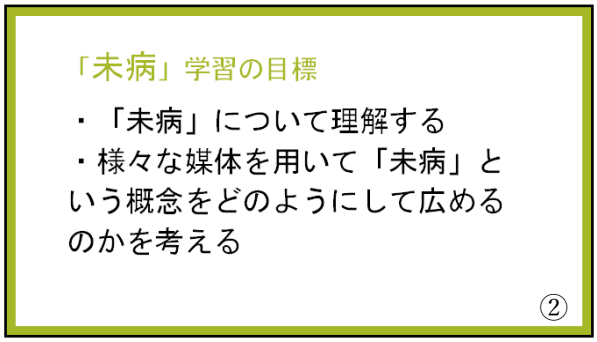
１学年(196 名)

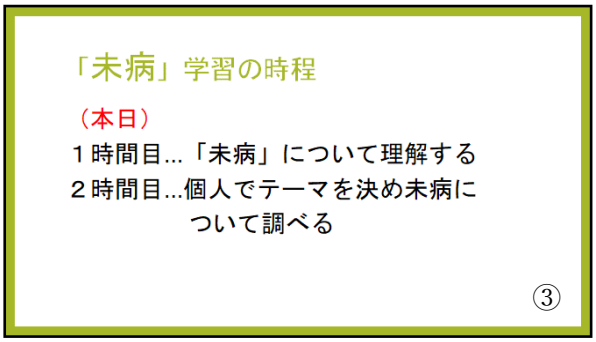
ウ　活動内容

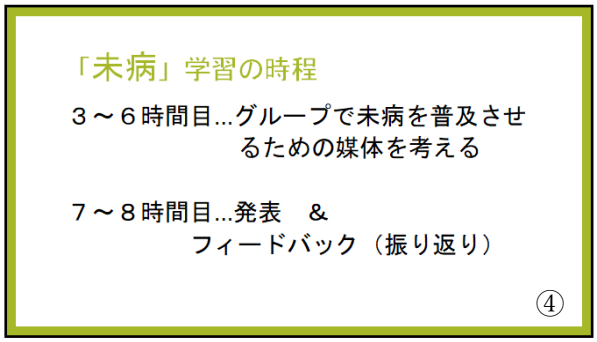
a　１、２時間目

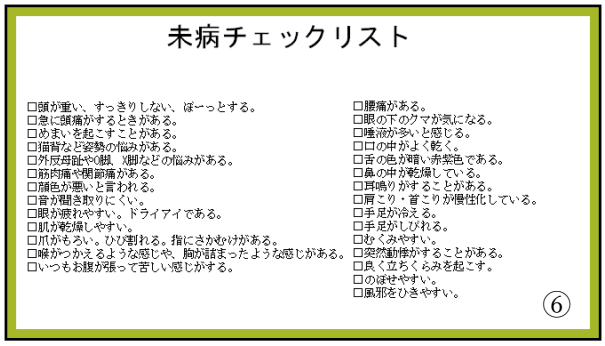
１時間目に PowerPoint を用いて「授業の流れ」「未病とは何か」について説明した。その後、自分の事と未病をつなげるために、現在、自分が気になること（健康面・食生活・日常生活など）を考えさせ、２時間目に興味・関心を持った分野を選び、課題を設定させた。





## なぜ「未病」という考えが生まれたのか

○２０２５年問題
団塊の世代が７５歳以上の後期高齢者に。
高齢化率が３０．３％

⑦

## なぜ「未病」という考えが生まれたのか

現在の社会システムの未来は
医療や介護などの制度が崩壊の危機に
陥る！２０２５年問題

⑧

## なぜ「未病」という考えが生まれたのか

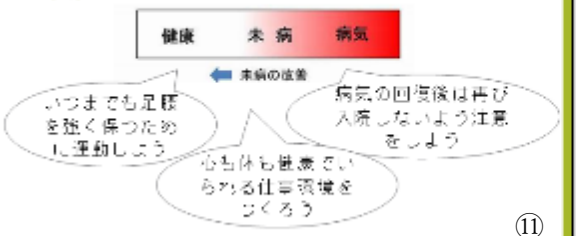
このような問題を解決し持続可能な
社会を維持していくためのキーワード
「未病」

⑨

ワーク１に取り組もう

⑩

## 未病のイメージ




⑪

## 未病とは

「健康か病気か」の２つの領域で捉える
のではなく、「健康」と「病気」の間で
連続的かつ可逆的に変化するものと捉え、
すべての変化の過程を表す概念

⑫

## 未病とは

「予防」を意味するだけではない。
感染症予防や生活習慣予防の他にも
その前段の積極的な運動・食生活・休養
などの健康増進。
楽しく生きるための工夫や魅力的にあり
続けるための努力など健康生活に関わるもの
も含まれる。

⑬

## 「未病」を改善する３つの取り組み

⑭

## 県西地区の未病の取組

高齢化率（６５歳以上）【平成27年】
小田原市　２７．２％
南足柄市　２８．６％
足柄上郡　２８．１％
足柄下郡　３６．４％

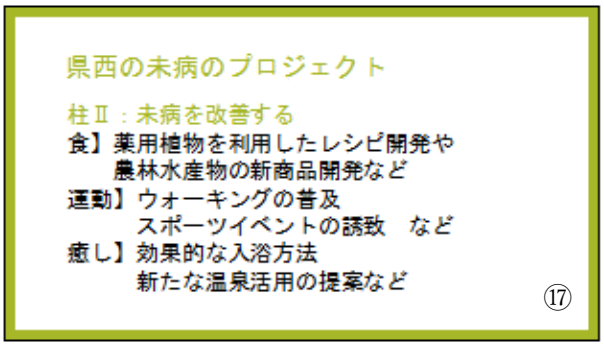
全県
２３．４％

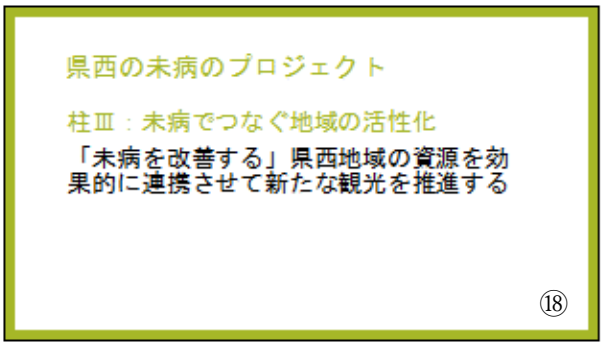
⑮

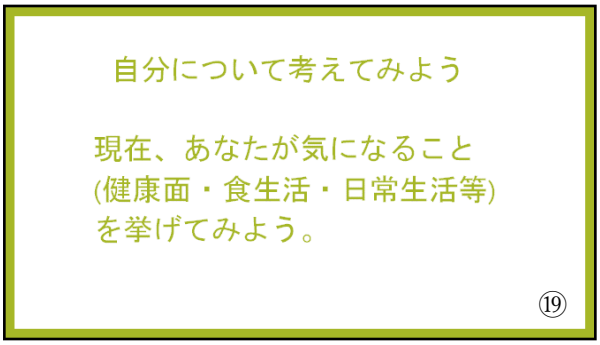
## 県西の未病のプロジェクト

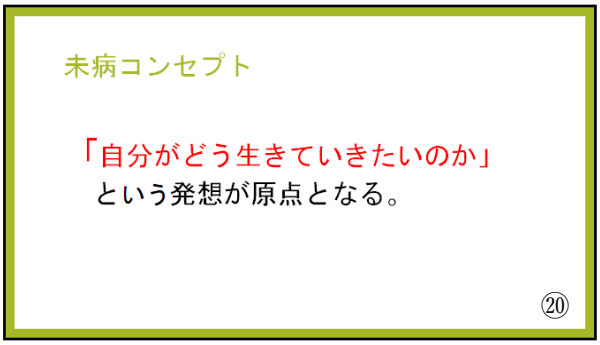
柱Ⅰ：未病がわかる
未病について十分な
理解をはかる
→「ＢＩＯＴＯＰＩＡ」
の設置など

⑯




b　３、４、５、６時間目

各自で課題設定したテーマから同じような内容である者とグループを作り、グループのテーマを設定し、図書館やインターネットを活用してテーマについて情報収集をしたり、屋外で動画を撮影するなど発表に向けた活動をさせた。

c　７、８時間目

１グループ当たり【準備（１分）⇒発表（２分）⇒質疑応答（２分)】計５分を目安に各グループのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションを聴いているグループはフィードバックシートに評価を記入し、その感想をコメントシートに記入した。ルーブリック評価を活用し、自己評価と他者評価を行い、自分事に落とし込むことを意識させ、事象の考察をさせた。

エ　成果及び評価

短い期間にも関わらず、課題の発見、考察、分析、検証を行うことができた。クラスアンケートにより実状を調べるグループや、動画や絵本を使って説明するグループ、クイズ形式にして興味を持たせるグループなどさまざまなアイデアがあった。プレゼンテーションにおいて、どのように工夫をすれば相手に伝わりやすいかを深く考えさせることができた、

ルーブリック評価による自己評価をグラフ化してみると全体的に高い評価をする生徒が多かったことから「未病」を知るきっかけになり理解が深まったと捉えている。振り返りシートからも「次にグループ活動があるときに興味や疑問に感じることを探究していきたい」「次はグループで役割分担をして未病についてもっと調べたい」「他の班が発表していたものを自分でも調べてみようと思った」など次回の探究活動について前向きな姿勢が見えたり、未病について関心を持てたりと授業の目的を達成できたと判断できる記載内容が見られた。

**○ルーブリック評価とは…**

**ルーブリック評価とは学習到達状況を評価する評価基準のことを指します。**

**簡単に言うと、この授業（単元）を通して「何ができるようになったら評価が高くなるのか」を示すものです。**

**「未病」の時間では最後に発表を行ってもらいます。**

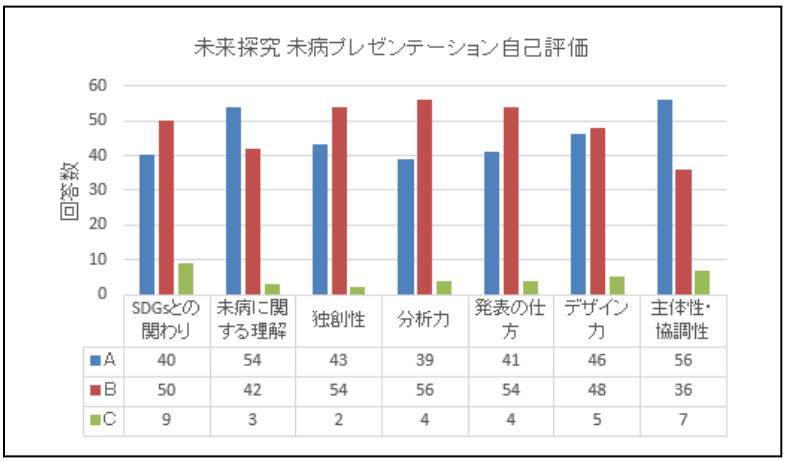
**最後の発表でどうすれば良い発表になるのかを考える際に、参考になるのが下記にあるルーブリック評価になります。**

**ぜひ、A を目指してグループ活動・発表を行って下さい。**

| 観点 | 評価項目 | 到達度 | | |
|---|---|---|---|---|
| | | A（十分満足できる） | B（おおむね満足できる） | C（努力を要する） |
| 知識<br>技能 | SDGs との関わり | SDGs との関わりを理解して発表できた。 | SDGs との関わりを意識して活動できた。 | SDGs との関わりを意識して活動できなかった。 |
| | 未病に関する理解 | 「未病」について十分理解し、自分事として捉えることができる。 | 「未病」について理解している。 | 「未病」についてあまり理解できていない。 |
| 思考<br>判断<br>表現力 | 独創性 | テーマの設定や発表媒体が、既存のものを興味深い切り口で捉えた新しいアイデアであり、これまでにない斬新で独創的なものである。 | テーマの設定や発表媒体が、既存のものを興味深い切り口で捉えた新しいアイデアである。 | テーマの設定や発表媒体が、既存のものから着想を得て作られたアイデアである。 |
| | 分析力 | 適切な分析方法を用いながらデータを分析し、課題の本質を見極めることができ、テーマに対して自分の考えを構築することができる。 | 比較等を用いてデータを分析し、一定の妥当性のある結論を導くことができ、ある程度筋道をたてて自分の考えを構築することができる。 | データをあまり利用せず、一定の筋道を立てて自分の考えを構築することができなかった。 |
| | 発表の仕方 | 話し方を工夫するなど、聞き手を見ながら発表することができる。 | 発表内容を理解し、聞き手を見ながら発表することができる。 | メモを見ながら発表している。 |
| | デザイン力 | イラストやグラフなどを用いて聞き手が見やすいように工夫し、聞き手が内容を理解しやすいような構成になっている。 | イラストやグラフなどを用いて聞き手が見やすいように工夫している。 | 文章だけで構成され、まとまりがなく内容が不十分である。 |
| 主体的に取り組む態度 | 主体性・協働性 | グループ内での役割を理解し、班員と協力してグループワークに取り組んでいる。 | グループ内での役割を理解してグループワークに取り組んでいる。 | 指示を待って行動し、主体性が見られない。 |

オ　今後の課題

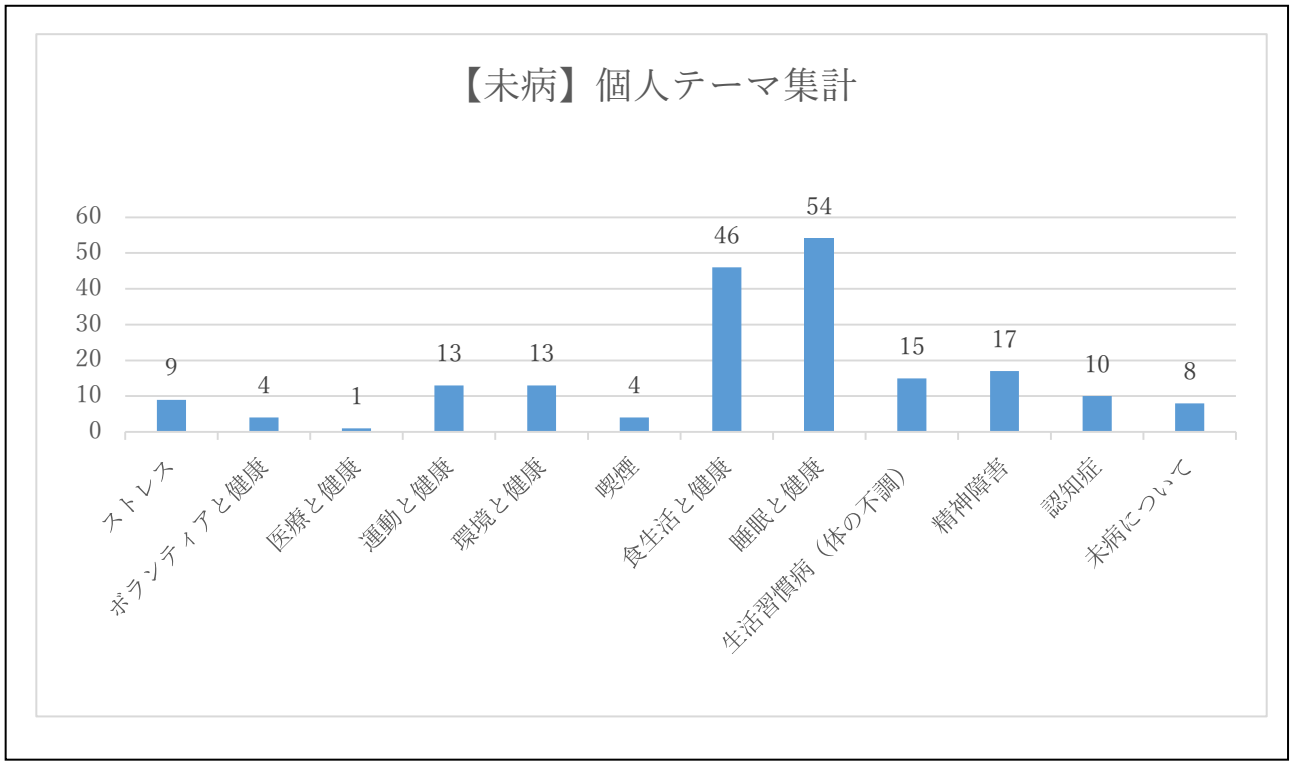
生徒が決定したテーマと未病との関わりを明確に示せるよう効果的に助言することが重要である。未病という概念の理解と設定したテーマと未病との関わりについて考える時間を増やすことにより解決できるとの仮説を立てることができたので、次年度に引き継ぐこととする。




【グラフ①】

導入段階で、健康を起点として考えさせたことがミスリードにつながった可能性も考えられる【グラフ②】。未病の改善＝健康というイメージが強くなり、その結果、健康になるという観点から生徒の個人テーマが「睡眠」「食」という設定に偏ってしまったと分析している。導入段階の工夫及び改善が必要である。

できる限り生徒自身が身近に感じられる課題をみつけること、その課題を「誰に伝え、理解してもらいたいのか」「誰がどのように改善するのか」などについて意識させることで「自分事」として探究できるように支援する。また、時間数や授業構成を再検討し、一人ひとりが未病について理解したうえで探究活動に取り組めるように今後、計画していきたい。




【グラフ②】

### （３）防災

ア　目　的

・　災害等の危険を予測して回避する能力や、社会の安全に貢献できるような資質を身に付ける。

・　周囲と協力して共通の課題を達成できるようになる。

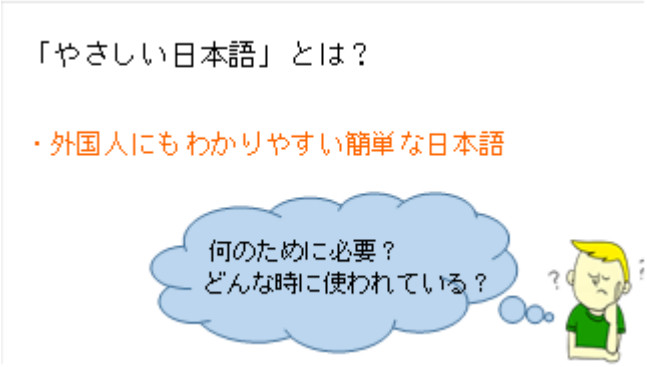
イ　対象生徒

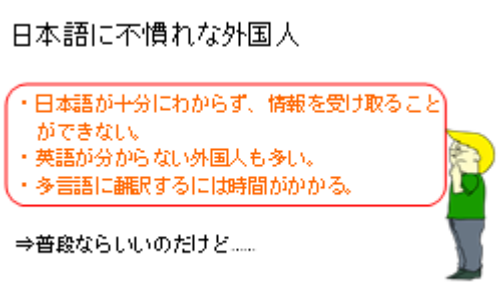
１学年（196 名）

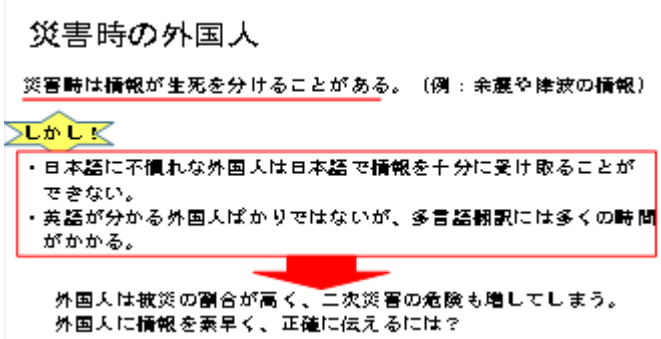
ウ　活動内容

a　やさしい日本語

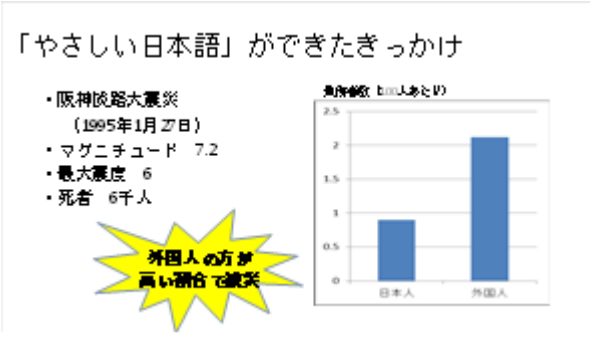
活動に入る前に、導入として「やさしい日本語」について生徒にスライドを用いて説明した。「やさしい日本語」とは、日本語に不慣れな外国人にも分りやすい簡単な日本語のことである。現代の日本には様々外国人が訪れており、当然、その外国人すべてが日本語を不自由なく使えるというわけではない。そのような日本語に不慣れな外国人が日本で暮らす上で、様々な問題が考えられる。例えば、日本語が十分に分からず情報を受け取れないこと。日本語を英語に翻訳したとしても英語の表記だけでは不十分であること。そのために多言語へ翻訳するとしても時間がかかること。これらの問題は通常の生活の中で時間をかけて翻訳し、学びながら暮らしていくことができる。しかし、災害時は一分一秒が生死を分ける。外国人に情報を素早く、正確に伝えるために考え出されたのが「やさしい日本語」である。

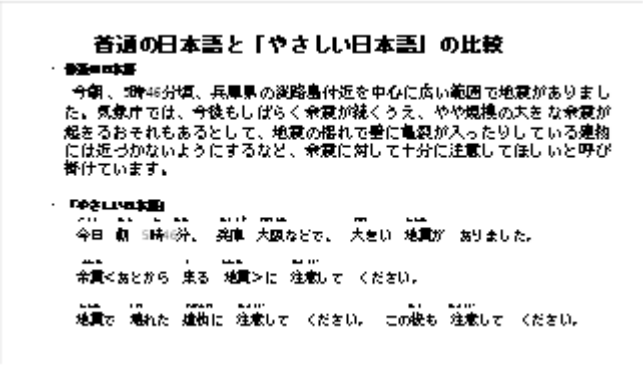


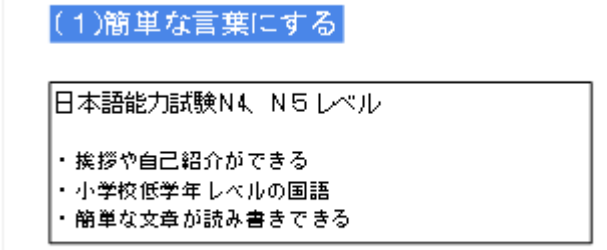



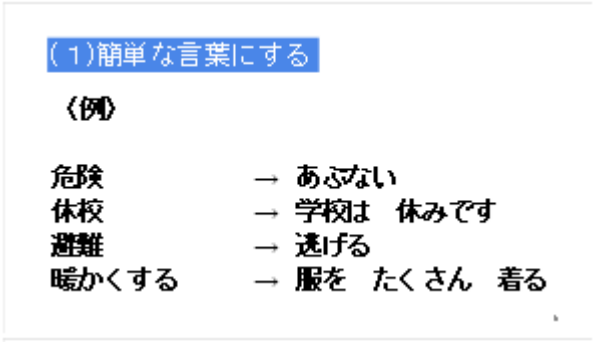



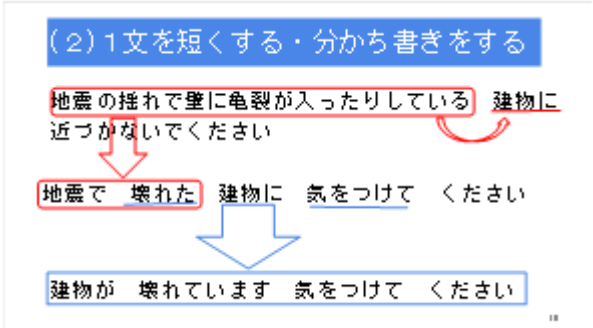

生徒には、上記の「やさしい日本語」という概念について説明をしたあと、「やさしい日本語」ができた経緯、普通の日本語との比較、活用例、「やさしい日本語」のルールを紹介し、それらを踏まえて実際に阪神淡路大震災で読まれたニュース原稿を「やさしい日本語」に直すというワークを行った。








導入後、誤った「やさしい日本語」のポスターと白紙のポスター用紙を渡し、訂正した「やさしい日本語」のポスターをグループで作成させ、変更した点や工夫した点等を発表させるというグループの活動を行った。「やさしい日本語」の文章を作る過程で、難しいことばを相手に伝わりやすいことばに変換する大切さや難しさを感じられるようにし、多文化共生社会についての理解や災害時における支援方法について考える契機となった。

b　DIG 研修

各クラスで４～５人ずつの班活動を通じて、学校周辺の危険箇所や災害時に有用な施設等を地図等から探し出し、災害時の活動に役立つ知識を身に付けるとともに、災害時をイメージし、日常の防災意識を高めることを目的とした。今回は震度７の地震を想定した。

DIG 研修の方法は、公益社団法人ＳＬ災害ボランティアネットワーク作成のマニュアル「DIG（災害図上訓練）研修用資料『MISSION NOTE』」を参考に、山北高校を中心とする周辺２km の白地図（Ａ０サイズ）にカラーペンや丸シールや付せんを用いて防災地図を作製していく。白地図は神奈川県のＨＰから「ｅ－かなマップ」を縮尺 5000 分の１で印刷したＡ３サイズの地図を８枚張り合わせたものを使った。この張り合わせ作業は各クラスの探究係が研修前に行った。

各班に配付する物を【表 1】に記す。

【表１】DIG 研修に必要な物　終了後回収）

| | |
|---|---|
| 白地図（Ａ０サイズ）　１枚 | |
| 新聞紙　３枚 | |
| 山北町防災マップ（山北高校周辺）　１枚 | |
| まとめ用紙　１枚 | |
| 袋の中 | カラーペン（紫、黒、茶、青、赤）　各１本 |
| | 丸シール（赤、黄、緑、青、白） |
| | 付箋（水色） |
| | 付箋（ピンク色） |

○各クラス、総合的な探究の時間２コマ（50 分×②）を使って DIG 研修を実施した。
その進め方を以下に記す。

**～DIG 研修の進め方（例）　（目安：1～8を⑤校時、9～12を⑥校時）～**

1　DIG とは、この地域で大災害が起こったことを想定して、危険箇所や問題点を知り、災害時にも落ち着いて行動できるようにするグループワークによる訓練です。

2　今日の目的は４つあります。

①DIG のやり方を覚えてもらうこと・・・どんな道具が必要になるか、確認します。

②机の上に広げてある地図に、鉄道や道路など町の構造を確認してもらい、その後、防災に関する様々な施設や危険個所などの情報を書き込んでもらいます。
通学の際や地震などの災害の際にどのような点に気を付けたらよいかを考え、発表し合ってもらいます。

③災害時の行動を地図の上で実際にイメージしてみて、いざという時にあわてずに行動できるようにするということがあります。話し合いに際しては、まず自分でイメージし、メンバーのそれぞれがイメージを話し合って、地図から得られるイメージを鮮明にしてください。

④このように地図から災害に関するさまざまなイメージを描くことができるようにしておくと、自分の知らないところで災害に遭うようなことがあっても、役立てることができます。

3 班活動のため、役割分担を話し合って決めてください。リーダー１名、記録係１名、発表係１名です。

リーダーは作業の進行を司り、記録係は出された意見を記録します。発表係は各班を代表して２分間程度で班の意見を発表します。

役割分担が決まった班のリーダーは、用具を取りに前に来てください。

（全ての班の役割分担が決まったら次にいく）

4 次に、机の上にある、DIG で使う用具の確認を行います。

まずは、新聞紙２枚を机の真ん中に敷いて、その上に大きな白地図を広げます。これに、分かりやすくするためにカラーペンで色塗りや書き込みをし、丸いシールや付せんの貼り付けを行います。

カラーペン（紫、黒、茶、青、赤）、丸シール（赤、黄、緑、青、白）、付箋（ピンク、水色）があるか確認してください。

それから、地図に書き込む際に参考にするカラーの山北町防災マップがあると思います。山北高校が載っている面を表にして、広げておきましょう。さらに、「まとめ用紙１」と書いてあるＡ３の用紙があると思います。これは作業のまとめで使いますので、横に置いておいてください。以上、皆さん確認できましたか。

5 それでは、地図に書き込みをしましょう。

始めに、リーダーの方、地図上の本校の敷地全体を「紫色」のカラーペンで囲んでください。

今いる場所が確認できましたね。

皆さんはすでに知っていると思いますが、地図は上が「北」です。この地図は、5000 分の１です。したがって、地図上の１センチはいくつですか？自分たちで計算してください。

そうです、5000 分の１の 5000 は実際の 5000 センチメートルをいい、5000 分の１の１は地図上では１センチを表していますので、地図上の１センチメートルは 50 メートルですね。

では、初めに鉄道を黒色の油性ペンの太いほうを使って塗ってください。

次に主要な道路を茶色の油性ペンの太いほうを使って塗ってください。幅が６メーター以上のセンターラインのある道路を塗ってください。トラックやバスがすれちがえる幅の道路です。地図では太い線が引かれている道路です。

（最初は、お互いに要領が分からないので時間がかかると思う。両方の作業でおおむね 10 分を予定する。早く終われば次へ進む。）

出来ましたか。リーダーの方確認してください。

6 次は、本来ですと学校、広場、公園、神社、寺、田畑、広い空地などを探し出して、災害の時に避難場所となりそうな場所を確認しますが、この地域は十分沢山あるので、今回は省略します。住宅が密集している地域では、災害の時に避難場所となりそうな場所を確認しておくことが大切です。

さて次は、河川、水路、池など水に関する場所を青色のマーカーを使って塗ってください。

川幅のある河川は両側を線で塗ってください。

（５分間くらい時間をとる）

出来ましたか。リーダーの方確認してください。

7 ここからは、シールや付せんを貼る作業になります。全員で協力して、手際よくシールを張ったり付せんを貼ったりしましょう。山北町防災マップも使います。

まず、町役場や消防署、警察署、交番などには赤シールを貼ります。

次に、病院、医院、クリニックなどの医療機関には黄シールを貼ります。

公民館や自治会館などの公共施設などには緑シールを貼ります。

何がどんなときに利用できるかなどが分かりやすいようにシールを貼るので、色を間違えないようにしましょう。

8 次は、災害のときに役に立ちそうな施設を、各グループに用意してある防災地図を参考にしながら探し出し、シールや付せんを張っていきましょう。
避難所には青シールを貼り、防災倉庫には白いシールに「ボ」と書いて貼ります。
（ここまで、50 分程度）

9 次は付せんです。
食料品･雑貨・薬･燃料などを売っているところに、ピンク色の付せんに「コンビニ」「薬」などと書いて貼りましょう。
防火水槽や消火器、プール、ため池など、消火活動の水を確保できそうなところなどに、「ミズ」と書いた水色の付箋を貼りましょう。
これも、グループの中で分担して進めましょう。

10 次は危険箇所です。災害時に危険だと思われる箇所を赤ペンで囲みましょう。
最初に、防災地図を見ながら、急傾斜地崩落危険区域、土砂災害警戒区域、山腹崩壊危険地区を赤ペンで囲みます。次に、大地震で崩壊するかもしれない場所（石垣・橋・高架道路・トンネルなど）を探して赤ペンで囲みます。

11 さて、これで学校周辺の防災地図が完成しました。今度は、この地図を見て、実際に災害が起きたことを想像してみてください。今回は大きな地震が発生したと考えましょう。DIG では、完成した地図から災害をイメージすることも大切なことです。そしてそのイメージを頭に描きながら、グループの皆さんで、防災の視点で見た学校周辺の良いところ、悪いところを「まとめ用紙１」に書き上げてもらいます。良いところ・悪いところというのは、「こんなところが安全・安心」とか「危ない・心配」とかそういったことです。
それでは、班で話し合い、「まとめ用紙１」に発表することがらを記入しましょう。 （15 分程度）

12 それでは発表です。「まとめ用紙１」から発表していただきます。
どのグループから行いますか？手を上げてください。
１グループ２分くらいしか時間がありません。簡単に発表していきましょう。（15 分程度）

（まとめ）
実際に短い時間でしたが、皆で協力して災害時の学校周辺の様子がイメージできましたか。
普段気が付かない危険や、災害時に役立ちそうな情報など、収穫はありましたか。今、話し合った最後の内容は、万が一災害が発生した時にはとても大切な情報だと思います。また、今回行ったように、地図から読み取ったイメージを頭に描くことや、自分の生活しているところで役に立つところや危険なところを確認してマークすることはとても大切なことだと思います。ぜひこれからも実際の生活の中で行っていきましょう。
では、最後に用具を元に戻して下さい。リーダーは前に持って来て下さい。

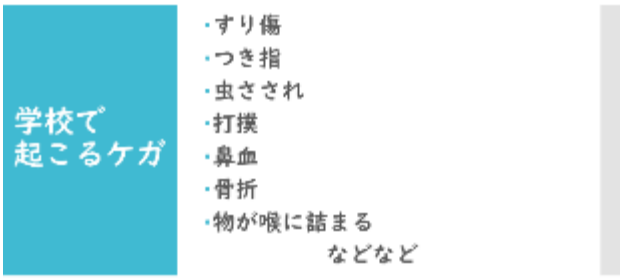
＜山北高校周辺の防災上の留意点＞
①がけ崩れや土砂災害　②橋の崩落　③道路や鉄道の寸断
④上流の三保ダム決壊等による浸水　⑤病院（足柄上病院）までのけが人の運搬
⑥保護者との連絡（災害用伝言ダイヤル１７１・災害用伝言板 web171）
⑦巨大地震後の帰宅方法または学校滞留の心得　⑧地域住民との協力活動（救助、作業等）等

【写真】DIG 研修の様子

c　応急手当（座学）

「身近なものでできる応急手当」というテーマで、主に学校生活の中で起こる怪我や事故の対応の仕方について学習した。

はじめに、これまでの学校生活（義務教育９年間）の中で、経験したり見たりしたことのある怪我や事故について挙げさせた。小学校時代の休み時間や、中学校時代の部活動の時間など、予想以上に大きな怪我や事故を経験している生徒が多く、怪我や事故を自分事として捉えることができた。



最後に、実習形式で「腕を吊る方法」と、「要救助者が出た時の搬送方法」について学んだ。

腕を吊る方法として、一般的に指導されるような「三角巾」を使用するのではなく、より生徒の身近にあると考えられる「レジ袋」を使用した。作り方は非常に簡単で、袋の持ち手部分の下から底面までを割いて、そこに腕を通し、首からかけるという方法を実践した。これなら教室や体育館等で、大人が不在の場合でも簡単に怪我人の腕を吊り、患部を安定させることが可能になる。

搬送方法については、１人で行うものと、２人で行うものの２種類を学んだ。意識のない人や痛み等で動けない人を、とりあえず安全な場所まで運ぶという目的で行い、移動距離としては 10 m程度とした。１人で搬送する際は、体重差があるととても難しく、救助者の体をうまく安定させることができない生徒もいた。２人で搬送する際は、１人で搬送するよりも長い距離を移動させた。搬送される側になった時に、急に持ち上げられると思った以上に怖いと感じる生徒もいた。また、移動中に体勢が崩れ、窮屈な姿勢になってしまうこともあった。

活動後に上記のような意見を共有し、実際に要救助者を搬送する際に、どのようなことに配慮しなければならないかを理解することができた。

d　応急手当（実技）

災害現場で問われる応急手当てにおいて、心肺蘇生法は最も人命救助に役立つ知識、技術である。その手順から注意点などをまとめ、最後に全生徒が胸骨圧迫まで体験した。

50 分授業の中で全生徒に胸骨圧迫を体験させることが一番の目標であったため、安全の確認、反応の確認、呼吸の観察を行った後に胸骨圧迫に入ること、胸骨圧迫のポイントは「強く」、「早く」、「絶え間なく」など、知識量は最小限に絞り教えた。その後４人の班を作成し、実習を行った。

①　傷病者の発見、救助の指示、胸骨圧迫（１分間）

安全の確認、反応の確認、反応がない場合には助けを呼び 119 番とＡＥＤの手配をお願いする。

その後呼吸の観察を行い、普段通りの呼吸がないと判断し、胸骨圧迫を１分間行う。

②　救助の要請（119 番通報）、ＡＥＤ搬送

①番から救助要請を受け、119 番電話通報を行う。その際にこちらの情報をなるべく多く与えるように気を付けて電話対応を行う。また、ＡＥＤを傷病者の場所まで運ぶ。

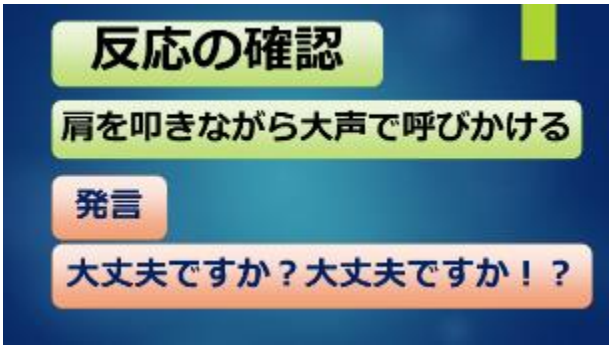
③　119 番通報を受けてのやりとり

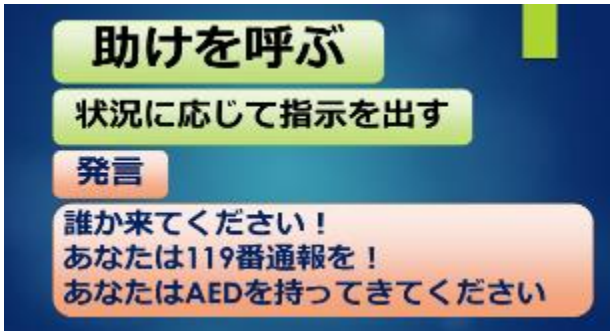
②番と 119 番の電話対応を行う。③番には事前に「火事ですか、救急ですか？」など台本を渡しておくが、なるべく多くの情報を聞き出すようにする。

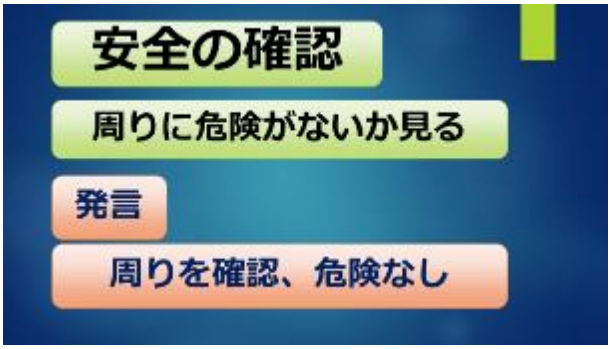
④　１分間のタイム計測

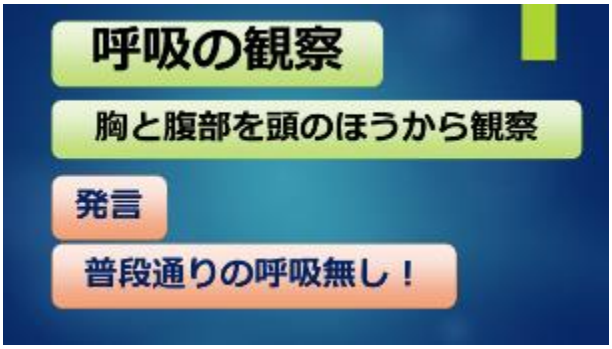
①番が胸骨圧迫を始めたら１分間計測開始する。また適切な場所を押しているかの観察をする。

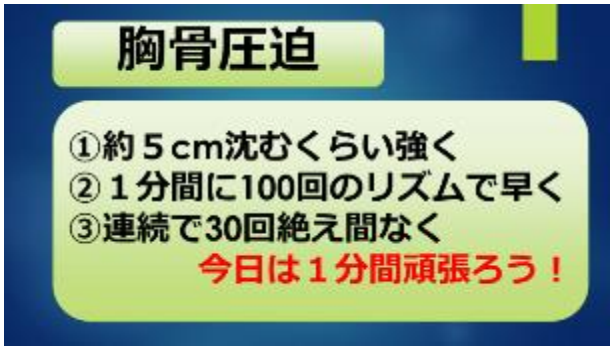
以上のように役割分担を決めて、各々が必ずすべての役割を行うように指示をした。胸骨圧迫に関しては適切な場所を押すことが難しく、中には力がうまく伝えることができずにしっかりと押すこともできない様子も多くみられた。また、１分間連続で行うことは意外ときつく、終わった後に汗をたくさんかいている生徒も多くいた。実際は救急車が来るまでは平均して７～８分かかり、それまで胸骨圧迫を続けてないといけないことを伝えると「大変だ」「きつい」などの声が聞かれた。119 番通報の練習ではなかなか状況を上手く伝えられずにいた。実際の場面に出会ったらもっと慌ててしまうので、まずは場所や住所を先に伝えることが大切だということを教えた。

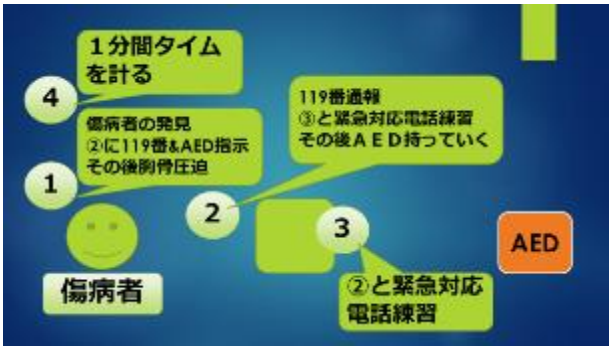


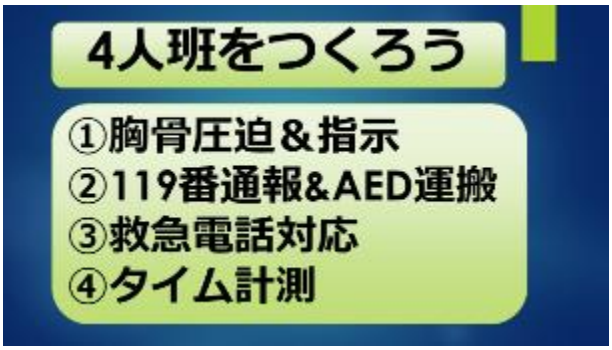





エ　成果及び評価

生徒はこの学習を通じて、今まで考えが及ばなかった日常生活の中にある防災意識を向上させ、生徒間での共有化が進んだ。さらに、自身の経験を想起し、言語化などの表現活動をすることができた。

以下に生徒の感想文の一部を記す。

○　水がある所や（防災）倉庫・避難所を見つけて印を付けて思ったことは、山や危ない場所がたくさんありました。土砂崩れがおきたり建物が倒れたりするととても危険だと思いました。避難所があまり多くなかったので、安全な所に行くのはとても時間がかかると思いました。けれど、水を蓄えられる所は多いと思いました。

○　もしものことを考えるのは少し難しかった。でも、いつ起こるかわからない災害について今から少しでもこんなときどうしたらいいのか、どう行動したらいいのかなどをすぐ行動に移せるようにしておいた方がいいと思った。もしそうなったとき、自分の命を自分で守ることも大切だが、周りの人や友達と協力して助け合っていくこともとても大切だと思った。

○　私は幼稚園のとき初めてとても大きな地震を体験しました。あの大きな地震はものすごく鮮明に覚えています。自分がその時にしていた事、その時自分が思ったこと、感じたことすべて覚えています。DIGはきっと、私が体験した地震よりも大きな地震（を想定しているの）だと思います。私が幼稚園の時思った

ことは、「お母さんに会いたい」「お兄ちゃん学校にいるかな」…と不安な気持ちになりました。幼稚園の時の私がものすごい不安を感じるのであれば、高校生になった私はもっと不安な考えが出てきたり、最悪な考えも想像できてしまう。そうなると、高校生・大人の人達の精神状態がもたなくなってしまうと思います。それを完全に解決するのは、とてつもなく難しいことです。また、もう一つの不安は夜の過ごし方です。明かりが無かったら真っ暗。火を使ってしまって、また大きな地震がきてしまったら火災になってしまうといった不安も私にはあります。こういった不安は解消していかなくてはいけないと私は思います。大きな不安をすこしずつ解消していくには地震について詳しく知ることや、今までに起きた地震の時その場にいた人から話を聞いて知識を蓄えておく必要があると私は思いました。今後いつ巨大地震がくるのか誰も分かりませんが、対策や自分たちに出来ることをやっていこうと思います。

○　山北町を中心として災害マップを見て感じたことは、やっぱり山が多いからこそ雨が降る可能性も高く、土砂災害が起きる可能性が高いため、都会などに比べると危険性が非常に高いことが分かった。特に、山北町は少子高齢化が進んでいるため、小さな子供や高齢者が災害に巻き込まれやすく危険性が高くなってしまう。……DIG で災害などの危険性を見つけることは、もし自分がその危険性の高い場所にいたらという危機感を持たせながらやることが大事だという事を感じた。これからの学校生活の中でも、校舎内でも、校舎外でも、危険な場所、破損やひび割れの所などを知っておき、地震が起きた場合でも早めに行動がとれるように気を付けて生活し、この授業で気づいたことをしっかり覚えておき頑張っていきたい。

○　防災についての授業で、自分が住んでいる地域の土砂崩れしやすい場所や避難場所などを、改めてしっかり確認しておいた方がいいと思いました。災害が起きた時にどのような行動をとればいいか考えるきっかけにもなりました。もっと災害が起きたときのことを考えた方がいいと思いました。

○　山北町もあわせてだけれど、自分がいる町などのマップを使って、水がある場所や、避難所、災害が起こりやすい場所を今まであまり考える機会が無かったので、とてもいい経験をすることができた。また、山北町だけではなく、自分が住んでいる場所や小田原なども調べたいなと思いました。

○　自分が住んでいる、通っている地域のどこに何があるのかを調べておくのは、自分のためにもなるし、とても大事なことだと改めて思いました。実際に大きな災害が起こったときの事を想定して、地震、津波などの被害を受けないような安全な場所を知っておくべきだなと思います。

オ　今後の課題

生徒の成長に焦点を合わせると、彼らが学習を通じて感じた不安や危機感を解消するための方策を考え、さらにその方策の実現に向けた課題を整理するという探究のプロセスを回せるようにすることが重要である。よって、指導する側は、そのような学習活動を生徒自らが実践できるような支援方法について、ほかの場面でも応用できるように整理する必要がある。さらに、学校としては、生徒が自ら学ぶ教育課程の編成や、地域との関係づくりについて今後整理を進めていく。

## （４） フィールドワーク

ア　目　的

未来探究で学習してきた山北町・未病・地域防災について、机上の学習内容と現地の様子の差異を確認する機会とするとともに、校外学習を通じて地元の方からお話を聴き、今までの学習内容を深く探究する機会とする。

フィールドワークで得られる知見を今後の探究活動につなげる。

イ　対象生徒

１学年（196 名）

ウ　訪問先

a　河村城跡他

b　山北町生涯学習センター

c　稲葉農地

エ　活動内容

a　森林セラピーコース

山北町の「森林（もり）のおもてなしガイド」の方々に説明を受けながら、山北駅から河村城跡に向けて、約１時間、散策した。

森林セラピーとは、五感を通して森を愉しみ、心身の健康増進や疾病の予防に役立てていくことを目的としたものである。

五感を通して感じることのできる癒し効果として、

見る〈視覚〉: 森や景色を見ることで得られるリラックス効果

触る〈触覚〉: 手や足で感じる木々の幹や落ち葉のクッションの心地よさ

聴く〈聴覚〉: 風に揺れる葉の音や小鳥のさえずり、水のせせらぎなどを愉しむ

味わう〈味覚〉: 新鮮な山菜やきのこなど森の恵みを堪能

嗅ぐ〈嗅覚〉: 木の香り成分である「フィトンチット」などを吸収

が挙げられる。

体験当日は小雨が降り続けるあいにくの天気であったが、10 人程度のグループに分かれ、ガイドの方の説明を受けながら、山北駅を出発し、河村城跡を目ざした。

グループで会話が楽しめるくらいのゆっくりとしたスピードで歩くので、仲間同士の会話も多くあり、とても良い雰囲気の中での体験となった。

散策の途中、いくつかのポイントで、ガイドの方から時間をかけて周囲の説明を受けた。その際、普段はあまり意識することのない五感をフル活用し、自然を感じることができた。木の表面に触れてみたり、大木が地面から吸い上げる水の流れを想像してみたり、耳をすませ、雨音に混じった自然の音を聴き取ってみたりと、普段の生活では意識しないことに意識を向けることができた。山道をゆっくり歩き、程良く心拍数が上がった中で、自分の体の変化にも気付きながら、自然を感じることができた。

b　生涯学習センターコース

生涯学習センターの入り口付近や調理室を使用し、「竹切り体験」・「柚ジュースづくり体験」・「竹弓矢づくり体験」・「竹ポックリづくり体験」の４つの中から、２つを選んで体験した。

「竹切り体験」では、竹の“丸さ”と“硬さ”に想像以上に苦戦している生徒が多く見受けられた。のこぎりの歯の当て方や力の入れ方等について指導いただき、上達が見られる生徒もいた。また、まっすぐ切り落とすことは容易にできる生徒もいたが、切り口を斜めにするのは見た目以上に難しい作業であった。

この作業を、足場の悪い竹林の斜面で行うことを想像すると、危険を伴う重労働であることが分かる。実際の作業では、のこぎりだけでなく機械を使用するとはいえ、高い技術を要するものだと実感することができた。

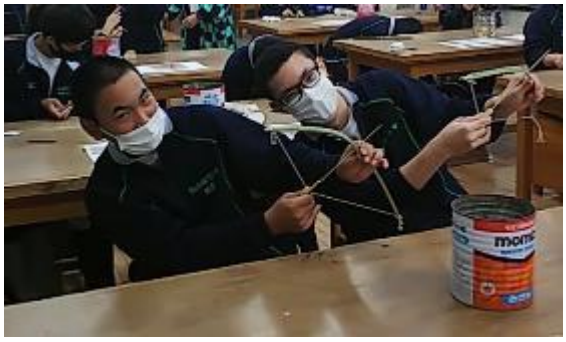
「柚ジュースづくり体験」では、山北の特産品であるゆずを調理し、美味しいジュースを作ることができた。ゆずを切る包丁の手さばきから、普段、家庭では台所に立つことなどないと思われる生徒もいれば、小さく硬いゆずを器用に切ることのできる生徒もいた。調理室内はゆずのさわやかな香りに包まれ、山北の地元食材の良さを実感することができた。地産地消という視点からも地元の食材を消費していくことの大切さを理解することができた。

「竹弓矢づくり体験」では、人気漫画の主人公を模した羽織を着た担当の方の指導によって、和やかな雰囲気の中での体験となった。

この竹弓矢は、矢を飛ばすのではなく、矢の先に付けたものを弓の勢いで飛ばすようなつくりになっており、小さい子供でも安全に扱えるような工夫がなされていた。

矢を部分的に削って、弓の穴の大きさに合わせる作業が難しく、苦戦している生徒が多くいた。また、弓の端をひもで張る際の強さの調節も力加減が難しく、張りが弱すぎたために、完成した後にうまく飛ばず、張り直す生徒もいた。

完成後に室内に設置された的に向かって試し射ちを行った。うまく狙い通りに的に当たるととても満足そうな表情をしていたのが印象的であった。



「竹ポックリづくり体験」では、予め用意していただいた竹の中から自分に合うものを選び、作成した。

ここでも、竹は生徒が考えていたよりも硬く、力の弱い生徒は穴を開けるのに苦労をしていた。穴を開けた後、ひもを通し、自分の身長に合わせて長さを調節した。

完成した竹ポックリを使ってみると、雨でアスファルトが滑りやすかったこともあり、操作が難しそうであった。しかし、慣れてくると、竹ポックリに乗りながらお互いに写真を撮るなど、自在に扱えるようになってきた。竹ポックリで硬い地面を移動すると、カランコロンと、

心地よい音が響き、竹に乗るという“アンバランスさを楽しむ”だけではなく、普段聞かないような“音を楽しむ”といった効果もあると感じた。

c　農業体験コース

山北町の農家の方のゆず畑をお借りし、ゆずもぎを体験した。

山北町の特産品として、獅子ゆず（鬼ゆず）が挙げられるが、今回の体験では、花ゆずの収穫作業を体験した。

畑に移動する間、農家の方からゆずの収穫方法についての説明を受けた。収穫後の果実を傷つけないように、切った茎の部分を「二度切り」することの重要性を学んだ。収穫したゆずを運搬する際に傷がついてしまうことで、売値が変わってきてしまうとのことであった。

また、農家を継ぐ人が少ないため、年々農作業を行う人の高齢化が進んでいる現状があることを危惧されていた。実際に、山北町の人口の統計では、平成 29 年には、人口約１万人に対して、65 歳以上の人口は 37.4％である。また、５歳階級別人口でも、65～69 歳の人口が 1,188 人で、最も多いという統計データが出ている。

体験前の事前説明では、収穫は１人５個から 10 個までとあったが、畑に到着すると、想像していた以上の果実が実っていた。

そのため、収穫できるだけ収穫しても構わないということにしていただき、たくさんのゆずを収穫することができた。

初めは、慣れない手つきで１つ収穫するのに時間がかかっていたが、作業に慣れてくると、スムーズにできるようになってきた。慣れた手つきで作業をしていると、農家の方から「お兄ちゃん、うまいね」と声をかけてもらい、うれしそうな表情をして作業をしている姿が印象的であった。

目線の高さにある実は収穫しやすいが、木の上の方にある実は脚立を使用しなければならなかったり、低い場所にある実はかがんで作業しなければならなかったりと、農家の方の苦労を身をもって体験することができた。

様々な分野で機械化が進み利便性が向上している中ではあるが、木が密集しているようなこういった畑での収穫作業は機械で行うことはできず、最後は人の手で収穫しなければならない。移動中の話にあったように農業に従事する方の高齢化が進む中で、10 年後 20 年後に同じ作業を今と同じように進めていくことは困難になっていくことを感じた。

短い時間での収穫体験ではあったが、たくさんのゆずを収穫することができ、生徒達はとても満足そうであった。

収穫作業前後の移動の際に、地域についてのいろいろな話を聞くことができ、農家の方は、農作業をしながら、畑の近隣の方とのコミュニケーションを多く取っていることが感じられた。「防災」という観点から考えると、こういった近隣住民とのつながりが、地震や火事などの緊急事態が起こった時の助け合いにつながると考えられる。

オ　成果及び評価

今回の体験を通して、山北町の自然や伝統についての知識を得ることができた。教室内で見たり聞いたりする資料やデータからでは得られないことを、地元の方から教わり、指導されることで、生徒たちは自分自身の実感として、それぞれ受け止めることができた。

今後の課題設定・課題解決に向けて、この体験で得たものを生かし、深めていける見通しが立った。

この研究において、フィールドワークの重要性を再認識させる内容であり、人と人との関わりの中で、教育そのものが「生きて働く」ことに繋がっていくことを実感させられるものである。是非、今後とも続けていきたい取組である。

カ　今後の課題

事前準備に十分な時間をかけることができなかったため、自分たちで深く調べることがほとんどないまま、教員からの事前説明のみの知識でこの体験学習を行った。そのため、ただ一方的に説明を聞いているだけの生徒が多く、ガイドの方に質問をする等の行動はほとんど見られなかった。学校で時間が取れなくても、事前学習できる教材の開発が必要である。

フィールドワークの宿命として、学習内容と行動が天候に左右される。天候の変化に対応できる計画立案等が課題である。

## ２　総合的な探究の時間「未来探究」（２学年）

### （１）　My プロジェクト

ア　目　的

各教科、科目等で身に付けた見方・考え方を働かせ、地域社会における生活と SDGs との関わりの中で、主体的・協働的に課題を発見し、解決する過程を通して、自己肯定感や、着実に努力する姿勢・力を育み、地域貢献できる人材を育成する。

イ　日程

令和２年４月１日～令和３年３月 31 日

ウ　対象生徒

２学年（196 名）

エ　使用教材

「探究ナビ」(Benesse)

「マイプロジェクトサポート BOOK」モニター版（Benesse）

自主作成プリント

オ　活動内容

a　地域の課題（Need）について知る（情報収集）

RESAS を使って近隣地域（山北町、松田町、大井町、開成町、箱根町、真鶴町、湯河原町、中井町、南足柄市、小田原市、秦野市、海老名市）について、「人口」「地理」「特産品」「雇用」「観光」「産業」「公共事業・公共施設」「医療・福祉」の８つのテーマで探究的な学習を行った。ここでは、信頼のおける情報源よりデータを集めることを目的とした。インターネットのブログ記事やまとめサイトなどの情報は信頼度が低いため、統計データの読み取り方などを指導した。

上記の近隣の 12 地域を各クラス２地域ずつ担当し、また、クラス内で担当地域と担当テーマを生徒ごとに振り分けた。つまり、１人の生徒は１つの地域の１つのテーマについて RESAS を使って情報を収集した（小田原市の人口、秦野市の特産品など)。そして、課題提出時にクラスの担当地域の８つのテーマに関する情報が揃うようにクラス内で担当を割り振った。

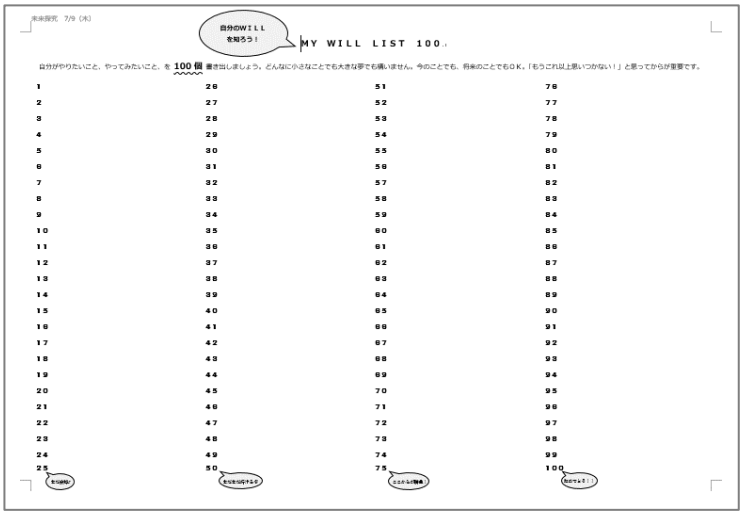
授業実施時は新型コロナウイルスの影響による分散登校期間であった。そのため、授業時間内では RESAS の使い方を動画や漫画を通して学び、実際に調べてワークシートにまとめる作業は家庭学習とした。

生徒が提出してきた課題を２枚ずつコピーして地域ごと、そしてテーマごとにまとめてそれぞれ一枚の模造紙に貼り合わせ、学年の廊下及び教室に展示した。次の授業で、生徒は廊下、教室に掲示された模造紙を自由に見て回り、気になる地域のデータを読み取りながら地域課題を５つ発見した。生徒は、馴染みのない地域の情報に興味深く目を向けたため、自分の興味のあるテーマを発見したりしていた。「高齢化」や「人口減少」が県西地域の主要な課題であることに気付いた生徒もいた。

b　自分のやりたいこと（My Will）を知る（課題設定）

「やりたいこと（My Will)」を100個書き出す活動を行った。「やりたいこと（My Will)」は小さいことから大きな夢まで自由に書き出すよう促した。Myプロジェクトにおいて自分の興味に近い分野で課題を設定するために、まずは自分の興味・関心を知り自己理解を深めることが目的である。また、自己理解を深めることは、進路希望を具体化する上でも必要なことと考えられる。

100 個を超えてもどんどん書き進められる生徒がいた一方で、少ししか書けない生徒もいた。そのような生徒には、まずは身近なことに目を向けることや、大人になったらやってみたいこと等を考えるよう声かけをした。


未来探究　7/9（水）

自分のWILLを知ろう！

MY WILL LIST 100。

自分がやりたいこと、やってみたいこと、を 100個 書き出しましょう。どんなに小さなことでも大きな夢でも構いません。今のことでも、将来のことでもOK。「もうこれ以上思いつかない！」と思ってからが重要です。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 26 | 51 | 76 |
| 2 | 27 | 52 | 77 |
| 3 | 28 | 53 | 78 |
| 4 | 29 | 54 | 79 |
| 5 | 30 | 55 | 80 |
| 6 | 31 | 56 | 81 |
| 7 | 32 | 57 | 82 |
| 8 | 33 | 58 | 83 |
| 9 | 34 | 59 | 84 |
| 10 | 35 | 60 | 85 |
| 11 | 36 | 61 | 86 |
| 12 | 37 | 62 | 87 |
| 13 | 38 | 63 | 88 |
| 14 | 39 | 64 | 89 |
| 15 | 40 | 65 | 90 |
| 16 | 41 | 66 | 91 |
| 17 | 42 | 67 | 92 |
| 18 | 43 | 68 | 93 |
| 19 | 44 | 69 | 94 |
| 20 | 45 | 70 | 95 |
| 21 | 46 | 71 | 96 |
| 22 | 47 | 72 | 97 |
| 23 | 48 | 73 | 98 |
| 24 | 49 | 74 | 99 |
| 25 | 50 | 75 | 100 |

半分終わ

あと半分だ！ちょっと！

とにかく頑張

ゴールまで！！

c　Myプロジェクトの課題を設定する（課題設定）

マイプロジェクトサポートBOOKのワークシートに沿って、自分のやりたいこと(My Will)と地域の課題（Need）の重なる部分でMyプロジェクトの課題を設定する活動を行った。WillとNeedの重なりを見つけられず苦戦した生徒も多かったが、RESASの学習時に取り上げた８つのテーマをヒントに課題を設定することができた。

具体的な地域を指定せずに「高齢化を解消したい」「人口を増やすにはどうしたらよいか」等の課題を設定する生徒が多く見受けられたため、具体的な地域を想定すると情報収集がしやすく、解決策も考えやすいことを助言し、その結果、自分の住んでいる地域の課題を取り上げる生徒と、昨年の未来探究の授業で山北町について学習した経験から、山北町をフィールドに選ぶ生徒が多数いた。

課題設定完了後は、Myプロジェクトの「課題」「意義と動機」「目的」「方法」をまとめた探究計画書を作成し、テーマを固めた。

d　ゼミに分かれてテーマを深める（情報収集）

２学期からは、Myプロジェクトのテーマごとに生徒をグループ化し、ゼミを形成した。＜人口減少・産業・防災減災ゼミ＞＜高齢化・医療福祉ゼミ＞＜ＰＲ・特産品ゼミ＞＜魅力化・活性化・自然保存ゼミ＞＜観光集客・人口増加ゼミ＞＜利便性・住みやすい町・こどもゼミ＞の６種類の各ゼミに生徒は30名程度所属し、担当教員がアドバイザーとして２～３名ずつ付いた。

ゼミでは各個人がそれぞれの課題を設定し、解決方法を考えていったが、探究活動を進め

ていく中で壁にぶつかった生徒や似たような内容に取り組んでいる生徒に対し、担当者がグループ化をアドバイスした。一方、個人で順調に進んでいる生徒や、個人で探究活動を進めたい生徒はそのままの形で活動を継続した。

グループまたは個人で、課題の精選を行い、より具体的にするように促し、各ゼミそれぞれのやり方で、似たテーマを持つ生徒同士は議論を重ねながら、さらに各課題を掘り下げていった。

この段階で、次のような独自の展開をしたゼミもあった。

＜ＰＲ・特産品ゼミ＞

地域が抱えるＰＲや特産品に関する課題は何であるかを考えた。その際、その課題が本当に現実としてある課題なのかRESASや各市町村、観光地のホームページ等から調べた。また、その課題について教員と生徒とのやり取りを通して、より明確な内容にブラッシュアップし、課題解決のための具体的な方策やプロセスについて考えていった。

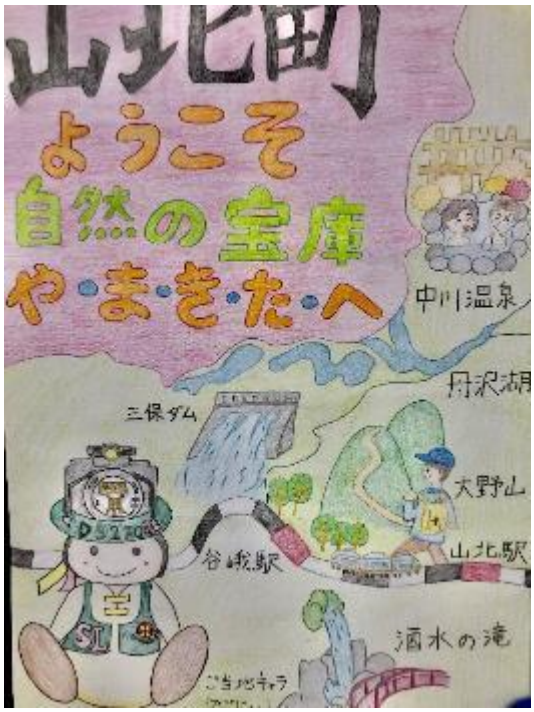
＜魅力化・活性化・自然保存ゼミ＞

町を活性化、魅力化させるためには具体的にどのような課題があるのか、ワークショップ形式で話し合った。

山北町を中心に市町村のホームページやRESASを参考に人口の推移や町の施策などを調査し、町の課題を抽出していった。また、各市町村の施策や広報の仕方等も調べさせた。調べたことをもとにグループワーク形式のワークショップを行った。

＜観光集客・人口増加ゼミ＞

山北町をどのようにＰＲすれば観光客が増えるかを検討し、観光プランなどを練った。そして、キャッチコピーを考えて以下のような集客用のポスターを作成した。



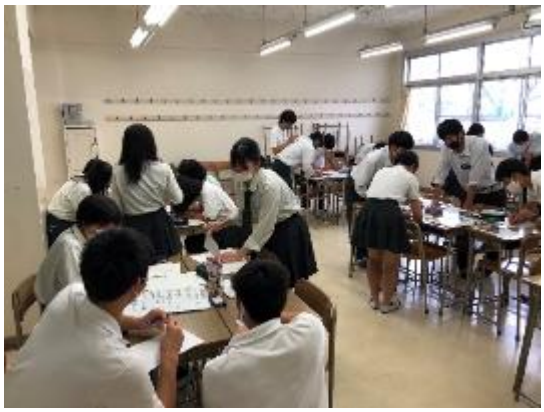
＜利便性・住みやすさ・こどもゼミ＞

住みやすい町、子育てしやすい町とは何か、グループで話し合った。

「どんな町が住みやすい町だと思うか」について各グループで意見を出し合い、それを発表用ホワイトボードに記入した。そのホワイトボードをグループごとに見て回ることで、ゼミ内の意見交換を実現し、これにより生徒は自分とは違う考え方に触れ、同じ事象に対して多角的に考えることができた。また、この形式での意見共有は対話の必要がないため、感染予防になった他、生徒がプレッシャーを感じずに自分のペースで他者の意見に触れることができた点において有意義であった。ゼミ内では、「便利さ」を挙げる生徒が多く、中には「デリバリーサービスが利用できること」を住みやすさの条件にあげる生徒もいた。

次に、「住みやすい町」についてより幅広い世代の人々の考えを知るために、「どんな町が住みやすい町だと思うか」について各世代にインタビュー調査を行う課題を出した。世代によって交通の利便性であったり、物や店の充実度であったりと、「住みやすさ」の考え方に違いがあることに気が付いた生徒がいた。

また、全国の自治体がどんな子育て支援政策を行っているかを調べ、ゼミ内で情報共有を行った。手厚い子育て支援策に驚いた様子の生徒もいた。



（各グループのホワイトボードを見て「住みやすい町」について意見共有をしている様子）

e　フィールドワーク（情報収集）

フィールドワークにおいて、設定した課題やアクションプランに関わる人や機関に出かけて、インタビュー調査を行った。箱根町役場や小田原市役所などや山北町や開成町での街頭インタビューを実施して魅力ある街について、調査を実施したグループもあった。フィールドワーク後は、情報の整理とそれに対する考察をさせた。

フィールドワークでは山北町をはじめとする近隣の市町役場（小田原市、南足柄市、秦野市）や子育て支援センターなどの公的な機関に加え、地元商工会や商店、老人ホームなどで調査を行い、得た情報を元にプロジェクトを一段と具体化したり、内容を修正したりした。

詳細については、P56 を参照されたい。

f　アクションプランの立案（整理・分析）

設定した課題を解決するためにどのようなアクションが考えられるかについて、マイプロジェクトサポート BOOK のワークシートを使いながらブレインストーミングを行った。また、生徒が考えた課題やアクションについて、教員が面談を行い助言した。

ここで、担当教員は順次生徒の活動を見取りながら、単純な調べ学習で終わらせるのでなく、自分の視点でなおかつ自分でできる課題解決策を考える必要があることなどを指導していった。最初の頃は自分で実現できないような単純な解決策に飛びつく生徒が多くみられたが、自分の視点で考えを持てる生徒も増えてきた。一方で、自分のこととして考えられる生徒はまだ多くない。調べ学習の延長でとどまっている生徒や、実効性が乏しい課題解決にとどまっているもの、自分自身での行動が難しい内容になっているものなども散見された。課題設定時のテーマや解決手段を生徒がどう「自分事」化していくか、またその点をどう支援していくかが重要なポイントであると思われる。

加えて、課題設定の根拠（本当にその課題は存在するのか？）が曖昧なため、解決策に説得力がない場合もあった。これらの細かい指導を少人数の教員ですべての生徒に対して行っていくことに難しさがあった。

g　中間発表（まとめ・表現）

ここまで取り組んできた内容を項目立てて、まとめる作業を行った。スライドなどを作成する際に、発表の骨子を先に考えるように促した。どの媒体を使って発表を行うかについては各グループ（個人）がそれぞれで判断したが、Chromebook でスライドを作成した者が多かった。

発表資料を作成する際に、どう表現すれば他者に伝えることができるか、見たい・聞きたいと思える発表になるかをといった点を考えさせた。これまでの発表では、原稿を読み上げる生徒が多かったため、年度末の発表に向けてはメモを見ながら自分の言葉で話せるようになることを目ざすよう、生徒に声かけをした。

中間発表は、ゼミ内で行い、それぞれの進捗状況に合わせて、発表形式は柔軟に変更した。教室の前でゼミ内の生徒に向けて発表したゼミもあれば、教員に対して発表をしたケースもあった。いずれの場合も、教員によるフィードバックを行った。

h　最終発表（まとめ・表現）

１年間の総まとめとしてゼミを超えた成果発表を３月に実施する。発表を聞く生徒が「課題の着眼点」「解決策のオリジナリティ」「プレゼンテーション」などの項目について採点し、自分の発表を無事終えるだけでなく「より良い発表とは何か」について生徒に意識させることを目的とする。

i　生徒のプロジェクト例

＜人口減少・産業・防災減災ゼミ＞

| My プロジェクトテーマ | アクションプラン |
|---|---|
| 南足柄市の人口減少・少子化について | 人口減少を防ぐため、まず観光に力を入れて南足柄市に興味を持ってもらうところからはじめる。 |
| 南足柄市の人口減少 | 南足柄市の魅力を伝えるイベントを開催して活性化につなげる。 |
| 秦野市の人口減少 | 関係人口に着目し、関係人口を増やための工夫を考える。 |
| 山北町の人口減少 | 山北町をどう PR するか、また山北町の中にある空き家を活用（空き家や貸し出すことができる家の情報を移住希望者に提供）する。 |
| 山北町の商店街に活気を取り戻す | 商店街を活用したイベントを開いて街を知ってもらい商店を開きたい人にアピールする。 |
| 山北町の転入者を転出者より増やす | 転入するとどんな良いことがあるか PR する。 |
| 山北町の人口減少・少子高齢化 | 若者を呼び込む方法、高齢者の寿命を伸ばす方法を考える。 |
| 山北町の人口減少・高齢化 | 若い世代が少ないため、山北町の観光資源を活かした婚活パーティーを開いて若者を呼び込む。 |
| 少子高齢化による人口減少 | 子育てへの不安から子どもを作らない人に向けて、不安を軽減できるようなブログを書いて啓発する。 |
| 災害発生時にどうすれば町民が通常生活を取り戻せるか | 災害ボランティア活動に着目し、集める方法などを考える。 |

＜高齢化・医療福祉ゼミ＞

| My プロジェクトの課題 | アクションプラン |
|---|---|
| 山北町の少子高齢化の解消 | 若者が働ける場所や施設を増やし、ＰＲをする |
| 松田町の高齢化を防ぐ | 若者が働ける場所や施設を増やし、ＰＲをする |
| 南足柄市の高齢化を防ぐには | 若者が働ける場所や施設を増やし、ＰＲをする |

| | |
|---|---|
| 山北町の介護や医療を充実させる | 検診率の向上<br>身近にできる健康チェックを広める |
| 山北町に産婦人科をつくる | 募金活動やインターネットなどを利用して医師の確保を行う |
| 高齢者が安心して暮らせるまちづくり | 介護士の仕事内容を絵本にして、小中学生に関心をもたせる |

＜ＰＲ・特産品ゼミ＞

| My プロジェクトの課題 | アクションプラン |
|---|---|
| 秦野市の特産品を使って地域の住みやすさ UP！！ | 特産品であるカーネーションを商品化し、販売する。利益は市に寄付をする。 |
| 海老名の良さを多くの人に知ってもらうには？ | SNS を活用して、観光スポットを広める。 |
| 秦野市に住もう！ | ショッピングモール等を作り、人を集める。 |
| 山北町の知名度を UP させるためには？ | 多くの人に手軽に手に取ってもらえて、人の目を引くものを作る。 |
| 観光で山北町をにぎやかに！ | 人を集めるために、イベント企画や宿、スーパー等を作る。 |
| みんな知ってる？南足柄の特産品！ | ポスターを作成し宣伝する。 |
| 箱根町のお店を紹介！！ | ポスターを作成し宣伝する。 |
| 山北町の魅力を伝えよう。 | SNS やポスターを使い、宣伝する。 |
| 山北町を有名にする。 | 商店街の復活。SNS で PR する。 |

＜魅力化・活性化・自然保存ゼミ＞

| My プロジェクトテーマ | アクションプラン |
|---|---|
| Attract Young People<br>若い人を呼び込むために | 街頭インタビューをもとに住みやすい町について交通面、生活利便性等について提案する。 |
| Y×Y<br>湯河原町と山北町の魅力とは | 役場や観光協会へのインタビューをもとに人口低下が続く県西地域の魅力発信をする。 |
| 行ってみよう！<br>生まれ変わった山北町へ！ | 山北町の観光名所やカフェに行き、その魅力の発信方法について提案する。 |
| 魅力ある町 | 山北町に防災についての提案と町の魅力を PR する。 |
| 山北改革 | 山北町の活性化のためにアスレチックの建設を提案する。 |

＜観光集客・人口増加ゼミ＞

| My プロジェクトの課題 | アクションプラン |
|---|---|
| スポーツ振興(マラソン、カヌー、登山、ロードサイクル、アスレチックなど) | リピートしたい体験やコース、イベントを設定する。河村城址を活用した弓道大会開催。 |
| 自然を生かした住宅設備の補助 | 地元の林業の活性化と資源育成。 |
| 育児しやすい環境 | 子供総合病院や幼稚園・保育園の誘致 |
| 観光地としてのアピール | 特産品やふるさと納税を活用した魅力発信 |
| 住み心地体験と移住政策 | 丹沢湖畔のお試し住宅・別荘/キャンプなど |

＜利便性・住みやすい町・こどもゼミ＞

| My プロジェクトの課題 | アクションプラン |
|---|---|
| 幅広い世代が住みやすい町づくり | 渋滞解消のため、電車やバス・車の代わりに歩くことを推奨する。 |
| 山北町を発展させる | 箱根町の良い所を参考にして取り入れる。 |
| 御殿場線の本数が少ない | 仕事場を山北町に作ったり、Wi-Fi スポットを作ったりと、利用者を増やすための工夫を考える。<br>在宅勤務地としての需要を開拓する。 |
| 山北町が不便 | 山北町にコンビニが少ないので、コンビニを増やす方法を考える。 |
| 箱根町にショッピングモールを作りたい | ショッピングモールはいらないという声があったため、高層でない緑のあるショッピングモールを提案する。 |
| 高齢者施設の負担を減らし、高齢者が安全に過ごせる町を作りたい | 施設の職員が機械を使うことで負担軽減を図る。高齢者に機械の使い方を教える。 |
| コロナ禍で高齢者が家にこもっている状況を改善したい | 高齢者とこどもが交流する機会を作る。 |
| 小田原の特産品をもっと知ってもらいたい | 特産品を集めて売る施設を作る。 |

オ　成果及び評価

a　授業の企画について

生徒の設定した課題ごとにゼミに分けたことで担任への負担の偏りを解消するだけでなく、充実した内容で進めることができた。

b　生徒の姿について

発表資料をスムーズに作ることができるようになり、多くの生徒が発表することに慣れてきた。フィールドワークを通して、学校外の大人と話すことができ、新しい視点を取り入れるこ

とができたり、自分の考えを実現することの難しさを感じたり、様々な気付きを体験できた。

カ　今後の課題

a　授業の企画について

授業の目標や見通しを、分かりやすく伝え、継続して意識付けることが非常に難しかった。教材の意図を十分につかめず、「自分が今、プロジェクト全体のどのあたりを支援しているか」「何のための活動であるか」を見失ってしまうことが教員側にもあり、全体像を把握して毎回の教材を理解する教材研究の時間を確保しなければならない。

生徒の設定した課題ごとにゼミを分けたことで担任への負担の偏りを解消することができたが、中には独自の展開で進めたゼミもあり、学年全体の一体感をつくることができなかった。最低限の取組内容を統一させた上で、各ゼミが独自性を出せるような工夫が必要であった。

b　生徒の姿について

課題解決に向けてユニークなアイデアを出す生徒がいる一方、ありきたりな発想しか持てない生徒もいた。今後は、アクションプランの中で実現させたいことの「機能」に着目して別の解決方法を考えさせるよう促す。

自分のプロジェクトに自信が持てていない生徒に対しては、積極的に校内外で自分のプロジェクトを発表する機会を設けることで場数を踏み、発表のスキルを付けるとともに自信も持たせたい。また、今年度は他校の生徒の発表を聞く機会をもつことができなかったため、来年度は他校の生徒の発表から刺激を受ける機会を多く設けたい。

### （２）フィールドワーク

ア　目　的

校外学習をとおして My プロジェクトの６つのゼミで地域課題について考えを深め、主体的・協働的に取り組み、さらに探究活動を深める。

イ　対象生徒

２学年（196 名）

ウ　訪問先

a　人口減少・産業・防災減災ゼミ：

山北町役場、南足柄市役所、小田原市役所、山北町商工会議所、秦野市役所、山北町子育て支援センター、介護施設あずみ苑、酒匂川、コンビニエンスストア

b　高齢化・医療福祉ゼミ：

山北町役場、開成町役場、小田原市役所、ツクイ・サンシャイン小田原

c　PR・特産品ゼミ：

道の駅足柄・金太郎のふるさと、山北町役場

d　魅力化・活性化・自然保存ゼミ：

小田原市役所、湯河原町役場、山北町観光協会、開成駅周辺、山北駅周辺、開成駅周辺、洒水の滝、フォレストアドベンチャー箱根、箱根の市（土産屋）

e　観光集客・人口増加ゼミ：

山北町役場、河村城、つぶらの公園、古民家カフェ「恭月」

f　利便性・住みやすい町・こどもゼミ：

山北町役場、開成町役場、箱根町役場、やまきたこども園わかば園舎、山北町子育て支援センター、開成町子育て支援センター、小田原フレスポシティーモール、御殿場線松田駅と周辺、御殿場線山北駅周辺、小田原駅周辺、箱根湯本駅周辺、介護老人福祉施設メゾン

エ　活動内容

a　事前準備

フィールドワークの行き先を、生徒が自分のプロジェクトに合わせて考えた。アポイントメントは、教員が電話で取り、その後の具体的な内容については生徒が連絡をすることとした。山北町役場など、大人数の生徒が訪問を希望している訪問先については教員が直接伺ってアポイントメントを取った。

フィールドワークの３週前の授業で、「効果的な取材の仕方」についてのジャーナリストの方の講演会を開催した（協力：カタパルト株式会社）。

さらに質問事項を事前に考えさせ、内容が具体的かつ訪問先に失礼に当たらないものになるように促す支援を行った。また、訪問先について場所や事業内容などを事前に調べさせた。

b　役場・施設訪問

それぞれの訪問先に生徒が出向き、生徒の設定した課題に応じて各課にインタビュー形式で質問を行った。役場については事前に質問内容を送付する必要があり、原則として、教員が引

率したが、生徒だけで訪問したところもあり、また、先方の都合で、メールにて生徒の質問事項を送付し、回答を得たケースもあった。

（山北町役場でのインタビューの様子）

（役場の方と「でごにぃ」との記念写真）

c　街頭インタビュー

山北駅、松田駅、開成駅、小田原駅の周辺及びコンビニや小田原フレスポシティーモールなどの商業施設にて町の人々に声をかけ、対話形式でインタビュー調査を行った。場所によっては、施設の許可が必要だったため、事前にアポイントメントを取った。また、山北高校の生徒であることや調査内容が街ゆく人に分かるように、名札をしたり調査中にテーマを大きく書いたポスターを掲げたりするなどの工夫をしたグループもあった。中には 50 人もの人にインタビューすることができたグループもあった。

（フレスポ小田原シティモールでの街頭インタビューの様子）

（道の駅足柄・金太郎のふるさとでのインタビューの様子）

d　観察調査

酒匂川の様子を観察した。

e　事後指導

フィールドワーク後、ワークシートを使ってインタビュー内容と回答の振り返りを行い、そこから傾向をつかみ考察をまとめた。

オ　成果及び評価

生徒が自分のプロジェクト内容に応じて行き先を決めることにより、生徒自身が生徒主体の活動と捉えることができた。訪問先への事前連絡においても、主体性を持って取り組み、質問内容を整理してから電話をかけるようになるなど、成長が見られた。また、生徒が教員や親以外の「初対面の大人」と話す良い機会となり、訪問する際の身だしなみや言葉遣いにも気を付けるなど成長が伺えた。

この研究において、フィールドワークの重要性を再認識させる内容であった。人と人との関わりの中で、教育そのものが「生きて働く」ことに繋がっていくことを実感させられるものである。是非、今後とも続けていきたい取組である。

カ　今後の課題

a　事前準備における課題

訪問先の担当者より次年度も実施する予定があれば早めに連絡をするよう要望されたため、来年度は、企画の動き出しをもっと早くすることが必要である。

訪問先への交通手段を公共交通機関もしくは自転車か徒歩としたため、遠方への取材を希望していた生徒が希望の訪問先へ行けなかった。来年度以降は、生徒が遠方へ取材できる機会を設ける工夫が必要である。

質問内容の精査などの指導において、授業以外の時間を使わざるを得ない状況ができた。準備時間を確保し、教員の負担を軽減するために、授業計画を見直す必要がある。

b　当日の課題

インタビューを通して相手の話をしっかりと聞くことができた生徒が多かった。反面、質問内容がうまくまとまっていないグループも見受けられたため、事前にインタビューの練習がさらに必要であることが分かった。

希望の訪問先との調整が叶わず、学校に居残った生徒がいた。教員２名が学校で対応したが、それらの生徒への支援が十分でなかった。

c　事後指導における課題

取材した情報の整理・分析を十分に行うことができず、事後指導について教員間の意識の共有化に課題を残した。

来年度以降は、具体的な年間指導計画及び学期ごとの授業計画を早期に立て、教員の役割分担と指導内容の理解に務める工夫をしたい。学校設定教科「あしがら」で実施する週２時間という設定についての内容も検討していかなければならない。

## ３　学校設定教科「あしがら」（２学年）

### （１）　学校設定科目「未病」

ア　目　的

未病に関する基本的な知識を身に付け、地域に必要な健康プロジェクトを推進する中で、主体的・協働的に課題を発見し解決する過程を通して、自己肯定感を育み、地域貢献できる人材を育成する。

イ　対象生徒

２学年（196 名）

ウ　活動内容

a　共通

室内で行ったロコモ度テストを通して、移動機能の状態を確認し、正しいテスト方法や年代による移動機能の低下について学んだ。

b　東洋医学コース

①　未病と東洋医学についての講義

神奈川衛生学園専門学校東洋医療総合学科から講師を数回招いて、未病という概念の復習や東洋医学の考え方について学び、ツボ押しや経絡ストレッチの実践を通して理解を深めた。

②　健康づくりについての講義

総合型地域スポーツクラブ「松田ゆいスポーツクラブ」から講師を招き、スポーツクラブで行われている「年代に合った運動能力を伸ばすプログラム」について説明を受け、年齢によって身に付きやすい身体能力について学んだ。

③　グループ分け、テーマ設定

講義で聞いたことを踏まえて、改善ツール・予防ツール・未病イベントのどれを考案したいか、また、どの年齢層に向けたものを作りたいかを考えさせた。選んだ方向性によって教室分けとグループ分けを行い、グループの中でテーマや対象年齢を改めて設定した。

④　情報収集、成果物作成

設定した年齢層向けのものを考案するために、どんな情報が必要なのか、何が課題として考えられるのか、周囲を参加させるには何に注意したら良いのかをグループで議論し、イン

ターネットや書籍等で調べ学習を行った。動画や写真で健康づくりを訴えるグループは、分かりやすく親しみやすいものを作るよう心掛けて撮影を行った。

⑤　発表準備

分かりやすい、聞きやすい発表を目ざして、スライドを作成した。また、中間発表を行うことで、進捗状況の確認と各グループへのフィードバックを行った。

c　未病普及コース

カタパルト株式会社の佐藤氏を講師として招き「新型コロナウイルス感染症感染拡大における課題とその解決」をテーマに探究的な学習を進めた。

①　アイスブレイクとグループ編成

今回の未病普及の探究テーマの確認とアイスブレイクを行うとともに、３人１組のグループを編成した。

②　課題抽出

新型コロナウイルス感染症感染拡大前後での生活様式の変化等の課題を、グループに分かれたワークショップ形式で確認し、課題の抽出を行った。講師と担当教員がファシリテーターとして入り、円滑な議論が行われた。

（「未病普及コース」授業風景）

③　フィールドワーク

各グループの設定した課題について調査・取材するためにフィールドワークを計画した。取材先を精査したのちにアポイントメントを取り、10 月 15 日（木）に実施した。また、後日リモートでの取材も行った。

（リモートでの取材風景）

（取材風景）

④　発表準備

フィールドワークで得た根拠をもとに、スライドを作成した。講師と担当教員がファシリテーターとして入り、グループでの議論を活性化させた。また、毎時の中間発表を通して、進捗状況の確認と、各グループへのフィードバックを行った。

d　コース別校内発表会

12 月 17 日（木）の校内発表会では、各グループでスライドや模造紙等を用いてロジカルに発表を行うことができた。また、発表会に参加した外部の方からも高い評価を得ることができた。

（学校設定教科「あしがら」コース別発表会の頁参照）

エ　成果及び評価

コース選択を取り入れた授業を展開したため、人数のばらつきがみられたが、生徒はそれぞれの興味や進路に応じたコースを選択することにより、興味・関心が得られ、学びが深まった。

企業や総合型地域スポーツクラブ、専門学校など校外の方々がファシリテーターとして参加することにより、それぞれの学習内容に応じたアドバイスや専門的知識が得られ、スムーズな展開の中で学びの深まりを感じることができた。

オ　今後の課題

生徒の学習の内容に応じた校外の学びの場を提供できるよう、学校と外部の団体をつなぐ人材や組織体制の構築が必要である。

今年度は、コロナ禍のため制限のある中での学習となったため、計画通りに進めることが難しかったが、今年度の成果をうまく活用し柔軟に運用できる年間計画の作成が課題である。

## （２） 学校設定科目「地域防災」

ア　目　的

・ 災害に関する基本的な知識を身に付け、災害に対応できる力を養成する。

・ 主体的・協働的に課題を発見し解決する過程を通して、自己肯定感を育み、地域貢献できる人材を育成する。

イ　対象生徒

２学年（196 名）

ウ　活動内容

a　防災の基礎知識習得

新型コロナウイルス感染症の影響による学校休業中に、課題による防災学習を行った。１学期は､防災に関する基礎知識を習得する時期として位置付け､以下のような課題に取り組ませた。

課題①　災害時の食と栄養の確保について
災害時の心の健康について
山北町における災害弱者について　（いずれか１つを選択してレポート作成）

課題②　新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言下で災害が起きた場合に想定される問題点と対策について

課題③　過去の火災災害（京都アニメーション放火殺人事件､関東大震災､糸魚川大火災､阪神淡路大震災、首里城火災）の原因・火の広がり方の特徴・被害状況・消火にかかった時間について

課題④　火山噴火の予知、必要な備え、噴火による被害、必要な支援について

課題⑤　課題①～④で学んだ内容を踏まえた防災散歩レポート作成（自宅近隣地域の災害時の危険個所を見つけ、想定される被害と対策について）

また、登校が可能になってからは、以下のような課題に取り組ませた。

課題⑥　学校内で災害時に危険な被害が想定される箇所を探す

課題⑦　これまでに学んだ内容を踏まえて、防災に強いまちを描いてデザインする

２学期以降は､HUG コース､DIG コース､酒匂川未来コースの３つに分かれた探究活動を行い、コース分けは、生徒の希望に沿う形とした。２学年担当教員のうち、防災担当教員７名を３コースに分けて配置し、授業づくりに当たった。

b　HUG コース

①　山北高校の避難経路について

山北高校は広域避難所に指定されているため、災害時に地域住民が避難してくる。災害の時間帯によっては、学校職員だけでなく生徒も避難者の誘導などの避難所運営に関わる可能性があることを生徒に理解させた。

今回の授業では､「山北町で震度６弱、津波の心配はない」地震が起こった場合に避難所としての山北高校で起こり得る以下の３つの課題についてグループワークを行った。

課題①　体育館への避難者の誘導ルートの設定方法

課題②　避難者名簿の作成方法と作成に向けて準備するもの

課題③　不足するトイレについて備える方法

② クロスロード

避難所生活で起こる様々な問題について、以下の８つの設問に対する YES 又は NO の判断を行う活動をした。さらに相互に意見を交わすことで、反対の考えの理解を深めた。

設問①　避難してきたが、校舎に鍵がかかっている。窓を割りますか。

設問②　避難所に入りきれない。隣町の人に場所を移ってほしいとお願いしますか。

設問③　ペットを連れて避難してきた老人がいる。ペットを避難所に入れますか。

設問④　近隣の避難所が満杯になり、帰宅困難者が避難してきた。どうしますか。

設問⑤　避難者の人数に対し食料が不足しているが、今ある食料をどうしますか。

設問⑥　避難所を取材したいとテレビ取材スタッフが来たが、取材を受けますか。

設問⑦　毛布は避難者に１枚と決めているが、２枚欲しいという避難者がいる。どう対応しますか。

設問⑧　発災から１か月が経ち、援助物資の古着が余っているが保管場所がない。古着はどうしますか。

③ 実際に起きた避難所トラブルを知る

東日本大震災などのこれまでの災害における、避難所生活で実際に起きたトラブルについて調べた。そして、そのトラブルを少しでも少なくする方法についてグループで話し合い、協議して共有させた。

食料確保、健康管理、防犯対策、性犯罪対策等さまざまな問題が挙げられた。

④ ボランティアの５つの要素

自発性・社会性（公共性、公益性、福祉性、利他性）・無償性・先駆性・継続性（責任性）を理解させ、ボランティアに参加する際、どのような心構えで対処するか考えさせた。

⑤ 身近な材料で避難所グッズ製作

避難所生活を少しでも快適にできるよう段ボールでベッド、スリッパ、簡易トイレ及び、大きいポリ袋を用いてシェルターを作った。

製作する際、Chromebook を使ってＮＨＫの「つくってまもろう」のホームページの動画を視聴しながら作り方を学んだ。動画で学んだ内容にとどまらず、それぞれで工夫を加えていたグループもあった。例えば、トイレに蓋を付けたり、寝る際、周りの目が気にならないようなパーテーションを独自に考えたりしていた。また、ベッドについては実際に使ってみて強度を確かめ改善するなど、試行錯誤を繰り返していた。枕を新聞紙で作るアイデアを出していた生徒もいた。考えながら実際に体を動かす作業を楽しんでいる様子が多く見受けられた。

製作終了後、意識した点・改善点などをグループで考えさせた。今回生徒が作った避難所グッズはいざという時に使えるように学校で保管している。災害時には、今回 HUG コース

生徒が率先して必要なものの作り方を避難者に指導することを期待している。

Chromebook で動画視聴しながらの作成

トイレの中には丸めた新聞紙を入れる

実際に寝てみて強度を確かめる

段ボールの中の工夫でベッドの強度を高める

⑥　避難所運営ゲーム（HUG）

これまでの授業で学んだ内容を確認したうえ、実際に避難所運営ゲーム（HUG）を行った。避難所運営ゲームとは、学校の敷地内配置図に避難者を模したカードを適切に配置していく、というものである。避難者のカードには、避難者の年齢や家族構成、健康状態、国籍などの情報が記載されている。リーダーがカードを１枚ずつ順番に読み上げていき、プレイヤーは避難者カードが読み上げられる順に避難所敷地内のどこかに配置しなければならない。１枚のカードを配置するのに与えられる時間は約 10 秒であり、素早い判断が求められる。リーダーは避難者カードの他にイベントカードも読み上げる。イベントカードの内容は、天候状況の変化や近隣の避難所の状況、食料物資の配達状況やテレビ取材依頼など多岐に渡る。プレイヤーは、避難者の配置と同時進行でイベントカードの対応も考えなければならない。

今回生徒は６名ほどのグループを形成し、HUG を体験した。新型コロナウイルス感染症の影響も考慮しつつ、体調不良者の対応に頭を悩ませる様子が見受けられた。

避難者カードを配置する様子

避難者の情報を読み、配置場所をグループで議論

c　DIG コース

①　山北町役場発行の防災マップを活用し、厚紙５枚貼り合わせで 100 メートルとした山北町の立体図を作成した。

等高線を丁寧に追いかけて型紙を作る。

型を合わせてカット後、５枚貼り合わせる。

４チームの成果物を合体させる。

ハザードマップから課題解決の議論をする。
グループごとに DIG の準備。

②　①で製作した立体図を活用し、「水害」「地震」「噴火」の３グループに分け、探究活動を展開した。

●「水害」グループ

酒匂川水系の、豪雨被害を、万治３(1660)年まで遡って状況調査し、堤決壊や土手切れ

被災地を立体地図上にマークした。結果、勾配の強い渓谷部から扇状地に接続する地域や、河川の蛇行の強い地点のインフラの強靱化対策が急務と言える課題箇所が明確化された。

●「地震」グループ

ハザードマップや断層マップを検索するとともに、関東大震災時の被災状況や東日本大震災時の風評被害などを検証して、立体地図上に断層帯を明示した。結果、初期対応の避難所の活用に課題があることや妊婦と高齢者の対応などの検討も必要であることが分かった。また、阪神淡路大震災の被害状況などの検証から東名高速道路と都夫良野トンネルや国道 246 号線及び JR 御殿場線の谷峨鉄橋など、インフラの強靱化について課題意識を持った。

●「噴火」グループ

富士山の宝永大噴火での焼砂堆積による被害状況と、火山灰層の土地活用での影響等を調査し、集中豪雨時の土手切れや土石流発生、堤防決壊や通水不能被害の箇所を明確化し、結果、災害発生が予測される地域的課題をまとめた。水はけのいい土地柄であることが焼砂堆積と関係していることも理解することができた。

d　酒匂川未来コース

①　酒匂川の基本的な知識（地理や歴史、水害）を得るため、ワークシートを作成し、それに沿って調べ学習を行った。このコースでは、「酒匂川ふるさと絵本」の作成に関わりつつ、酒匂川や酒匂川にまつわる災害などについて学習した。同絵本について基本的な知識を得るために酒匂川ふるさと絵本作りのキックオフイベントの動画（インターネットで視聴できる）を見て、絵本作りの考え方を理解した。

②　本コースでは、先述した通り環境省「森里川海プロジェクト」の一環として行われている「酒匂川ふるさと絵本」に参加した。具体的には、酒匂川の流域の伝統・文化・生活などについて地域住民から集めたアンケートを分類・整理する作業を行った。アンケートを読み、関係のあるものをいくかの大項目に分類し、模造紙に貼り付ける形で整理していった。分類・整理したアンケートは、イラストなどを添えて視覚効果を意識した制作物「酒匂川イメージマップ」として模造紙一枚にまとめ、校内で展示発表を行った。また、本校生徒は参加できなかったが、酒匂川ふるさと絵本作りの一環として行われたイベントにも出展し、参加者に披露された。

③　酒匂川イメージマップを作る過程で疑問に感じたことや「もっと知りたい」と思ったことを整理し、ワークシートにまとめた。このワークシートをもとにして、地元のことを熟知する住民の方（毎回３名が来校）からインタビュー形式で話を聞き、より深く酒匂川の歴史や防災などについて理解を深めた。また、生徒が知らない酒匂川の今昔について様々な話をしてくださり、聞き取ったことを生徒はワークシートに記録として残した。酒匂川について学ぶだけでなく、より深い地域理解につながったほか、同世代で固まりがちな高校生が異なる世代と交流を持つよい機会ともなった。

e　まとめ・発表

各コースで経験した内容から考え、探究活動を通してその内容をまとめ、12 月 17 日（木）の校内発表会に向けて準備を進めた。酒匂川未来コースについては、作成した模造紙を当日掲示した。

エ　成果及び評価

本科目を通して、生徒は防災についての基礎知識を得ることができた。また、実際の災害を想定して対応を考える中で想像力や創造力が養われた。また、12 月 17 日（木）の発表のためにスライド等を作る中で、まとめる力とプレゼンテーション力が向上した。

オ　今後の課題

レポート課題への取組や実習等を評価の判断材料としたが、客観的に評価できる指標を作成するなど、評価の観点の整理がさらに必要であり、今後の課題である。

災害への備えや、被災後の対処について思考を巡らせることができたが、災害発生のメカニズムなどを学習する機会を持つことができなかった。この反省を活かした年間計画を見直すことが必要である。

## ４　校内発表会

### （１）　学校設定教科「あしがら」コース別校内発表会

ア　目　的

学校設定教科「あしがら」の取組に関する発表会を行い、「未病」「地域防災」の各コースの学習について学年全体で共有し、今後の My プロジェクトに関わる学習を、さらに深化させるとともに、学校と地域が連携した一層の教育活動の充実と推進を図る。

イ　日　程

令和２年 12 月 17 日（木）９時 40 分～12 時 30 分

・　９時 40 分　　各 HR 教室にて趣旨説明

＜発表準備＞　　（コース別教室へ移動）

・10 時 05 分　　発表練習

・10 時 20 分　　１回目発表

＜ 休　憩 ＞

・10 時 45 分　　２回目発表

・11 時 00 分　　３回目発表

・11 時 15 分　　４回目発表

＜ 休　憩 ＞

・11 時 40 分　　５回目発表

＜ 片付け ＞　　（各 HR 教室へ移動）

・12 時 10 分　　振返りシート記入及び回収　SHR

ウ　対象生徒

本校２学年

エ　発表会の内容

＜発表グループ一覧＞

| コース | グループ名 | テーマ | 発表教室 |
|---|---|---|---|
| HUGコース | 九尾 | 避難所生活を上手に運営するには | 2－1教室 |
| HUGコース | 14(ジューシー) | 暮らしやすい避難所にしよう | 2－1教室 |
| HUGコース | けんちん侍 | 避難所 | 2－1教室 |
| HUGコース | 1(いち) | HUGコース～防災グッズ編～ | 2－2教室 |
| HUGコース | グループ2 | ダンボールで作った避難グッズ | 2－2教室 |
| HUGコース | 石田三成 | ダンボールの利便性 | 2－2教室 |
| HUGコース | 4班 | ダンボールで作れる避難グッズ | 2－2教室 |
| HUGコース | GOHAN | What is HUGコース！！ | 2－2教室 |
| HUGコース | たくみんず | 避難所トラブル | 2－2教室 |
| DIGコース | 噴火 | 富士箱根伊豆火山帯 | 3階BC棟間 |
| DIGコース | 水害 | 被害を少なくしよう！ | 3階BC棟間 |
| DIGコース | 地震 | 二次災害 | 3階BC棟間 |
| 東洋医学コース | シキ(四季) | 薬膳と身体の関係を知る。 | 2－4教室 |
| 東洋医学コース | 山本工務店 | 肩や膝のケガを防ぐためには、どのツボを刺激すれば有効か。 | 2－3教室 |
| 東洋医学コース | (有)木村設備工業(水道) | 腰痛に効くツボを調べる。 | 2－3教室 |
| 東洋医学コース | グループ | アンケートに応えて、皆の健康状態から自分の健康状態を知る。 | 2－4教室 |
| 東洋医学コース | ディスコース・未病 | 腰痛によって生じる体の不調を改善する。 | 2－3教室 |
| 東洋医学コース | チーム助っと | 舌の形や色を見て自分の健康状態を知る。 | 2－4教室 |
| 東洋医学コース | T. F | 自分の脈の種類や脈拍数を知り、毎日の健康状態の確認に役立てる。 | 2－3教室 |
| 東洋医学コース | さきび | 身体に良い食事のメニューを考え、運動量に応じたカロリー計算をした。 | 2－3教室 |
| 東洋医学コース | パツマル | 体全体のツボについて調べた。 | 2－3教室 |

| コース | グループ名 | テーマ | 発表教室 |
|---|---|---|---|
| 東洋医学コース | 改善プログラマー | 忙しい人にも健康を | 2－5教室 |
| 東洋医学コース | ワンチーム | 未病　東洋医学 | 2－5教室 |
| 東洋医学コース | やっちまい屋 | 治療 | 2－5教室 |
| 東洋医学コース | コリウス | 現代病の改善プログラム | 2－5教室 |
| 東洋医学コース | 川添プログラム | 未病予防の食生活プログラムを作る | 2－5教室 |
| 東洋医学コース | Old father | 健康寿命を延ばすには | 2－6教室 |
| 東洋医学コース | ぐみーず | ストレッチ経絡ダンス | 2－6教室 |
| 東洋医学コース | ゆかいな仲間達 | ～健康的なBody～ | 2－6教室 |
| 東洋医学コース | チーム丸川 | 東洋医学の本気 | 2－6教室 |
| 東洋医学コース | 銀杏Boys | 総合型地域スポーツクラブと協働した、子どもたちを対象にした未病イベントの実際 | 2－4教室 |
| 東洋医学コース | 斎藤、佐藤拓、細川 | 山北町のお祭りを地域振興につなげる | 2－4教室 |
| 東洋医学コース | 今井、高橋航、竹下 | BIOTOPIAで未病イベントをしよう！ | 2－4教室 |
| 未病普及コース | きのこの山 | 一番感染を防げる電車の乗り方を検討する | 社会科教室 |
| 未病普及コース | ほうれん草 | 電車の吊革や手すりにつかまらないウイルス対策 | 社会科教室 |
| 未病普及コース | てんどんまん | コロナ→空いた時間でスマホをみるなどして目が悪くなるのを防ぐ | 社会科教室 |
| 未病普及コース | まじか | コロナ後のスキンシップや性交渉について | 社会科教室 |
| 未病普及コース | ポメラニアン | コロナ後のイベント開催を考える＝来年の文化祭で山北基準をつくりたい | 社会科教室 |
| 未病普及コース | チョコボール | アクリル板使用による課題を克服したい(聞こえずらい、伝わりにくい) | 社会科教室 |
| 未病普及コース | やんちゃむ！ | コロナ禍で、接触ができないお年寄りをさびしくしたくない | 社会科教室 |
| 未病普及コース | たかうみ`S | コロナ禍でよくなった環境を保護したい | 社会科教室 |
| 未病普及コース | 週6部活 | スマホの消毒方法が煩わしく、効果が疑問なので、新しい方法はないのか検討したい | 社会科教室 |

・地域防災　　HUG コース：２年１組、２組（９チーム）

DIG コース：渡り廊下作品展示及び説明（３チーム）

酒匂川未来コース：渡り廊下作品展示（３階 BC 棟間）

・未病　　東洋医学コース：２年３組、４組、５組、６組（21 チーム）

未病普及コース：社会科教室（９チーム）

発表会については、各 HR 教室等を使い、ポスターセッション形式で行った。（発表時間：５分）聴き手は質疑を行いながら発表を聴き、発表後は付せん紙に質問や感想等を記入し発表者へ渡し（質疑：５分）次の発表ブースへ移動した。（移動：５分）

地域に関わる実践的なプロジェクトについては、２月の校内発表会の代表グループとして発表を行うこととした。

＜発表会の一部＞

「地域防災」における DIG コースでは、作製した近隣の立体地形図や山北町の災害マップをもとに、地震、がけ崩れなどの自然災害における地域への影響について解説した。HUG コースでは避難所運営について学習した。

HUG コースでは、ダンボールで作製したスリッパやパーテーション、トイレなど避難所生活に必要なグッズについて解説した。また、「窃盗」や「性犯罪」など避難所生活における不測の事態についての説明や、そうならないための避難所運営の方法などを発表した。

酒匂川未来コースでは、近隣の方から「聞き書き会」を通して得た酒匂川の情報をまとめ、展示を行った。展示の中では、歴史を紐解く中で、河川の氾濫による災害についても触れた。

「未病」の発表では、東洋医学的な視点から「未病診断ツール」「未病改善ツール」など地域の方々へ還元できる内容の発表が多く見られた。未病診断ツールでは、舌診や経穴・経絡を使った発表など「未病」の考え方を理解した発表が多く、改善ツールでは、経穴を使った改善方法や子ども達への運動の機会の確保など様々な視点から生徒自身が試行錯誤した発表が多く見られた。

発表会全体として、グループの中で発表が偏らないよう、回数や参加者の設定をし、全員が発表を経験できるよう行った。また、参加者の意見や感想が全体で共有できるよう、付せん紙を使い振り返りを行った。

オ　成果及び評価

今回の発表会では、コロナ禍でありながら、山北町議会議員をはじめ、地域の方やコンソーシアムの関係者など、外部から約 20 名の参加者を得ることができた。

参加者アンケートの自由記述では「それぞれのチームでテーマに対する着眼点が素晴らしかった」「現状把握→調査→課題の整理→対策案→まとめで構成されており、パワーポイントも見やすかった」「情報のとりまとめやプレゼンのスライドの作成に関しては、どの班もよくできていた」など前向きな回答が多くあった。しかし、「どの生徒もプレゼン時に聞き手と目を合わせることが少なく感じられました」「プレゼンの仕方について学習する時間があるとよい」など、これからの課題を外部から提示していただくことができた。

山北町役場、山北町町議会議員等の参加が多くあり、アンケートの回答をいただけたことから、「山北町への提言」という部分に関して、少しずつではあるが、具体性を持たせることができてきていると考えられる。

今回はポスターセッション形式で行い、１グループ最大５回の発表があり、一人一回は必ず発表することができた。

カ　今後の課題

今回の発表会は、基本的に各 HR 教室を会場にポスターセッション形式で行い、会場担当教員が司会やタイムコントロールを行った。今後は生徒が主体的に運営できるようにしていきたい。

担当グループが中心となり学年職員で協力し運営したが、グループ、担当学年だけでは人手が足りなかった。今後は生徒主体の運営となるよう調整しながら、学校全体の取組として企画・運営できるような工夫が必要である。

## （２）　未来探究校内発表会

ア　目　的

各学年における探究的な学習の１年間の取組を、学校全体で共有する。また、生徒の探究活動における発表を行うことで、学習をさらに深化させるとともに、学校と地域が連携した一層の教育活動の充実と推進を図る。

イ　日　程

令和３年２月４日（木）９時 20 分～12 時 30 分

・前半の部：９時 30 分～11 時 10 分　代表生徒による発表

・後半の部：11 時 30 分～12 時 20 分　露木 志奈 氏によるオンライン講演会

ウ　対象生徒

本校１学年及び２学年

エ　発表会の内容

１年生では、「山北」、「未病」、「防災」の各単元で学習した内容について、２年生では、学校設定科目「未病」「地域防災」で学習した内容について、特に地域との関わりの中で、実践的なプロジェクトについて代表グループによる発表を行った。

発表時間は各グループ５分。生徒はワークシートを使い、振り返りを行いながら参加した。

＜１年生＞

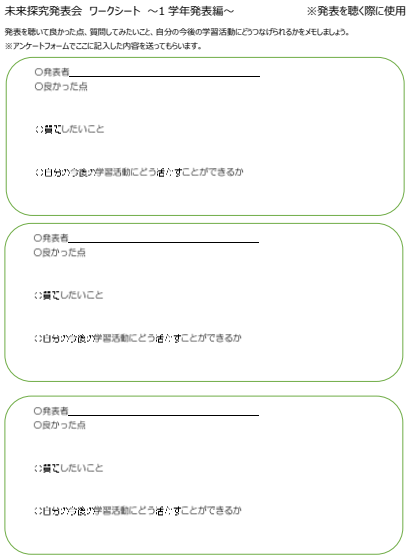
| | グループ名 | テーマ |
|---|---|---|
| 1 | ７班 | 山北の観光地 |
| 2 | １－３　４班 | 山北の医療 |
| 3 | Queen 酒井 | 少子高齢化 |
| 4 | チーム Mountain 小伊 | 睡眠の大切さ |
| 5 | 未病・運動 | 運動する時間帯と節度 |
| 6 | ＧＯＯＤＹ | 環境の変化による人間への影響 |

＜２年生＞

| | グループ名 | テーマ |
|---|---|---|
| 1 | たくみんず | 避難所トラブル |
| 2 | 週６部活 | スマホの消毒について |
| 3 | ポメラニアン | 学校でイベントを開催したい |
| 4 | 銀杏 Boys | 子ども達に運動の機会を　～新聞紙を使った運動～ |
| 5 | ゆかいな仲間たち | 健康的な～Body～ |
| 6 | たかうみ’S | 山北町の自然環境について　～コロナ前とコロナ後～ |

今年度の校内発表会は、新型コロナウイルス感染症対策における緊急事態宣言下での実施となり、当初は、体育館での実施を計画していたが、各 HR 教室を使っての発表会に変更した。

発表グループは事前に発表動画を撮影し、探究係の生徒が各 HR 教室で司会をし、スケジュールに沿って、動画の視聴を行った。その際、ワークシートを活用し、参加型プレゼンテーションとなるよう工夫した。

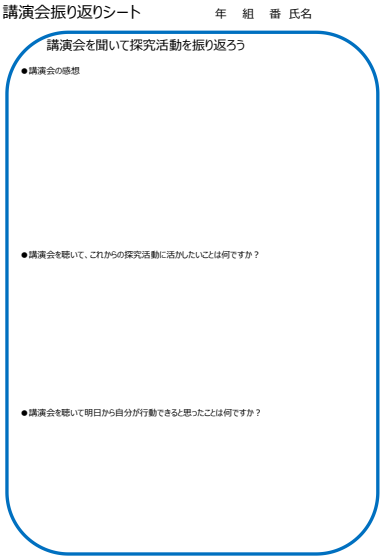

未来探究発表会　ワークシート　～1 学年発表編～　　※発表を聴く際に使用

発表を聴いて良かった点、質問してみたいこと、自分の今後の学習活動にどうつなげられるかをメモしましょう。
※アンケートフォームでここに記入した内容を送ってもらいます。

○発表者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
○良かった点
○質疑したいこと
○自分が今後の学習活動にどう活かすことができるか

○発表者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
○良かった点
○質疑したいこと
○自分が今後の学習活動にどう活かすことができるか

○発表者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
○良かった点
○質疑したいこと
○自分が今後の学習活動にどう活かすことができるか


講演会振り返りシート　　年　組　番　氏名

講演会を聞いて探究活動を振り返ろう

●講演会の感想

●講演会を聴いて、これからの探究活動に活かしたいことは何ですか？

●講演会を聴いて明日から自分が行動できると思ったことは何ですか？

オ　講演会の内容

「今、世界中で何が起きているのか」～私たちだからできること～　と題し、露木志奈 氏（環境活動家）を講師に招き、オンラインで講演会を行った。露木氏は神奈川県出身で県内公立中学校を卒業後、インドネシアの Green School Bari へ進学した。現在は大学を休学し、小中高校生を対象とした気候変動についての講演会を全国各地で行っている。

探究活動の１つのテーマに「自分事化」がある。露木氏は自らの「問い」から「実践」し現在では生徒と同年代ながら全国各地で精力的に活動している。そのような姿から生徒が何かを感じ取ってくれることを願い、露木氏を講師とした講演会を実施した。

カ　成果及び評価

発表会後の生徒アンケートでは、「主張がしっかり伝わるプレゼンテーションであったと思いますか」の設問について、「すべて主張がしっかり伝わる発表」43.2%、「ほとんど主張が伝わる発表」34.2%であった。「全体を通して、自信を持ってプレゼンテーションができていましたか」の設問について、「すべて自信を持っている発表」42.7%、「ほとんど自信を持っている発表」31.7%であった。

教員アンケートでは、主張がしっかり伝わるプレゼンテーションであったと思いますか」の設問について、「すべて主張がしっかり伝わる発表」43.8%、「ほとんど主張が伝わる発表」50.2%であった。「全体を通して、自信を持ってプレゼンテーションができていましたか」の設問について、「すべて自信を持っている発表」18.8%、「ほとんど自信を持っている発表」75.0%であった。自由記述では、「今回は事前収録という形であったが、この形も思っていたよりも良かった」「生徒に指導をするために、我々教員がchromebookやスライド等を使いこなす必要があると感じた。また、それを学ぶ機会があると良いと思った」などの回答があった。

講演会の事後アンケートでは、「講演会後、世界の問題について考え方が変わりましたか」の設問について、「変わった」50.3%、「やや変わった」30.7%であった。「環境について自分にできることはあると思いますか」の設問については、「あると思う」52.8%、「少しあると思う」30.7%であった。また、自由記述では、「問題と解決策を簡単に考えるのではなく、過程や順序を知る事が大切だとわかりました」「どんな課題に対しても今自分にできることを探そうと思いました」「地球温暖化のために自分達ができることがもっとないか探してみたいと思った」などの回答があった。

発表会については、生徒が前向きに取り組んだ様子が、アンケート結果からも示唆された。また、講演会については、自由記述でも「自分事」と捉えている回答が多く、今後の生徒の探究活動が期待できる結果となった。

今回の発表に関しても、運営指導委員会委員、町議会議員の方やコンソーシアムに関わる方々のオンライン参加があった。２年生のいくつかのグループは、12 月の発表会での反省を生かし、「山北町への提言」ということに関し、具体的な方策案として発表することができた。

キ　今後の課題

オンラインでの実施に際し、コンソーシアム団体でもあるベネッセコーポレーションに協力頂いた。所管するグループや学年の指導だけでは、スムーズにいかなかったように感じる。今後は、全職員で運営に当たるとともに、来年度以降も引き続き、発表会の運営も含めた形で、コンソーシアムの協力を期待したい。

## ５　ＲＥＳＡＳの活用

（１）目　的

・ 情報をもとに地域の課題発見、考察、分析し論理的思考を身に付ける。
・ 教科の枠を超えて、生徒が社会に出てから必要とされる情報の見方を養っていく。
・ RESAS を用いて地方創生を情報の中から問題解決、課題解決していく姿勢を養う。

（２）対象生徒

実施学年：令和２年度入学生（１学年）196 名
教科：総合的な探究の時間「未来探究」
単元　：地方創生をテーマとした総合的な探究の時間

（３）　RESAS を使用して良かった点

初めて RESAS を使用する際に何を調べればよいのか、何に着目すればよいのかなどデータを見る際に具体的に表示されており、授業を進める上での指針になった。また教員にとっても、教材研究をする上でも役立ち、何を目的に使用させたいかなどを明確に指示することができ、スムーズに活用することが出来た。しかし、本来の使用の目的は違うと考えられるので、導入後、模索は必要だと考えられる。

（４）RESAS の使用しづらかった点

実際に RESAS を使う際に、使い方の例題がなかったため、使い方を一から考え自分で教材研究をしなければならなかったので、導入するときに大変な労力であった。また本校では、Wi-Fi が導入されてはいるが生徒が一斉に使用すると重くなり、遅くなってしまう傾向があり、授業の中で全体に使い方の説明を一斉にする必要があったが、大まかな使用方法しか教えられず、後は生徒任せになってしまった。ICT を活用する際には PC 教室等で行うか、情報の授業で活用するなど、導入する際に注意が必要だと感じた。また RESAS では生徒が必要なときに使用したいデータの見つけ方や活用方法などが詳しく載っていないため、事前に例題を作成することが必要である。また、chromebook ではエクセル等が使用できないので RESAS のデータを使用する際には、変

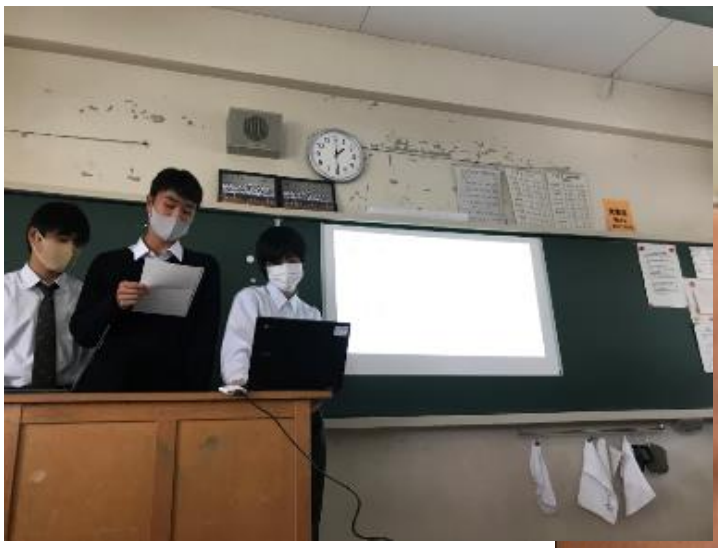
換などの機能を事前に確認をする必要がある。本校の環境では、違う使い方を模索する必要があると感じた。

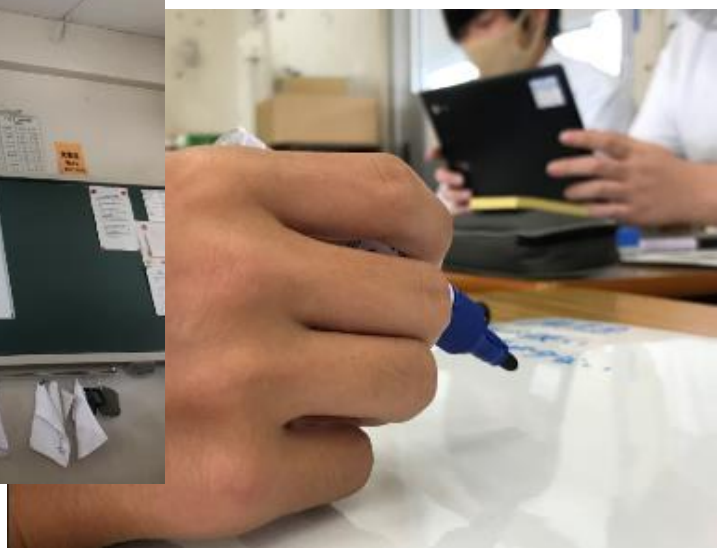
（５）今後 RESAS をどのように活用したいか

本校では今後も探究活動を充実させていく予定なので、まずは総合的な探究の時間に RESAS を使いエビデンス資料として活用していきたいと考える。他にも探究活動がさらに教科横断的な学習になれるように総合的な探究の時間に限らず、各教科で活用できるようにしていきたい。数学ではデータの分析で活用し、それをきっかけに生徒に分析させる力を身に付けさせることが出来たら面白いと思う。また地歴・公民では、年代別に、その地域では何が起きたのかなどを考察し、歴史的背景が、みられるようになると面白いと考える。また理科などにも普及していき、教科問わずに繋がりを持って授業展開が出来たらいいと考える。

（６）RESAS を使用して生徒の学びにどう変化が起きたか

実際のデータをみることによって、生徒が自らその時代の背景を読み取るようになり、その過程や結果などを考察するようになり、自ら深く学ぼうとする姿勢がみられるようになった。生徒自身の学びの姿勢や調べることが自発的に行われるきっかけになるようになったと思われる。RESAS の使用については、探究活動のエビデンスとして扱うことを当初は考えていたが、データの見方や情報を扱う事を指導することによって、生徒の成長の可能性を見られたので、様々な機会を見つけて活用していきたいと考えられた。





# Ⅳ　研究開発実施の効果と評価

## 1　研究開発目標の効果と評価

目標（１）「山北高等学校を中心に、行政・町民・企業が一体となる」ことについて

①　進捗状況

○　山北町町議会議員に授業及び発表会を参観していただく機会を設定し、生徒の活動内容を紹介するとともに、取組の概要を説明し、事業について理解を深めることができた。

○　国立教育政策研究所教育政策・評価研究部は、本校と協力体制にある山北町観光協会会長をはじめとする同部が選出した本事業のキーパーソンにインタビューを行った。

　このインタビューには本校職員も同席し、情報を共有する体制を整え、また、同部には、生徒対象アンケート実施の際にも質問事項の選定などで協力をいただいた。

○　総合型地域スポーツクラブ松田ゆいスポーツクラブは、代表者が定期的に来校し、生徒への助言をいただいた。特に、生徒の発案によって令和２年 12 月５日（土）に実施した、地域の子ども達を対象としたイベントにおいては、安全確保の指導や広報方法の指導なども含め、全面協力を得た。

○　山北町都市農村交流活性化推進協議会は、１学年フィールドワークにおいて、コース設定のアドバイスや説明への協力人材の紹介などしていただき、高校との連携協力体制が確立し、今後のフィールドワークについても協力を得ることになった。

○　町の広報誌にフィールドワーク関連記事を掲載（令和２年 12 月号）していただいた。また、活動内容を広報するため「学校たより」を作成し、町内全自治会に計３回回覧した。

②　成果

○　生徒を対象に、継続して「地元への興味・関心及び探究的学びに関する意識調査」を実施した。地元（山北町）への興味・関心に関する項目では、肯定的な意見の伸びが鈍かったが、探究的学びに関する項目では着実に伸びをみせている。令和２年 12 月 17 日実施の２学年コース別発表会参観者アンケートで、概ね良い評価を得ることができたことも、生徒の探究的な学びへの意欲の向上を裏付けている。

③　評価

○　近隣住民から声をかけられたという生徒・職員が増加傾向にあることから、紙ベースでの広報は有効であったと評価する。

○　本校と行政・町民・企業等とは、本事業を通じて新たな連携も生まれた。しかし、本校と行政・町民・企業等が一体となったとはまだ言い難い。本校がハブとなり、行政・町民・企業等の間のつながりを作っていくことが必要であり、行政・町民・企業等から期待されているところである。

○　指定最終年度に向けては、それ以降のことも見据え、行政・町民・企業等の一体化を推進していていく必要がある。

目標（２）「『未病』、『地域防災』の二つの視点で、ＰＢＬを活用した『個人の成長』を求めるカリキュラムの開発研究」について

①　進捗状況

○　学校設定科目「未病」「地域防災」では、１学年の総合的な探究の時間において向き合った地域課題についての学習を深め、課題を解決することで社会貢献となることを学び、それらの経験

から、新たな着眼点を持つことを学習した。

② 成果

○ 生徒は探究活動の成果発表会を通じて、情報や考えを伝えるだけでなく、データ等の根拠を示し、視聴者の理解を深めるプレゼンテーションスキルを獲得した。生徒は「未病」「地域防災」の探究活動の中で、自分と異なる意見や発想や、異なる世代の受け止め方を学ぶなど、多角的な視点を身に付けたことにより、思考力、判断力、表現力をさらに向上させることができた。

③ 評価

○ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、ICT を活用した事前学習等を進めたことにより、「未病」及び「地域防災」等の履修生徒を対象に、校内で９月と 12 月に行った生徒による授業評価アンケートでは、授業の在り方や学習の状況について、ともに高い評価の数値（12 月では７項目について肯定的評価が 86%以上であった。（例）「授業の中で『身に付いた』『できるようになった』と感じることはありましたか」、９月では肯定的評価が 99%の設問もあった（例）「授業で得た知識を用いて、自分の考えを持ったり、新しい問題に取り組んだりすることができましたか」）となり、授業に対する充実感も高いものとなった。

<u>目標（３）「Ｕターンを含めた地域で活躍し、地域を創生する人材の育成」について</u>

① 進捗状況

○ 町の魅力や歴史について、町や協議会と協力して授業を展開した。

・ １年生は、フィールドワーク等において山北町職員による説明や町の人々と触れ合う学習活動により、自分と地域との関わりをより身近なものと考えられるようになった。

・ ２年生は、My プロジェクトの授業の一環で、役場だけでなく商業施設や地域住民にインタビュー調査を実施し、地域課題を自分事として考えられるようになった。

② 成果

○ 地域についての理解

・ 実際に地域に足を運ぶことで地域への理解が深まり、その中で発見した地域課題に対して、高校生の視点からの解決策を提案することができた。町の病院施設やインフラ、防災に関するものなどで、中には町議会議員から好評を得たものもあり、実際に町の活性化に貢献できる可能性が十分にあると考えられる。

・ 学校で実施したアンケート結果（資料 94 頁「目標設定シート」１．アウトカムのｂ参照）

において、「山北町での生活を希望する生徒」、「山北町に関係する就職を希望する生徒」、「山北町に貢献することを希望する生徒」の３項目において多少の増減はあるが、目標値を維持している。活動制限をせざるを得なかった状況下でも、生徒たちはフィールドワーク等を通じて山北町の人々や生活、産業などへの理解が深まったことに起因すると考え、その上で、生徒がより具体的に自分のできることを考えることができた。

③ 評価

○ 進路学習との連携による地域を創生する人材の育成

・ 地域探究活動の中で、生徒の山北町への関心が高まったと捉えているが、今後、地域への愛着をさらに育み、生徒が実際にキャリアを考える上で、山北町で就職したい、起業したいと思うな

ど、より具体的な成果が生まれるように取り組むことが課題である。

・　連携や探究活動を山北町だけではなく、足柄上郡（南足柄市を含む）へと拡大し、支援を含めた協力体制を構築していくことが課題である。

・　地域の中学生、高校生を中心とした世代は、東京や横浜などの都会へのあこがれがあり、都会での進学や就職を考えていると思われる。そのため本校の取組は中学生には魅力的に映っておらず、入学志願者の増加に繋がっていない。本校の取組と地域への愛着について、いかに効果的に広報していくかが課題である。

## ２　地元への興味・関心及び探究的学びに関するアンケート調査

2019（平成 31）年度入学生を対象に、「地元への興味・関心及び探究的学びに関するアンケート調査」を継続的に行っている。地元への興味・関心に関する項目では、否定的意見が減少傾向になり肯定的意見が増加した。探究的学びに関する項目では、探究活動をすることへの難しさを感じて、もう一歩踏み出せずにいるように思う。地元の活性化に向けて貢献できる可能性は十分にある。

| 項目 | 肯定的意見 | | | 否定的意見 | | | 未回答 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 2019 年 4 月 | 2020 年 2 月 | 2021 年 2 月 | 2019 年 4 月 | 2020 年 2 月 | 2021 年 2 月 | 2020 年 2 月 | 2021 年 2 月 |
| 地元（山北町）への興味・関心に関する項目 | | | | | | | | |
| 山北町のこと（自然・文化・歴史・産業・地域活動など）について、興味や関心を持っていますか？ | 55.0% | 53.5% | 51.8% | 44.5% | 37.4% | 40.2% | 9.1% | 8.0% |
| 山北町の抱える課題について、感じたり、考えたりしたことはありますか？ | 27.8% | 61.1% | 65.3% | 71.7% | 29.8% | 26.7% | 9.1% | 8.0% |
| 山北町をよりよくするために、山北町の問題解決に関わりたいと思いますか。 | 66.7% | 57.1% | 56.8% | 23.2% | 33.8% | 35.2% | 9.1% | 8.0% |
| 家族や友人以外の山北町の人と交流したことがありますか。 | 19.7% | 40.9% | 34.7% | 79.8% | 50.0% | 57.3% | 9.1% | 8.0% |
| 山北町で生活したいと思いますか。 | 17.6% | 18.7% | 21.1% | 81.8% | 71.8% | 70.9% | 9.6% | 8.0% |
| 山北町に関する仕事や職業に就いてみたいと思いますか。 | 9.6% | 16.7% | 20.1% | 89.9% | 73.7% | 71.9% | 9.6% | 8.0% |
| 山北町の役に立ちたいと考えていますか。 | 64.6% | 58.6% | 52.7% | 34.3% | 31.8% | 39.2% | 9.6% | 8.0% |
| 山北町のことが好きですか。 | 71.7% | 62.6% | 61.3% | 27.3% | 27.3% | 30.1% | 10.1% | 8.5% |

| 探究的学びに関する項目 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 自分の関心のあることについて、自主的に知ろうとしたり、やってみようとしたりしますか。 | 83.3% | 64.7% | 67.9% | 15.6% | 25.3% | 24.1% | 10.1% | 8.0% |
| 身の回りにある課題を発見し、その解決に向け、取り組むことができますか。 | 75.3% | 61.1% | 64.9% | 24.2% | 28.8% | 27.1% | 10.1% | 8.0% |
| 自分の立てた目標の達成に向けて、計画的に取り組むことができますか。 | 73.8% | 63.2% | 65.4% | 25.7% | 26.8% | 26.1% | 10.1% | 8.5% |
| 今までに身の回りにある課題の解決方法について、自ら考え、行動し、解決したなどの経験はありますか。 | 83.4% | 67.7% | 68.4% | 16.2% | 22.2% | 23.6% | 10.1% | 8.0% |
| グループなどで協力しながら、学習や活動を行うことができますか。 | 90.4% | 78.3% | 83.4% | 9.1% | 11.6% | 8.5% | 10.1% | 8.0 |
| 身の回りの事柄に関心を持ち、身近な人々や地域の取組などに関わったり、協力したりすることができますか。 | 82.3% | 72.8% | 79.4% | 17.2% | 17.1% | 12.5% | 10.1% | 8.0% |
| 幅広い年齢の人々と関わり、相手の意見や考えを尊重し、思いやりを持って接することができますか。 | 90.4% | 79.8% | 82.4% | 9.1% | 10.1% | 9.5% | 10.1% | 8.0% |
| これまでの学習活動において、課題の設定・情報の収集・整理や分析・まとめや表現などの活動を繰り返していく学習や活動に取り組むことができましたか。 | 69.7% | 74.8% | 77.4% | 29.8% | 14.6% | 14.0% | 10.1% | 8.5% |

（４件法によるアンケート調査）

## ３　未来探究の学習指導における一般教科への影響

２年間の総合的な探究の時間「未来探究」の学習指導を通じて、新たなカリキュラム開発における他の教科に与えた影響について

＜　現状と成果　＞

**（１）授業改善について**

授業力向上を目的とした授業改善の取組を毎年度行っている。新学習指導要領においても重要視されている総合的な探究の時間を柱とした教科等横断的な学習を次のように実施した。

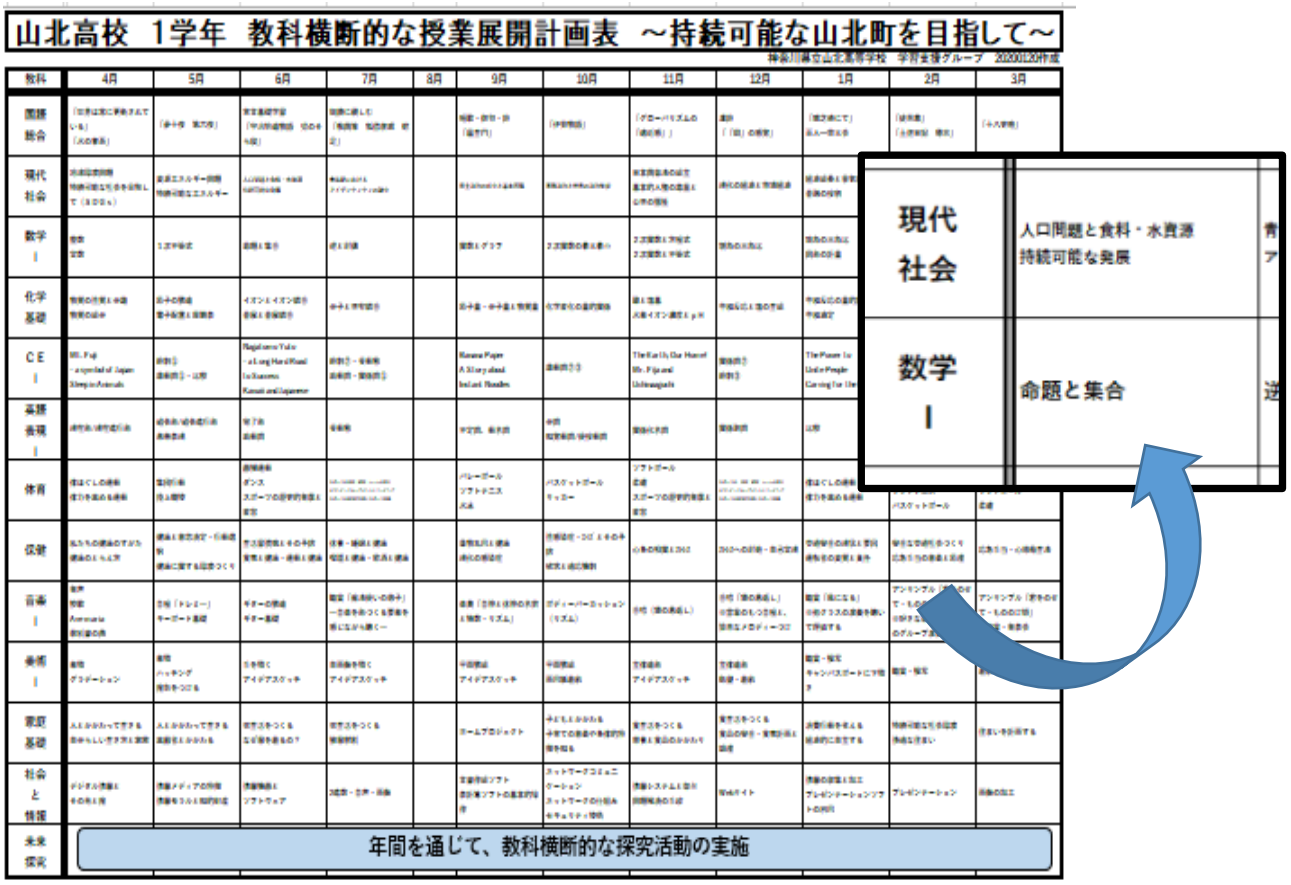
【令和元年度の授業改善の計画と成果】

教科等横断的な授業展開計画表を作成し、各月における科目ごとに実施している授業内容を確認することで、その内容に関連付けた授業展開を進めることができた。

（例）現代社会の「人口問題と食料・水資源持続可能な発展」において、数学Ⅰ「命題と集合」で学習した、「ＡならばＢである」に関連させた命題を生徒に考えさせ、その逆と対偶の真偽を考えさせた。SDGs に関わる内容に関連させて未来探究での学習と紐づけて関連させた。

※　期待される効果とねらい

現在本校で設置している教育課程では実現が難しいカリキュラムも、生徒の実態と学習の原理原則となる基盤を考慮し、教科等横断的な視点で多角的に生徒へアプローチをかけることによって、生徒の資質・能力を育成することが期待できる。



【令和２年度の授業改善の計画と成果】

新学習指導要領の総合的な探究の時間において、思考力育成のための「考えるための技法の活用」①～⑩について、各科目の授業内にて計画的に取り入れることができる授業展開を検討した。

思考力育成のための「考えるための技法の活用」

| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | 順序付ける | ⑥ | 理由付ける（原因や根拠を見付ける） |
| ② | 比較する | ⑦ | 見通す（結果を予想する） |
| ③ | 分類する | ⑧ | 具体化する（個別化する、分解する） |
| ④ | 関連付ける | ⑨ | 抽象化する（一般化する、統合する） |
| ⑤ | 多面的に見る・多角的に見る | ⑩ | 構造化する |

（新学習指導要領「総合的な探究の時間」解説編より抜粋

対象を何らかの視点に基づいて分類し、気付きを得たり理解を深めたりするという思考が行われていることについては各教科で共通しており、それらを各教科科目から集めて一覧表を作り共有した。

思考力育成のための「考えるための技法の活用」について

| 教科 | 科目 | 学年 | 思考力 選択項目 | 授業で活用する場面 |
|---|---|---|---|---|
| 国語 | 国語総合 | 1 | ⑥理由付ける | 文学作品において、ある描写の理由を考察したり、評論において、ある主張の根拠を見つけたりする。 |
| 公民 | 現代社会 | 1 | ⑥理由付ける | 日本で保障されている権利が日本国憲法の何条にあたるのか根拠づけながら日本国憲法の内容について体系的に学ぶ |
| 数学 | 数学Ⅰ | 1 | ⑦見通す | 2次不等式においてグラフを視覚化して判別式や不等式の解法などを理解させる。 |
| 理科 | 化学基礎 | 1 | ⑦見通す | 化学反応式をもとに、反応物の物質量から生成物の物質量を推測する。 |
| 保健体育 | 体育 | 1 | ⑤多面的に見る･多角的に見る | 各種目の特性を理解し、技術向上や試合に勝つための方法を複数の角度から考え取り組む |
| 保健体育 | 保健 | 1 | ⑥理由付ける | 感染症などの広がりを理由付けしたり、原因の追究をしたりし、理解につなげる |
| 英語 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ | 1 | ④関連付ける | 教科書で学習した文法や語法をALTとの授業に関連付け、実践的な英会話の場に活かす。 |
| 英語 | 英語表現Ⅰ | 1 | ④関連付ける | 中学での既習事項を高校英語に関連付け、基礎事項を応用させる力を身につける。 |
| 家庭 | 家庭基礎 | 1 | ④関連付ける | 見えないお金の使い方を知り自分の生活と関連付ける。 |

※　期待される効果とねらい

科目の異なる複数の授業において、①～⑩に関連した思考力を高める授業を展開することで、生徒の中で様々な科目に渡ってネットワーク化され、課題解決したことが活用できる教科等横断的な取組に連結が期待できる。

**（２）評価方法について**

未来探究の評価方法として主にルーブリック評価を活用した。設定した評価規準の実現状況を測るため、生徒に課題（パフォーマンス）を与え、その内容の分析をもって評価を行った。レポートや実技試験などで、事前に評価規準を決めて評価するために評価基準を観点と尺度からなる表として示した。特にルーブリック評価では、具体的な基準を事前に生徒に示すことで、生徒が「主体的」に課題に取り組むなどの変化が生まれ、教員が対話的な学びへの工夫をするようになるなどの変化も期待でき、他の教科科目においても実施することができた。

＜　今後の方向性　＞

令和３年度は、本事業の完成年度となり、これまでの成果を形に残せるような事業展開にしたい。また、指定が終えた後も引き続き山北町との関係性を継続しつつ新たなカリキュラム開発に尽力していきたい。

## ４　カリキュラム開発専門家の視点からの評価と課題

### 山北高校の実践における評価と課題
### ～～カリキュラム開発等専門家の視点から～～

後藤健夫

総合的な探究の時間の大きな課題は時間が足りないということである。それは授業時間も生徒の授業外を含めた学習時間もである。「探究」そのものにとても時間がかかると同時に、授業という予定調和な時間とは異なり、予定通りに進行するものではないところにあり、時間を見積もれないところにある。仮に予定の時間に詰め込んだとしても、その成果は中途半端なものになったり、不完全燃焼に終わったりするのではないだろうか。探究は始めたら止まらないものだから。どこで決着をつけるのかが難しい。

とはいえ、達成感を味わい、次のステップを踏むためには、区切りを付けたり、段階を設定したりすることは必要であろう。

そうした中で、山北高校の学年ごとに段階を設定して最終学年で探究を一旦終了させて、そのバトンを卒業後に託すシステムはとても有効だと考える。

１学年で、探究を無理のない程度に体験する。ここで過剰になると「探究嫌い」を産みかねない。２学年では当事者性を考慮してモチベーションを上げていく。３学年では卒業後の進路を意識して探究をキャリアに結び付けていく。

時間が足りない中で、あまり無理をしない、過剰に生徒に負わせないことは、教員にとって我慢と勇気を伴うことだ。どうしても教える側が「もっと」という意識を持ってしまう。この「もっと」という意識は教員による外発的なものではなく生徒の内発的であった方がいいものだ。そうでなければ探究は持続せず、探究であり得なくなる。探究はモチベーションに支えられるからだ。モチベーションを醸成するためにも過剰になってはいけないのだ。だから教員は焦ってはいけない。

２学年では、東洋医学の座学も導入して、良きインプットがなされる。一定の知識や理解がなくては課題設定などできないことは周知のことだ。３学年時に自分のキャリアに結びつけていくには、２学年時でモチベーションを高めておきたい。２学年時での探究活動がやはり全体の肝になる。それゆえに１学年時よりも授業時間が増えることはリーズナブルだ。

とはいえ、これまで述べたように時間は足りない。

担当教員と教室で「もう少し時間があったら、ここまでできるのにね」と会話をすることが常であった。教員側の思いと授業時間という制約の中で日々悶々としていたのではないだろうか。そうした中で、一定の成果をあげていることは賞賛すべきことである。

★授業のフィードバックに向き合う★

2021 年度は主に１年生の授業に参加して生徒たちに＜フィードバック＞をするとともに、授業終了後に、毎回、筆者が授業を＜振り返り＞、そこから教員にも＜フィードバック＞をしてきた。

山北高校の生徒は従順で＜フィードバック＞を前向きに捉えて忠実に修正をかけていった。

教員への＜フィードバック＞も受け入れてもらうことが多く、中でもすぐに修正をしてくれたり次の授業で取り入れてくれたりしてくれて＜フィードバック＞のしがいあった。教員が自分で考えて工

夫をする授業への＜フィードバック＞は教員には一般的には受け入れ難いケースが多いものだ。具体的には毎回書面にて＜振り返り＞と＜フィードバック＞を事務局に送付してきた。

いま、山北高校に課題があるとすれば、今回、授業の実践の中で生まれた「問い」や探究という手法を思考した際に生まれた「問い」を心に留めて解決を図ろうとできるかである。いずれの「問い」も一朝一夕に解決できるものではないはずだ。ある「問い」が解決されたように見えてもそこには新しい「問い」が生まれることは多い。

「問い」を重ねることは探究である。

教えること、生徒を見取ること、評価することなどなどの探究活動を、山北高校の教員のみなさんには続けてもらいたいと祈る。その時には是非、「メタ認知」を意識してもらいたい。そうすることで、教員としても成長するだろうし、なによりも目の前にいる生徒が成長を遂げるだろう。

探究を授業する上で、できていること、獲得するべきスキルは多いが、ここからが「正解のない問い」であり、「本質的な問い」である。そこに果敢に挑戦してもらいたい。

こうして教員のみなさんにエールを送り、報告を終えたい。

後藤健夫氏は教育ジャーナリスト。各教育雑誌に署名記事が掲載されているほか、講演活動などもなさっている。最近では経済産業省の「未来の教室」実証事業で立命館大学東京キャンパスが社会人を対象として展開した「チェンジメイカー育成プログラム」（2018 年度）とそれを発展させた立命館東京キャンパス独自プログラム（2019 年度）において、企画、運営、メインファシリテーターをなさった。国際バカロレア（IB）「セオリー・オブ・ナレッジ（TOK）」に関する書物の企画・編集に携わり、協働執筆者として名を連ねている。

本校には、本事業への応募の段階から関わってくださっている。

今回「カリキュラム開発等専門家の視点から」と題して、本校職員へフィードバックを提供してくださった。ここに掲載したものはその一部分である。

# Ⅴ　関係資料

## １　運営指導委員会

**＜運営指導委員会委員＞**

| 氏　名 | 所　属・　職 |
|---|---|
| 石 田　　浩 二 | 山北町教育委員会<br>教育長 |
| 羽 入 田　　眞 一 | 早稲田大学教育・総合科学学術院教職大学院<br>客員教授 |
| 小 村　　俊 平 | 日本イノベーション教育ネットワーク（協力OECD）事務局<br>事務局長 |

**【令和２年度第１回運営指導委員会】（記録）**

（１）　日時

令和２年７月 21 日（火）13 時 15 分～15 時 15 分

（２）　場所

山北高等学校第一応接室

（３）　出席者

・　運営指導委員

石田浩二、羽入田眞一、小村俊平

・　山北高校

藤田正樹、吉野雅史、内藤哲也、大川真弓、小関秀寿、野秋貴浩、山内未来、志村美登里

・　神奈川県教育委員会

川端麻穂、川上敬子

（４）　報告・協議事項

○　令和元年度の成果について

・　コンソーシアムの構築

・　先進校視察により他校の実践例を参考にし、教員の知見を広げた。

・　教材開発…１学年が分担して教材開発にあたった。１学期は SDGs について、２学期以降は「山北町」「未病」「地域防災」について学習した。学習方法としては調べてまとめて発表した。（新しい指導方法が確立されたわけではない）

○　令和２年度研究開発実施計画について

・　１学年…「知る」を目標に授業を実施。２学期以降は、「山北町」「未病」「地域防災」をオムニバス形式で行う。→教員の専門性を高め、オムニバス形式による授業成果は年度末に報告予定。

・　２学年…「探る」を目標に授業を実施。小さなグループ毎に山北町に係る探究を行っている。コロナ禍でもグループ学習を工夫して導入している。

○　学校運営協議会について

・　委員選出について

・　各部会構成について

○　コンソーシアムについて

・　加盟団体について報告した。

・　コンソーシアム連絡協議会の今後の予定を連絡した。

○　感染予防を念頭においた事業展開について

・　「classi 」「探究のキセキ」のパンフレットを中学校で配付する。

・　全体を集めての学校説明会はできない。

・　普通科新設について情報提供した。

（５）　指導・助言

委員の方より

・　生徒が学校運営に関わる時代になってきている。「地元への興味・関心及び探究的学びに関するアンケート調査」の設問項目（資料 p.50）で高校生が答えやすい問いにしてみてはどうか。「地域人材育成学校」を前面に打ち出してみてはどうか。

・　「地元への興味・関心及び探究的学びに関するアンケート調査」で生徒が３年間でどのように変わるのかを見ていくのが大切であり、１年毎で一喜一憂しなくてもよい。

・　生徒が意思決定をする機会を増やしてみてはどうか。「地元への興味・関心及び探究的学びに関するアンケート調査」の数値は気にしなくても良いが、他校との比較は大切である。「アンケート」で自由記述欄を作ってはどうか。

（６）　事務連絡

・　次回の運営指導委員会は 11 月頃を予定

**【令和２年度第２回運営指導委員会】（記録）**

（１）　日時

令和３年３月 12 日（火）14：00～16：00

（２）　場所

山北高等学校連携推進室

（３）　出席者

・　運営指導委員

石田浩二、羽入田眞一、小村俊平

・　山北高校

藤田正樹、吉野雅史、内藤哲也、大川真弓、野秋貴浩、山内未来、宮本翼、
水島拓也、志村美登里

・　神奈川県教育委員会

川端麻穂

（４）　報告・協議事項　今年度探究活動の成果及び課題の報告

○　「山北高等学校を中心に、行政・町民・企業が一体となる」ことについて

・　地域の子供たちを対象としたイベントを開催することができた。

・　生徒への「地元への興味・関心及び探究的学びに関する意識調査」アンケート調査では概ね良い評価を得ることができた。

・　フィールドワークが少ない中で、教員がどのように生徒をファシリテートしていくか。

・　フィールドワークにおける資金をどのように工面していくか。

○　「『未病』、『地域防災』の２つの視点で、PBL を活用した『個人の成長』を求めるカリキュラムの開発研究」について

・　生徒の多角的な視点を身に付けられた。
・　１年時の総合的な探究の時間にて向き合った地域課題について学習を深めることができた。
・　教員全体としては、ファシリテート能力は向上しているものの、指導において、まだ不十分な部分もある。
・　外部との連絡調整・役割分担等が円滑に進んでいない。

○　「U ターンを含めた地域で活躍し、地域を創生する人材の育成」について
・　地域についての理解が深まった。
・　生徒が地域課題を自分の課題としてとらえることができるようになった。
・　「地域を創生する人材の育成」に魅力を感じて山北高校に入学したいと思ってもらうためには何ができるか。

（5）　指導・助言

委員の方より

・　事業報告書の表にある「存続」という言葉選びは、生徒や保護者にネガティブな印象を与えてしまうのではないか。
・　山北町会議員から、山北高校との取組について、一般質問があり、議員も山北高校に関心を示している。また、町の広報誌など学校の取組について積極的な発信が見られ、町民への理解が深まりつつある。
・　中学生に「地域を創生する人材の育成」に魅力を感じてもらうために具体的にどのような取組ができるかを考えなければならない。
・　多角的な視点を身に付けることができたとあるが、その具体性や、来年以降の見通しを示すことが出来ると良い。
・　山北町のカレンダーに山北高校の生徒の様子を掲載することは地域の人々に山北高校を知ってもらう有効的な手段である。
・　山北高校の卒業生や「山北高校を応援する会（仮称）」などを活用してもいい。
・　山北高校の生徒が、卒業後どのような進路に進んでいるかを中学生、保護者に示していく必要がある。
・　可能であれば、山北高校のような取組をしている他校の生徒との交流ができる機会を設けることができたらよい。

## ２　山北未来コンソーシアムについて

本校が文部科学省から「地域との協働による高等学校改革推進事業（地域魅力化型）」に採択されたことをきっかけに、本校の教育活動を外部から支援してくださる機関・企業・団体等により、「山北未来コンソーシアム」を構成した。

このコンソーシアムに加わらないまま、神奈川県との関係で本校の教育活動を支援してくれている団体や、神奈川県教育委員会と協定を結んでいる山北町などからもご支援をいただいている。

ここでは、報告本文と重なる部分もあるが、

１　いただいてきた支援の実績（初年度分も含む）

２　コンソーシアム等についての課題

３　今後の展望

について報告する。なお、コンソーシアムの項ではあるが、協定文書を取り交わしていない相手方や地域学習実施支援員についても併せて述べる。

### （１）いただいてきた支援の実績（初年度分も含む）

ア　校外学習等に係る支援

a　１学年対象講演会の実施（令和元年７月 10 日実施）

指定初年度、「地域を知る」ことをテーマに１学年の生徒対象後援会を実施した。この際にご講演いただいたのは地元蔵元の「合資会社川西酒造」「山北町生涯学習課」の方であった。川西酒造を紹介くださったのは、現在は地域協働学習実施支援員として本校を支援してくれている藤原浩氏であり、県教育委員会との協定に基づいた支援の一環としてご協力くださった。

会場の山北町生涯学習センターは、山北町が使用料全額減免としてくれた。これ以外でも、生涯学習センターの使用に当たっては、格別の便宜をいただいている。

b　１学年フィールドワークに係る支援（令和元年 11 月 11 日実施）

７月に実施した講演会を受け、実際に山北町を見聞した。この際のプログラム作りと現地支援者の調整には、藤原浩氏にご助力いただいた。

c　知事部局の未病に係る取組に関係して（令和元年秋から翌年春まで）

県政策局ヘルスケア・ニューフロンティア推進本部室が、アサヒ飲料株式会社との協働で、高校生世代へ ME-BYO コンセプトの普及・啓発を図って、本校生を対象にワークショップを行った。ワークショップの実施により直接本校生に、成果物をもって高校生年代に普及することを目的としたものである。

この企画のキックオフには首藤副知事が来校になり、対象生徒に１時間余りご講演された。これは、アサヒ飲料株式会社からの要請によって、ヘルスケア・ニューフロンティア推進本部室が対応したものと聞いている。また、ワークショップを実際に指導したのはカタパルト株式会社で、同社との調整もアサヒ飲料株式会社によるものである。

なお、カタパルト株式会社は、アサヒ飲料株式会社からの依頼が終了した後も、継続して本校の教育活動を支援してくれている。

d　地域防災に係る講演（令和２年１月９日実施）

１月にも山北町生涯学習センターをお借りして講演会を実施した。使用料の減免については前年７月同様である。また、総務防災課から職員を講師として派遣していただいた。

イ　その他

a　国立教育政策研究所教育政策・評価研究部（令和元年 12 月 13 日協定締結）

本校生徒の変容を観測するための生徒対象のアンケートについて、質問紙の作成から集計・分析まで助言・助力くださっている。

第三者的立場から、山北町観光協会会長と山北町教育委員会教育長に対し、本校の取組に係るインタビューを実施し、その様子を本校に提供してくれている。このインタビューは、今後も継続するとのことである。

b　有限会社小田原ドライビングスクール（令和元年 11 月 25 日協定締結）

学校設定科目「地域防災」の単元としてドローンについての学習を企画していた。この単元において、同社から講師の派遣を受けるとともに、教員も指導ができるようにするため、教員に対する基礎講座を令和元年 12 月に本校を会場にして開催していただいた。

c　株式会社ベネッセコーポレーション（令和２年１月 10 日協定締結）

サポートのために頻繁に来校し、リモート会議開催の際には、技術的なサポートをしてくださった。教員研修も企画運営してくださった。

これらのほか、様々な情報を提供してくださっており、先進校視察に当たっては、本校の活動に資するであろう学校を紹介してくださるなどしてくれた。

d　相日防災株式会社（令和２年８月 17 日協定締結）

本校防災訓練の際に、起震車の派遣を手配してくれるなどの便宜を図ってくれているほか、講師派遣についてもお申し出くださっている。

e　山北町都市農村交流活性化推進協議会

事務局長藤原浩氏を通じ、町内フィールドワークのコース設定に助言をくださったり、現地協力者の紹介をしてくださったりしている。

f　松田ゆいスポーツクラブ（令和２年 12 月 12 日協定締結）

生徒が企画した未病に係る地域イベント開催に当たって、参加者を集めるノウハウの提供から当日のバックアップまでしてくださった。このほか、学校設定科目「未病」の講師として複数回登壇してくださっている。

g　アサヒ飲料株式会社（県政策局による包括提携先）

ME-BYO コンセプトの普及・啓発を図るため事業のために、本校と関わりを持ち、その後は、カタパルト株式会社が本校の直接の支援に当たった。カタパルト株式会社は、継続して本校の授業づくりに関与してくれている。

h　山北町（平成 31 年２月 12 日に県教育委員会と協定締結）

同町生涯学習センターの利用に当たって、利用料を減免してくれている。また、日程確保にも便宜を図ってくれている。講演講師派遣や生徒による職員インタビューにも便宜を図ってくれて

いる。

学校運営協議会に、教育長、総務防災課長、同町立小学校長、同町立中学校長を派遣してくれている。このつながりから、新東名工事の見学会を実現できた。また、本事業採択以前から続いている地域の防災訓練、清掃活動、就学前教育機関との交流等が一層活性化されたうえ、従前は担当者による属人的なつながりであったものが組織化されたものがある。

（2）コンソーシアム等についての課題

ア　構成団体全体を巻き込むこと

各構成団体がそれぞれ本校を支援してくれている。構成団体相互のつながりを作ることを課題として捉えている。構成団体同士がつながることにより、より有効な方策が生まれる可能性と、地域の活性化そのものを期待する。

イ　コンソーシアムへの参加のお願いについて

本校への支援を申し出てくださっている企業・団体の方にご参加いただいている。これについて、本校が将来を見据えて、本校から積極的にお願いすべき企業・団体も発掘・開拓していくべきと考える。

ウ　学習活動への関わり方について

構成団体の方々が、直接生徒を指導する機会を十分には作れていない。

有限会社小田原ドライビングスクールには、学校設定科目「地域防災」の単元としてドローンについての指導をお願いする予定であったが、COVID-19 の影響もあり、実現していない。

松田ゆいスポーツクラブ代表松下氏は足繁く来校になり生徒の指導に当たってくださっている。

（3）今後の展望

ア　組織について

調整役を立てることとしたい。

地域協働学習実施支援員か県教育委員会からの加配による事務補助員が適切ではないかと考えるところであるが、株式会社ベネッセコーポレーションから調整役を引き受けてもよいとのお申し出を受けている。

また、コンソーシアムに加わっていただくべき企業・団体がほかに存在しないかを調査・検討する必要がある。

本年度は、コンソーシアムの調整役を立て、組織として動かしていくことを目ざす。

イ　教育課程への関わりについて

構成団体からいただける支援を教育課程に落とし込むことを検討する。

その際、「未来探究」「あしがら」以外の一般教科でも検討する。

## ３　目標設定シート

【別紙様式5】

| ふりがな | かながわけんりつやまきたこうとうがっこう | 指定期間 | 2019～2021 |
|---|---|---|---|
| 学校名 | 神奈川県立山北高等学校 | | |

# 地域との協働による高等学校教育改革推進事業　目標設定シート

## １．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

| | | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 | 2020年度 | 2021年度 | 目標値（年度） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a | （卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標）<br>**問題発見・解決能力**<br>*指定校にて実施するアンケートにおいて、「身の回りにある課題を発見し、その解決に向け、取り組むことができますか」という項目に「積極的にできる」「できる」と回答した生徒の割合 | | | | | | 単位：パーセント |
| | 本事業対象生徒： | | | 4月:43.5→2月:69.2 | 2月：64.9 | | 80.0 |
| | 本事業対象生徒以外： | | 60.1 | 2月：62.7 | － | － | |
| | 目標設定の考え方：「総合的な探究の時間」や学校設定科目等における地域課題の解決等の探究的な学びを通じて、課題を発見し、解決する力を習得させる。 | | | | | | |
| a | （卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標）<br>**身近な人や地域の取組に関わり、協力することができる能力（社会性）**<br>＊指定校にて実施するアンケートにおいて、この項目について「積極的にできる」「できる」と回答した生徒の割合 | | | | | | 単位：パーセント |
| | 本事業対象生徒： | | | 4月:50.8→2月:80.8 | 2月：79.4 | | 80.0 |
| | 本事業対象生徒以外： | | 64.3 | 2月：68.2 | － | － | |
| | 目標設定の考え方：本事業における取組を通じて、地元にいる身近な人々や地域の取組に関わり、積極的に協力することができる能力を習得させる。 | | | | | | |
| a | （卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標）<br>**幅広い年齢の人々と関わり、多様な考えを尊重し、思いやることができる能力（他者性）**<br>＊指定校にて実施したアンケートにおいて、この項目について「積極的にできる」「できる」と回答した生徒の割合 | | | | | | 単位：パーセント |
| | 本事業対象生徒： | | | 4月:25.1→2月:88.4 | 2月：82.4 | | 90.0 |
| | 本事業対象生徒以外： | | 77.1 | 2月：75.1 | － | － | |
| | 目標設定の考え方：本事業における取組を通じて、地元にいる幅広い年齢や様々な立場の人々に関わり、自分以外の多様な考えを尊重し、他者を思いやることができる能力を習得させる。 | | | | | | |
| b | （高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標）<br>**山北町での生活を希望する生徒の割合**<br>＊指定校にて実施したアンケートにおいて、この項目について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒の割合 | | | | | | 単位：パーセント |
| | 本事業対象生徒： | | | 4月:14.1→2月:20.8 | 2月：21.1 | | 20.0 |
| | 本事業対象生徒以外： | | 6.0 | 2月：9.7 | － | － | |
| | 目標設定の考え方：本事業における取組を通じて、山北町への愛着を深め、山北町での生活を希望する生徒の割合を増加させる。 | | | | | | |
| b | （高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標）<br>**山北町に関係する就職を希望する生徒の割合**<br>＊指定校にて実施したアンケートにおいて、この項目について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒の割合 | | | | | | 単位：パーセント |
| | 本事業対象生徒： | | | 4月:6.8→2月:18.5 | 2月：20.1 | | 20.0 |
| | 本事業対象生徒以外： | | 5.0 | 2月：10.6 | － | － | |
| | 目標設定の考え方：本事業における取組を通じて、山北町の諸産業に対する関心を高め、山北町に関係する仕事や職業に就くことを希望する生徒の割合を増加させる。 | | | | | | |
| b | （高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標）<br>**山北町に貢献することを希望する生徒の割合**<br>＊指定校にて実施したアンケートにおいて、この項目について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒の割合 | | | | | | 単位：パーセント |
| | 本事業対象生徒： | | | 4月:49.7→2月:64.7 | 2月：56.8 | | 50.0 |
| | 本事業対象生徒以外： | | 34.4 | 2月：62.7 | － | － | |
| | 目標設定の考え方：本事業における取組を通じて、山北町への貢献意識を持つ生徒の割合を増加させる。 | | | | | | |
| c | （その他本構想における取組の達成目標） | | | | | | 単位：パーセント |
| | 本事業対象生徒： | | | | | | |
| | 本事業対象生徒以外： | | | | | | |
| | 目標設定の考え方： | | | | | | |

## ２．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

| | | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 | 2020年度 | 2021年度 | 目標値（年度） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a | （地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）<br>**プロジェクト推進会議（カリキュラム開発等専門家と各教科の教科主任等で構成する会議）の開催** | | | | | | 単位：回数 |
| | | | 0 | 5 | 5 | | 12 |
| | 目標設定の考え方：カリキュラム・マネジメントを推進し、本プロジェクト全体の進捗状況を管理する会議として、月に1度開催する。 | | | | | | |
| a | （地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）<br>**研究授業の実施** | | | | | | 単位：回数 |
| | | | 0 | 4 | 0 | | 4 |
| | 目標設定の考え方：学校一斉の研究授業を年４回実施する。このうち2回を公開する。 | | | | | | |
| b | （普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）<br>**成果発表会の開催** | | | | | | 単位：回数 |
| | | | 0 | 5 | 1 | | 3 |
| | 目標設定の考え方：毎年度末、各学年ごとに生徒が実施した探究活動の発表会を開催する。 | | | | | | |
| c | （その他本構想における取組の具体的指標）<br>**管理機関が設定している指標に関するアンケート調査の実施** | | | | | | 単位：回数 |
| | | | 1 | 2 | 1 | | 2 |
| | 目標設定の考え方：年度当初及び年度末にアンケート調査を行い、指標の達成状況を確認するとともに、次年度の改善に生かす。 | | | | | | |

## ３．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

| | | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 | 2020年度 | 2021年度 | 目標値（年度） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a | （地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）<br>**地域の外部人材の参画によるフィールドワークの実施状況** | | | | | | 単位：回数×人数 |
| | | | 0 | 35 | 35 | | ５×10 |
| | 目標設定の考え方：年間5回程度実施予定の生徒の探究活動に係るフィールドワーク(10分野程度を想定)において、地域の外部人材の支援を受ける。 | | | | | | |
| a | （地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）<br>**コンソーシアム連絡会議の開催回数** | | | | | | 単位： |
| | | | 0 | 0 | 1 | | 2 |
| | 目標設定の考え方：コンソーシアム参加機関の担当者が出席する連絡会議を年度当初及び年度末に開催する。 | | | | | | |
| d | （その他本構想における取組の具体的指標） | | | | | | 単位： |
| | | | | | | | |
| | 目標設定の考え方： | | | | | | |

＜調査の概要について＞

1．生徒を対象とした調査について

| | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 | 2020年度 | 2021年度 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全校生徒数（人） | 590 | 630 | 628 | 628 | 600 |
| 本事業対象生徒数 | | | 199 | 393 | 600 |
| 本事業対象外生徒数 | | | 429 | 235 | 0 |

## ４　国立政策研究所インタビュー記録

○山北町観光協会会長　佐藤精一郎氏　インタビュー記録

Ⅰ　日時：2020 年 12 月 4 日　13 時 30 分～15 時

Ⅱ　場所：山北町観光協会

Ⅲ　聞き手：本多正人（国立教育政策研究所）

渡邊恵子（同上）

丹羽勇人（東京大学大学院工学系研究科修士課程）

Ⅳ　インタビューでお話しいただいた内容のポイント

（１）　山北町行政あるいは山北町民にとっての山北高校の存在意義について

もともと町立の高校として始まった歴史もあり、町民は高校が山北町にあることを誇りに思っている。生徒が多く通っていることで、高校の立地している向原地区から岸地区にかけては、にぎわいも生まれている。

町長になる前から、高校と銀行の支店の存続は町にとっての重大事項だと考えてきた。

（２）　山北町の人口減少対策や地方創生について

定住人口を増加させることが難しい中で、交流人口を増やすことが重要。観光もその一翼を担っている。交流人口を増加させるためには、今ある資源を活用することと、新しい資源を生み出すことの２つがポイント。この２点について、高校生の意見を聞いてみても良いと考える。高校生ぐらいになると、結構冷静に見て、斬新なことも考えられると思う。

高校生の目から見て、町の活性化のために資源をどう生かすべきか、町の将来像をどう考えるかなど、町づくりへの意見を聞いてみたら、町行政や町民にとっても刺激になるのではないか。

（３）　山北高校と山北町の連携について

高校側は、町に対して、具体的な連携について、もっといろいろ働きかけても良いと思う。町会議員との連携を深めることも良いと思うが、町行政の執行部を動かすことが大事。執行部を動かす活動につなげてくれるような議員を見つけ、連携するのも一案かもしれない。町側にやる気を起こさせるような発信を学校ができると良い。

（４）　山北高校に通う山北町外からの生徒への働きかけについて

山北町の資源を勉強してもらうのが大事だと思う。活用を考えてもらえればもっと良いが、知るだけでも意義がある。

以上

○山北町教育長　石田浩二氏　インタビュー記録

Ⅰ　日時：2020 年 12 月 17 日　14 時 45 分～16 時 10 分

Ⅱ　場所：神奈川県立山北高等学校

Ⅲ　聞き手：本多正人（国立教育政策研究所）

渡邊恵子（同上）

丹羽勇人（東京大学大学院工学系研究科修士課程２年）

Ⅳ　インタビューでお話しいただいた内容のポイント

（１）山北町行政あるいは山北町民にとっての山北高校の存在意義について

もともと町立の高校として始まり、移転前は山北町の商店街が高校生の通学路で、我が町の高校というイメージが強かった。現在地に移転後、また、神奈川県立高校の入学が全学区制になった後、山北町や町民にとっての存在感がやや薄れていたことは否めない。それでも、山北町の総合計画や教育大綱には山北高校との連携が明記されており、町のイベントやお祭りに高校生にボランティアで参加してもらったり、避難所として防災訓練に参加してもらったりなどの連携は行われていた。

（２）山北町の人口減少対策や地方創生について

子育て支援や廃校活用、教育特区による通信制高校の誘致などを行っている。また、東山北駅付近に 1,000 人の住民増を意図した住居環境の整備も行っている。さらに、新東名高速のスマート IC が清水地区に出来ることに伴うその一帯の開発などが構想されている。

（３）山北高校と町の教育行政との連携について

現在、０～５歳の育ちを体系的に捉える施策を進めている。次の段階は小学校、中学校ということで、０～15 歳一貫教育・保育の構想を進めているところである。その次の段階としては、高校との連携教育も考えられると思う。

（４）文部科学省事業が山北高校と町との連携に与えた影響について

この事業を始めたことで、町が山北高校との協働の考えを改めて意識し始めたと思う。12 月議会で山北高校などの町と関係する資源をもっと活用したら良いのではないか、といった山北高校に関連する質問が出た。これは教育長在職７年半で初めてのこと。町役場も、山北高校との窓口課を決め、山北高校からその窓口課に連絡をもらえば庁内の連絡調整ができる体制ができた。次の段階としては、町の課題意識を高校生が考え提言してもらうことが重要だと考え、新東名高速のスマート IC の建設中の現場を高校生に見学してもらう機会を設けた（その後、2021 年１月からの新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴う神奈川県における緊急事態宣言の発令に伴い、中止）。一歩ずつ、着実に連携が深まっていると思う。

以上

５　学校だより「山高」（山北町内全自治会に向け回覧用として配付）

# 山高

足柄上郡山北町向原2370
神奈川県立山北高等学校
TEL 0465-75-0828
令和2年10月
Vol.1
山北高校HP

## 山北高校創立80周年に向けて

今年はいままで想像もしていなかった年となりました。新型コロナウィルスへの対応には、生徒の皆さん、保護者の皆様、そしてそれを支えてくれた地域の皆さんや関係団体の皆さんのご協力があってできました、本当にありがとうございました。まだまだ感染は収まり切れず、第3波の心配はありますが、まずはここまでのお礼を申し上げます。

さて、1942年に町立の女学校としてスタートした山北高等学校。2022年には開校80周年目を迎える歴史と伝統のある学校です。現在、全校生徒約640人が在籍し、毎日「着実に努力」を積み重ね、活き活きと学校生活を送っています。

校長　藤田 正樹

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

**現2年生の活躍が下のQRコードからご覧になれます！**

## 探究活動(SDGs)について

山北高校では、「すべての人に健康と福祉を」を軸に<**未病**>、<住み続けられるまちづくりを>を軸に<**地域防災**>として探究活動に取り組んでいます。

**【山北高校が受けている指定】**

①文部科学省指定
**「地域との協働による高等学校教育改革推進事業【地域魅力化型】」**
(令和元年～令和3年度)
※全国20校のうちの1校として指定

②神奈川県教育委員会指定
**教育課程研究開発校(「総合的な探究の時間」に係る研究・SDGs(持続可能な開発目標)をテーマとした展開に係る研究)**

これらの指定への取組みは、山北町を始め、国立教育政策研究所等様々な機関・団体が注目し、バックアップしてくれています。学習効果が上がったかどうかなども、専門家が分析し、本校の教育課程や指導体制の見直し・改善を図っています。

本紙は学校HPから見れます♪

# 【新着情報・お知らせ】

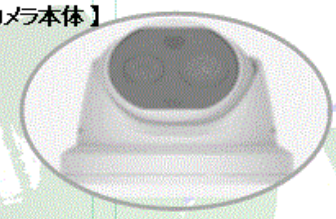
## ～サーマルカメラの導入～

令和2年9月9日(水)サーマルカメラを導入しました。

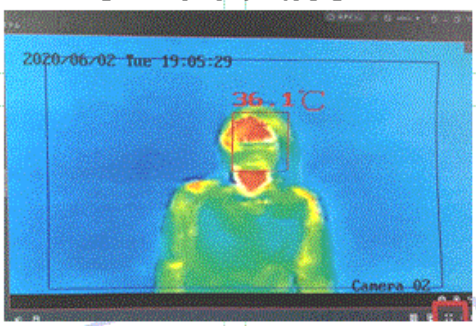
**サーマルカメラとは**

表面温度を確認できるもので、カメラの前を通ると右画像のように非接触での体温チェックが可能となります。

【導入したカメラ本体】



【モニタリング中の様子】




今後、学校行事や、昇降口などでの定点観察、部活動などで来校する教員や生徒などの体温チェックをスムーズに行うことができます。

## ～新型コロナウィルス対応～

6月8日より夏休み中も毎日、健康観察表に記録をして、発熱や風邪などの症状がある場合には、登校しないように指導しています。また、各クラスに消毒アルコール配布、トイレや階段、教室のアルコール消毒を、教師主導で生徒と協力して、感染の対策をしています。

【アルコール消毒中の職員】

YAMAKITA HIGH SCHOOL Since 1942

## 第１回　部活動の紹介【弓道部】

毎年、関東大会等で輝かしい功績を残す弓道部。今シーズンは、コロナの影響で大会がすべて中止となっています。その代替大会として、9月6日(日)神奈川県の3年生部員を対象とした大会が行われ、3年生が女子個人で6位、7位の成績を収め、有終の美を飾りました。

**10月 校外活動**

10月15日(木)　地域貢献デー　(13時30分～15時)
1学年が学校周辺地域の清掃活動を行います。

10月23日(金)　1学年フィールドワーク　(9時～15時)
河村城趾や洒水の滝周辺で探究活動を行います。

回 覧

学校だより Vol.2
令和2年11月

# 山高

足柄上郡山北町向原2370
神奈川県立山北高等学校
連携推進室
TEL 0465-75-0828 山北高校HP
TEL 0465-58-0001

## 山北高校の紹介動画ができました

123, 456, 789回再生・2020/10/01

山北高等学校
チャンネル登録者数　300万人

**ぜひご覧下さい**

学校紹介動画が、動画投稿サイト「youtube」に掲載されました！
インターネットで「山北高校　紹介動画」と検索したいただくとご覧いただけます。
URLはこちら→https://www.youtube.com/watch?v=DxYlkeqfCdA

## スケアードストレイトの実施

10月９日にスケアードストレイトが校内で行われました。自転車での事故体験をスタントマンが実際に行ってくれる体験教室で、1学年の約200名の生徒が参加しました。スタントマンの迫力ある演技で、実際事故が起きてしまう様子を見ることができ、貴重な体験ができたと思います。

**スケアードストレイトとは**
事故現場を再現して、
交通事故を未然に防ぐ活動

本紙は学校HPから見れます♪

# 【新着情報・お知らせ】

## 1年生の活動

10月16日(金)地域貢献デーとして、1学年が東山北駅や学校周辺の清掃活動に取り組みました。ゴミよりも落ち葉の方が多く、秋を感じた清掃活動でした。今後もきれいな街になるように、美化活動を続けていきたいと思います。

地域の皆様、山北町役場の皆様、ご協力ありがとうございました。

## 2年生の活動

10月15日(木)山北町役場、幼稚園、介護施設等をグループで訪問し、コロナ拡大後の生活様式についてインタビューを行いました。「イベントの開催」や「リモート勤務による視力低下」「介護施設での面会」「環境保全」など、前もって生徒がつくった課題について回答をいただき、ありがとうございました。貴重な意見は、これからの未病への普及に役立たせます。

## 山北町会議員来校

10月８日(木)、町会議員６名の方が学校訪問で来校されました。当日は、文科省から指定を受けている地域創生に向けての意見交換を行いました。その後、１学年、２学年の各教室の生徒の発表を参観されました。

ご訪問くださいましてありがとうございました。

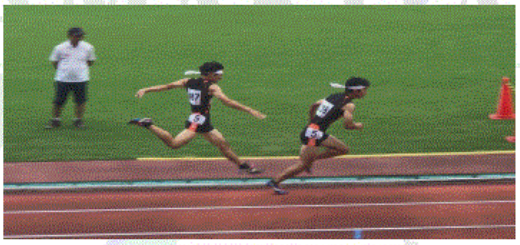
## 第2回学校説明会

10月３日(土)に今年度２回目の学校説明会を行いました。今回は、約200人の中学生・保護者の方々にご来校いただきました。多数の方にご参加いただきありがとうございました。新型コロナウィルス感染対策に配慮して、当日の様子はインターネットでの配信を予定しています。

## 部活動の紹介【陸上部】

今年は新型コロナウィルスの影響で３年生の代替え試合から始まりました。

９月に行われた新人大会では、競歩で県大会７位、冬季競技大会では、２年生女子小川さんが1500ｍ・3000ｍで２冠と成績を収めています。11月には丹沢湖で神奈川県高校駅伝大会が行われます。ぜひ、応援をよろしくお願いいたします。



## 11月の行事予定

11月６日(金) エアロビクス講習会(生徒のみ)
11月12日(木) ２学年フィールドワーク
(10時40分～15時)
山北町役場、丹沢湖、洒水の滝等
11月14日(土) 第３回学校説明会（９時～12時）

次号は、12月広報やまきた掲載予定です。

６　広報「やまきた」令和２年 12 月号掲載（地域に向けての取組紹介）

# 山北高等学校★フィールドワーク

令和 2 年 10 月 23 日(金) 1 年生 196 名の生徒が、「山北町を知る」をテーマに探究活動を行いました。

※ 探究活動 の取り組み

「すべての人に健康と福祉を」を軸に <未病>

「住み続けられるまちづくりを」を軸に <地域防災>

ご指導してくださった皆様、温かく見守っていただいた地域の皆様有難うございました。

※ 地域を教材とした課題解決型学習を行っています。

1年生「知る」
➡ 山北町を知って課題の発見

2年生「探る」
➡ 実現可能な地域おこしプロジェクトの提案、解決策の提案

3年生「実践する」
➡ 改善策の検討・政策提言

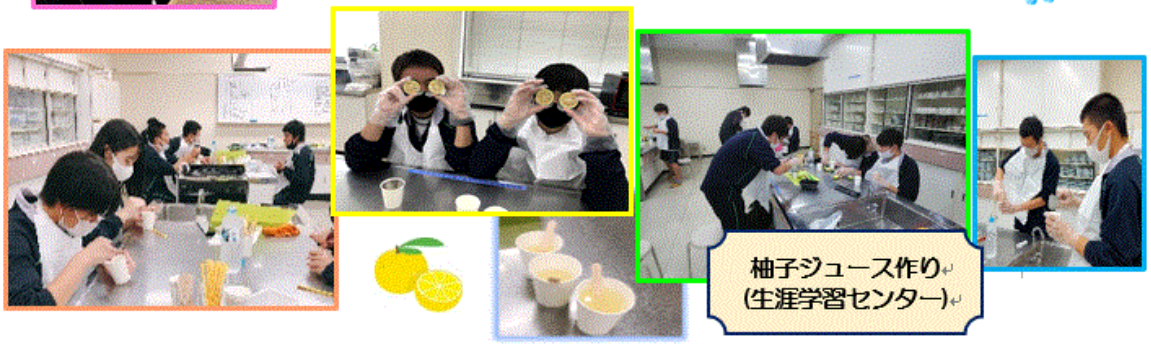
※詳しくは山北高校 HP をご覧ください。

農業体験　柚子狩り
(酒水の滝近隣農園)

森林セラピーロード
(河村城跡コース)

竹弓鉄砲作り
(生涯学習センター)

竹ぽっくり作り
(生涯学習センター)



柚子ジュース作り
(生涯学習センター)

本報告書は，文部科学省の委託事業として，神奈川県教育委員会が実施した令和２年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型)」の成果を取りまとめたものです。

したがって，本報告書の複製・転載・引用等には文部科学省及び神奈川県教育委員会の承認手続きが必要です。

付録部分に掲載した国立教育政策研究所からのインタビュー記事につきましては、許可をいただいて掲載しています。

令和２年度

文部科学省事業

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）

研究開発実施報告書（第２年度）

令和３年６月発行

発行者　神奈川県立山北高等学校

〒258-0111　神奈川県足柄上郡山北町向原 2370

Phone　0465-75-0828　　Fax　0465-75-1770

https://www.pen-kanagawa.ed.jp/yamakita-h/